

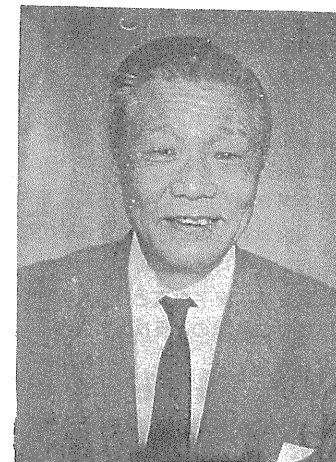
高知県災害異誌の刊行に当って

本県は、古くから全国有数の災害県といわれ、県民がそれぞれの時期においてどんなに苦しい目にあっただかは、なまなましい記憶とともに貴重な体験として残っています。

『災害は忘れたころにやってくる。』といわれていますが、本県にあっては忘れるいとまが無いほどに、毎年のように風水害等の襲来をうけています。

防災対策は、過去の災害の歴史を十分に考察したうえで策定することが極めて重要であります。この度前高知地方気象台長角谷久五郎氏の労作、絶大なる御努力により本書を刊行することができました。災害対策はもちろんのこと農林、水産、土木、交通等々、本県各方面で活用されることを祈ってやみません。

昭和41年10月1日



高知県知事

木岡 健二

凡例

1. 本誌の内容

- (1) 主に本県の災害記録を集めたが、資料の出所から次の二編に分ける。
前代編(古代から明治14年まで) 古記録を基とする。
近代編(明治15年以降) 気象観測資料による。
- (2) 引用文献は文頭に〔 〕で示し、その一覧表は巻末に掲げた。
- (3) 最後尾に極値表、災害事項索引、年代索引等を付記した。

2. 前代編

専ら土佐に関係ある記事を集めたが中には参考記事も多少あり之等は△で区別した。又顕著現象には◎印を附した。

- (1) 年月日の新旧対照は神田茂編年代対照便覧により、その表現は邦歴(西歴)とした。
- (2) 災害は普通広い範囲に亘るので関連地域も注記した。
但し火災に就ては高知では1000戸、郡部では500戸以上を集めた。
- (3) 尚古文で漢字を主とするものは文意を損はない仮名書にしてある場合がある。
- (4) 方位、時間の対照は次の通り。

方位	北	東	南	西
	子	丑	寅	卯
	辰	巳	午	未
	申	酉	戌	亥
	九	八	七	六
	五	四	三	二
	一	二	三	四
	五	六	七	八
	九	一〇	一一	一二
	一三	一四	一五	一六
	一七	一八	一九	二〇
	二一	二二	二三	二四
	二五	二六	二七	二八
	二九	三〇	三一	三二

3. 近代編

高知測候所(又は高知地方气象台)と県内の気象観測所(測候所其他)の資料によつた。

(高知測候所の創立は明治14年12月)

- (1) 平年との比較は高知県気象70年報の累年平均値を主とし、昭和25年以降は80年累年平均値を使つた。(従つて最後尾の極値表等と多少相違するのは統計期間の取り方の違いによる)
- (2) 高知測候所の雨量の日界は(県内観測所では9時であるのに対し)21時又は22時になっているが、必要がある場合は9時日界も注記の上使つてある。
- (3) 測候所に於ける台風時の極値は次の略字型式で表わす。
(最低海面気圧P)(日降水量R)
- (4) 気圧について
(a) 台風の規模を表わすための示度は、上陸直前のものである。
(b) ミリ(mm)、ミリバール(mb)の換算は(昭和24年までミリ、昭和25年からミリバール)
mm 750 745 740 735 730 725 720 715 710 705 700 690
mb 1000 993 987 980 973 967 960 953 947 940 933 919
- (5) 被害は主に県警調べによる。文字や単位の明瞭な場合又は直前に示したものと同一もの等は略した。
- (6) 米麦収量は凡て反当樹目(斗升)で示したが、最近は次によつて重量に換算されている。
米一石 150.0キロ 小麦 13.6875 大麦 108.750 裸麦 138.750
- (7) Mは地震規模(マグネチュード)、+印は震源位置(東経、北緯)

前代編

西紀 旧歴 月日(現歴)

- ◎ 684 天武12 10 14(11 29) 南海道沖大震 (M8.4)
〔理科年表〕 民家多く倒る。土佐の田苑12^{km}海となる津波あり(13.4E 32.5N)
〔日本書紀〕 山崩れ河涌き諸国建物の破壊数う可からず 人民六畜多く死傷し伊予の温泉没して出でず土佐国田苑五十余万頃没して海となる 11 18土佐国司申す大汐高く昇り海水飄蕩す これによりて運調船多く放失す。
〔注〕 頃(しろ) 昔は田5歩より稲一束を得ると定めこれを一しろとする。従つて250歩(一段)は50頃、50万頃は1万段に当るが大室律令により一段を360歩に変え、豊臣氏又300歩に変えて現在に至つていたので1万段×300/360=1.2万段=12^{km}
- △ 706 慶雲3 7 飢 (本県の名は出ず)
〔続日本紀〕 東海 東山 北陸 山陰 山陽 南海六道飢ゆ 使を遣はして賑恤す
- △ 763 天平宝字7 干ばつ
〔続日本紀〕 八月勅して曰く 去才霖雨 今年亢干五穀登らず 米価踊貴す 是により百姓稍飢饉に苦しみ加うるに疾疫を以て死亡数多 朕之を思い毎々情深くいたむ 宜しく左右京五畿内七道諸国今年の田租を免すべし
- △ 764 天平宝字8 干ばつ
〔続日本紀〕 8 19(9 19) 山陽南海二道干疫
- 770 宝龜1 7 飢
〔続日本紀〕 秋7月土佐国飢えこれを賑給す
- 774 宝龜5 7 飢 (京及び13国)
〔続日本紀〕 秋7月若狭土佐二国飢
- 778 宝龜8 7 風雨
〔続日本紀〕 宝龜9年3月3日土佐国申す 去年7月風雨大いにせまり四郡百姓の産業損傷す 加うるに人畜流亡屋舎破壊す 詔して賑給を加へ給へ
- 782 延暦1 3 飢
〔続日本紀〕 春武蔵淡路土佐等国飢え並びにこれを賑給す
- 797 延暦16 3 飢
〔続日本紀〕 武蔵土佐国飢え使を遣はして之を賑給す

- 798 延暦17 凶作
〔日本後紀〕18年5月詔して曰く 去年登らず其の被害の最も甚しき処南海道諸国等11国は去年の田租を特に全免す
- 810 大同5 飢
〔日本紀略〕2月因幡 土佐二国飢使を遣して賑給す
〔注〕〔日本凶荒史考〕大同三、四年連干登らず 本年春夏 諸国飢窮す
- 852 仁寿2 飢
〔日本凶荒史考一文徳天皇実録〕6月使を遣し土佐国飢危を賑給す
- △887 仁和3 7, 30(8 26) 南海道沖大震 (M 8.6)
〔理科年表〕庁舎てん倒し津波あり死傷多し(135.3 E 33 N)
〔注〕〔日本地震資料〕に五畿七道大いに震う、近海津波来襲し中にも摂津損害最甚、余震日を経れども止まらずとあり本県も被害をみたと思われるが資料がない。
- 1128 大治3 不作
〔日本凶荒史考〕この年伊予、土佐、備前、加賀等国登らず
- 1150 久安6 風水
〔日本凶荒史考〕この年風水、諸国飢窮す〔本朝世期〕阿波、讃岐、土佐等11ヶ国司(1151年に)申す 失損により去年の落物を免除されんことを
- 1153 仁平3 不作
〔日本凶荒史考一合記〕翌久寿元年5月23日 紀伊、阿波、土佐等7国司申す 去年異損のこと
- △1181 養和1 飢
〔注〕〔日本凶荒史考〕に 去年春夏炎干甚だしく加うるに諸源勃興各地騒乱するを以て農耕時を失い道路又塞す。ために諸国大いに飢えこの年よりは疫病並び発し地方偏すうにあつて活計を失うもの出でて諸方に流浪す。然るに帝都は兵馬の中にあり、救恤のことなく諸院蔵人或は僧 綱有官の輩にして尚飢死する程なれば一条より九条 京極より朱雀に至る間に死する者四万二千三百と註せられ、市中人相食ひの惨あり、放火強盗大に行なわれ翌寿永元年秋に至るも尚止むところを知らず
- 1224 元仁1 8 18(10 2) 大風 (近県記事なし)
〔百練抄〕或人云う 土佐国一宮、去る8月18日以後22日に至る大風大木などてん倒す。この日神殿以下一字を残さずてん倒すと
〔注〕天仁1年(1108)とする説もあるが百練抄の編年が1300年頃なので上記の年号をとる

- △1230 寛喜2 飢
〔注〕〔日本凶荒史考〕この年夏秋寒令行なわれ諸国六月雪降り、七月霜あり、八月風水、稼穀大いに損し草木萎枯すること冬の如し 加うるに冬温暖にして筍生じ麦黄熟す。また蝗・蝻等才末に至るも声を収めず時候の辰和甚しきこと古今未だ曾てあらず
諸国大いに荒飢す。越えて翌三年春より疫病並び行はれ飢疫して死する者極めて多く京中餓死者道路に滿ち餓民或は禁中の饌を奪うあり その惨状治承養和以来と称せらる。東国また甚だしく執権北条泰時救恤にこれ力めたるも疫弊真永元年秋に至るもやまず
- 1247 宝治1冬 大寒 (近県記事なし)
〔池川年代記〕冬より春にかけて長々と大寒打ち続き迷惑のあまり暖所を改め住宅す
- 1254 建長6 7 18(9 1) 雷雨 (近県記事なし)
〔池川年代記〕正八ツ時(14時)俄に四方より雲立ち塞ぎ闇の如し、神風、神雨忽ち起り風は一しまきにて止り迅雷荒雨さくくるが如く光る事只燃ゆるが如くに打続き夜九ツ下刻(1時)迄凡そ六ツ時が間鳴続き誠にすざまじき事也、是により諸人信心に志す。
- △1259 正元1 飢
〔注〕〔日本凶荒史考〕これより先元嘉元年(1257)炎干甚だしく、同二年陰冷六月寒風冬の如く、秋風水の災ありて連年登らず、加うるに是年より飢疫並び行はれ諸国死する者極めて多く、或は人相食むの惨あり飢死者道にしき、翌文応元年秋に至るも尚やむところを知らず
- 1265 文永2 7 17(8 29) 風雨 (近県記事なし)
〔池川年代記〕14日より17日朝の四ツ時(10時)まで風雨激しく止む時なく中にも17日無上の荒風にて大木根こげ中折れ屋傷む 洪水にて山岡崩れ風にすかされ表はただ枯山となれり
- 1281 弘安4 7 18(8 3) 風雨 (近県記事なし)
〔池川年代記〕18・9日古今稀なる風雨洪水にて山崩れ大木根こげ中折屋毎吹破られ野山は追々焼立の如く枯れ渡りすざまじきことなり
〔注〕この風雨は元寇の大風(7 1)に先だつ12日
- 1286 弘安9 8 8(8 28) 夕焼 (参考記事なし)
〔池川年代記〕夕方西火照りただ火の如く雲中までかがやき次第にうすくなり夜に入ほど消ゆる。9月下旬おわる。
- 1293—94 永仁1冬 大寒 (近県記事なし)
〔池川年代記〕10.26(11.25)夜大雪山々白妙となる。11.26(12.25)大雪降り 続きもつとも半日一日折々 隙有といえども寒風はげしく日々に打続き12月25、

6日(1月22、3日)雨となり、少しやわらぎ又々27日より大寒、河間氷り
合い屋内の使い水まで氷り正月16日(212)より和ぎ春となる。

- ◎1361 正平16624(83) 南海道沖大震 [M8.4]
〔理科年表〕 摂津阿波に津波被害あり流失家屋死者多し(135E 33N)
〔日本地震資料—土佐国編年紀事略〕 高塩香美郡田村下庄正興寺に上る
古文書等多く流失す。
〔注〕 阿波の由岐では1700戸流失60人死(東由岐の康歴碑にその戒名を記載す)

- △1420 応永27 干、飢
〔注〕 〔日本凶荒史考〕 去年関東屢々風水の災あり この年諸国干畿内西国特に甚しく淀川乾涸して渡船なし ために農稼焦枯して大いに飢荒す
越えて、28年春より疫病行はれ天下飢疫して死するもの多く東洛死骸を踏みて通行するといふ。

- △1460 寛正1 凶作
〔注〕 〔日本凶荒史考〕 去年夏秋炎干のち屢々風水の災ありて登らず
時に兵乱の故を以て道路梗塞し天下飢窮す。
との年陰謀、五六月陰冷冬服を着するの時候兵和あり いなご風水の災重りて大いに凶荒し飢疫並び行はれ諸国死するもの多く、就中備美伯三国大飢して人相食むの惨あり 京洛また甚しく寛正二年夏に於ける路上餓死者八万二千と称す。

- 1604 慶長9713(88) 風雨 (近県記事なし)
〔阿蘭梨曉印置文〕 不時頓に大風吹来り洪水湧く、山の竹木を吹倒し諸の作物根葉を枯らし家微塵に吹なし、山は河となり湖川は山と埋れ人の首を吹切るほどの大風なれば深山幽谷の民等土木におされて死するもあり、或は半死半生の消息凡て国土の人民何万とも計られず
〔注〕 曉印は讃岐国福宗の人権大僧都でたまたま安芸郡崎の浜村談議所に客寓中だつた。

- 1604 慶長98閏8 風雨
〔曉印置文〕 84(828)大風洪水 浜の砂を吹上げ(東海道風水)
閏828(1021)大風洪水(近県記事なし)

- ◎1605 慶長91216(131) 南海道沖大震 [M7.9]
〔理科年表〕 死5000 大津波あり 阿波突喰にて溺死3800 房総半島4km余り干潟となる。(二元 1349E 33N 140.4E 34.3N)
〔曉印置文〕 16日の夜頓に地震す 其夜半ばかり四海波す 大潮入りて国々浦々破損滅亡す 崎の浜老若男女五十人波に流死す 隣在所を聞くに西寺東寺の麓の浦々にも男女四百人余り死す 甲浦は350余人死す、突喰に老若男女貴賤3806人死す 野根浦は仏神三宝の加護やらん潮入らず七不思議といふべし
蓋し伝へ聞くに東をうけ南向の国は皆潮入り 西をうけ北をうけたる国に地震斗

りにて潮入らず末永代の言伝へに書置く也
潮入る所は談義所の履脱ぎまで中里鍛冶次郎右エ門坪まで入り、川は船場名木の出川まで入り、八幡の大権現のらんかんの北の端まで打詰める。
〔佐喜浜を語る〕 10丈もある大波七度引く さらわれた男女54人
〔注〕 徳島県海部郡兩浦大岩碑文に高さ10丈の大塩来ること7度とある。

- △1606 慶長1191(102) 風雨(高潮) (中四国近畿)
〔古代記〕 829の夜より1日巳刻まで大風 尾州より東は少しの儀也。四国中国は大風浜辺は塩所々へ入り北伊勢も塩所々へ入、長島へ塩入らず大島へは塩入り

- 1626 寛永34-8 干 (四国其他)
〔龜 歴通記〕 〔高知市史、田野文化史〕 〔注〕 高知市史一重松版

- 1626 寛永38(9) 大雨 (14日諸国)
〔高知市史、田野文化史〕 8月大雨洪水 〔奈半利町史〕 堤防決潰 13年修築

- 1632 寛永985(918) 大風 (中四国)
〔史料綱文〕 土佐大風

- 1637 寛永1474(823) 風雨 (近国記事なし)
〔奈半利町史〕

- △1642 寛永19 凶作
〔注〕 〔日本凶荒史考〕 去今年諸国霖雨陰冷秋稼登らず 殊に奥羽北陸の地17年より連年飢荒して餓死に至るもの多く或は人相食むの惨あり 土工工商ら一衣まとうなく赤裸のまま界を捨て流離す 幕府令して飢者を助けて郷貫に帰らしめまた仮屋を設けてこれを收容し郷邑の酒造等穀類の消耗するを止め、しばしば下令して農耕を督励せり

- 1650 慶安36(7) 降毛 (4日諸国)
〔池川年代記〕 諸国異毛降り其形長さ4寸斗り 本黒中赤末白く馬の毛に似たる品也 見廻す内に5、6本又10本斗りも 有 木草の上々も降りかかりたる体也、7月中頃少し風雨して後はなし

- 1650 慶安3 病気 (高知県歴史年表) 疫流行
〔注〕 高知県歴史年表は以後高知県年表と略記する

- 1658 万治1819(916) 風雨 (九州・江戸)
〔御家年代略記〕 19・20日大風雨洪水 幡多郡田地水損高八千石余 死亡男女合せて12人 流家347 潰家684

1660 万治3 9 20(10 24) 風雨 (土佐より関東沿岸)
〔御家年代略記〕 国中大風雨 死傷多し
〔中村町史〕 大暴雨 岩崎堤防決潰し人家殆んど流失、家財道具は安並の石見寺山麓まで流される。八面宮と天神社の下の池出来る。

1661 寛文1 7 8 洪水 (近県記事なし)
〔御家年代略記〕 7 5(7 30)洪水田畑一万余石の損毛
8 20(9 13)上町水入り潮江天神東堤切れ真如寺総門倒る

1661 寛文1 10 19(12 10) 局地地震 (近県記事なし)
〔御家年代略記〕 御城内破損

1662 寛文2 6 29-7 2(8 13-15) 風水 (近県記事なし)
〔御家年代略記〕 2 9日 2日両度の洪水により田畑4万石損毛

1663 寛文3 4 4(5 11) 降雹 (近県記事なし)
〔曉霞村史〕 香美郡の被害大
〔注〕 1. 夏九州伊予近江武蔵大干
2. 幡多郡内川筋大洪水の記事あるも月日不明尚5年9月同様の記事

◎1666 寛文6 7 4(8 4) 風水 (伊予、九州)
7 10(8 10) 風水 (近県記事なし)
7 15(8 15) 風水 (16日尾張、美濃、江戸に記事)

〔徳川実紀〕 土佐中村の地7月4日、11日、15日洪水
田畑3万石水害を被り男10女27人、牛馬579匹溺死し民屋2037軒、船17流亡
〔玉露叢〕 (7月)3日4日5日両三日 土佐の国又甚雨強風に付いて損田5千石余あり、並に家数830軒流亡、船数73艘破損なり、溺死52人 井川除堤大破520ヶ所なり、右の洪水に付ても山内修理亮居所の畑(中村市)も総地形よりは一丈余り水かさ上り待屋敷並に民屋の棟の上を一面に水突揚げて田畑損亡おびただしき事なり
○ 10日、11日土佐又々風雨夥しくして田畑損亡し人馬死すとなり
○ 14日、15日此両日右同断なり 然れ共松平土佐守よりは今に注進なければども是れ隣国よりの沙汰なり
〔日本凶荒史考一庵有院殿御実紀〕 土佐国も二、三日大水人馬死傷
22日山内修理亮忠直所領土佐中村の地7月4、11、15日洪水田畝3万石水害を被り、男10人女27人、牛馬579 匹溺死、2037軒、船17流亡せる由注進す。
〔龜屋通記〕 7月3、4、10、11、15 土佐洪水七郡損耗 流家損船死人多
被害合計 土地56,600石(13,920石永荒 42,680石余当一作荒)米四万石、

井関川除9,050所、家流6,158、船119、流材69,400、薪43,600把、紙楮3,820目、風失人119、牛176、馬506、山内修理太夫領内3万石の内
地高24,700石(8,460石 永荒16,240石当一作荒)米22,230石、井関川除
1,200所、破損家2,037、船17、人37、牛165、馬414流(以上8.16改)

〔南路誌〕 数々風水洪水あり 七郡の損耗流失夥しく田畑の損害8万1,300余石、死傷151名、百姓年貢を4分6と定む(注 これは所得を4、納入を6とすること)

〔注〕 〔大海記〕に7.8大風水 大川筋小川谷々つえ埋り大川筋家皆流失、人牛馬流死、中村下町大堤防切れ家一軒も残らず町は川原と成り死人夥しき事也とあるが日付ずれるか

1667 寛文7 風雨 (近県記事なし)
〔高知年表〕 西部風雨損傷 〔大野見村史〕 洪水の為萩中河内大明神破損(12年再建)

1668 寛文7-8 火災
〔安芸郡史考〕 12.14(1.27) 佐喜浜民家50余焼く 〔高知年表〕 3.2(4.13) 久礼浦150戸

1673 寛文13 5(6) 洪水 (中、四国、九州)
〔高知年表〕 水害
〔注〕 1. 〔万天日録〕この月阿波土佐讃岐(外七国)大水
2. 伊予風水13、4 17、8日

1674 延宝2 8(9) 風雨 (16日九州、伊予、中部関東)
〔室戸町誌〕 月中二度暴風雨漁民大分に痛み(尚翌年5、6月に風雨記事あり)
〔注〕 〔山鹿素行日記〕8.16(9.15)四国、中国、九州各大風高汐、東国1.8日大風

1676 延宝4 7(8) 風雨 (4日、四国近畿以東)
〔室戸町誌〕 又々暴風雨、相次ぐ天災のため沿岸1,600軒潰家、田地数千百石損(室津港の堀次大普請は翌5年3月から7年6.16に及び人夫3040.63人を要した)

1678 延宝6 7 18(9 3) 風雨 (伊予 豊前)
〔徳川実紀〕 土佐高知大風雨にて支封山内大膳亮豊明が所領(中村)をかけて民屋3,095 頗廢し堤防800間、船20艘損ず
〔注〕 引続いて(9.19) 九州、四国、東海に暴風雨を起こしたが本県に記事なし

1679 延宝7 火災
〔下川口村誌〕 下川口浦中残らず焼

1681 延宝 8 12 12(1 31) 火災
〔安芸郡史考〕 安芸郡大火 250戸

△1681 天和 1 凶作
〔戸波村史〕 洪水甚だし

〔注〕 1. 〔日本凶荒史考〕去秋風水 冬厳寒雪多く諸国荒飢す。この年また氣候順ならず風水の災あり、ために穀価騰貴して窮民飢餓する者多し、就中京畿地方最も甚だしく翌二年に至りて餓死者道に遍しといふ
2. 7. 20 8. 14近県に風水あり

1685 貞享 1 12 14(1 8) 火災
〔須崎郷土〕 50戸

1685 貞享 2 11 26(12 21) 火災
〔高知年表〕 宇佐浦大火

1687 貞享 4 9 9(10 14) 大雨高潮 (中四国一関東)
〔統南路誌〕 大雨あり 沿岸津波打入る

△1695 元禄 8 凶作
〔注一日本凶荒史考〕 この春寒冷、夏霖雨又洪水あり、秋大雨 早寒して諸国稔らず 奥羽北陸諸国殊に去今兩年凶荒し 窮民餓死に至る者極めて多く津軽地方の惨人或は寛永以来の大飢といふ

1696 元禄 9 9 24(10 19) 火災
〔大内町史〕 柏島大火 126戸焼く

◎1698 元禄 11 10 6(11 8) 火災 (元禄の大火、寅年の大火)
〔高知市史〕 この日の午の刻(正午)頃城西、北奉公人町一丁目より出火、西の悪風雲を捲き火勢猛烈、火元より東郭中は大手門より中島町に至り、町方は大鏡屋橋に至るまで南北両町を全焼して東農人町 新町に及び日暮に至つて漸く鎮火、侍屋敷 198、寺院 15、町屋 1,948焼失

1699 元禄 12 閏 9 12(11 3) 火災
〔弘列筆記〕 未の刻(14時)種崎町より出火 風なく殊に白屋なれ共去年のこと思ひ出し逃げる用意のみして火を救う者一人も無く大火に及ぶ
弘小路、鱒町、紺屋町、新堀町焼け怪我人なし

1700 元禄 13 6 30(8 14) 突風 (近県記事なし)
〔土佐故事雑纂一南路誌 6 2 卷〕 朝辰刻(8時)丑寅方より大風砂雨を飛ばすが如し、巳の刻に申酉の方より大風黒雲煙の如く捲き上げ火煙かと疑う所 西町四丁目より

大屋小屋将棋倒しに吹潰す。就中北奉公人町二丁目より東は寅年大火事焼止る所まで南北少々残る。北は渋谷次兵衛、南は森三右エ門より東川岸端まで残らず捻倒し大方は諸道具も行方不知に飛行す。其外町々屋根吹き剥れ捻切れたる家数を知らず。

東は野市辺 西は仁淀川限り大風、其外は少々風の雨、幡多中村等は能い加減の冷風雨は能き程うるおいにて悦びけるとぞ

御家中 156軒内 14軒潰、151軒破損 過人 56

町方 1518 " 303 " 1215 " 死 2

郷中 2412 但し濱家破損家は悉く記す及ばず 死人 2

浦中 616軒内 35潰(浦戸、種崎、ミマセ、赤崎、岸本迄也)

船 25損害の内 8大破、17小破

1700 元禄 13 7 22(9 5) 大波 (伊予 風雨)

〔弘列筆記〕 大波風 東は瀨之浜、三津、椎名、西は須崎より西分大風 勿論諸郡山分大風也 此日室津、吉良川辺の漁船浦戸沖にて難風に死人百余人 尤も幡多郡浦辺にて破損船死人過分都て百六十六人死人有之也

1701 元禄 14 夏 干・飢 (伊予)

〔御家年代略記〕 4月より6月まで干ばつ國中人民困窮 飢人多し

1701 元禄 14 8 16(9 18) 大雨 (四国~中部)

〔御家年代略記〕 16、17日洪水 損毛十余石に及び吾川郡上八川村、清水に山崩れあり 8人死、牛馬 4匹埋る。

〔平尾文庫一玉仙院様御行状記〕 未の刻より大雨翌朝まで止まず、17日午刻より大雨処々堤井関破損山崩る

1702 元禄 15 2 3(3 1) 天文 (近畿、白気)

〔南路志〕 夜より暫らく西より東へほうき星の如くなる雲立つ、十日ばかり毎夜でる

1702 元禄 15 7 28(8 21) 風水(高汐) (中・四国、北海道)

〔南路志〕 28、29両日大風大雨にて民屋、耕作の損傷寛文6年より大にして被害甚大

〔御家年代略記〕 潮江並に弥右エ門潮田堤切れ浦手高汐

〔弘列筆記〕 破損夥し、浦々漁船流され怪我流死少なからず、是より餓人多し

1702 元禄 15 8 30(9 21) 風水 (讃岐、九州、中国)

〔高知市史〕 29、30日大風大雨大雷にて弥右エ門潮田下知新町潮入る 本年両度の風雨損亡高 10万6千石余、荒荒地高 2千石

△1702 元禄 15 凶作

〔注一日本凶荒史考〕 去年陰冷風水の害ありて奥羽、東海、畿内諸国登らず。この夏

又天候和順を欠き秋大風し西は九州より北は北海道に至るまでその害を被るもの多く異爰尚翌年に至るも廃止する事を知らず。就中陸奥国連年凶荒して餓死する者少なからず

1703 元禄15 12 14(1 30)、20(2 5) 火災

〔高知年表〕 城下火災

〔弘列筆記〕 14 日(翌年1.30)酉の刻細工町東横町より出火、東西両側横町、新市町、蓮池町等都合五町焼ける。114軒、20日酉の刻浦戸町より出火、朝倉町、西新堀町等数町亥の刻までに焼ける6百軒あまり、同夜安芸浜40軒、22日夜小高坂北町より出火13軒

1703 元禄16 凶作

〔弘列筆記〕 春に至つて飢人次第に増し2月お救小屋に入る者2千余人

〔高知年表〕 窮民のため小高坂、長浜、黒島、中村に救小屋を設く

〔注〕〔日本凶荒史一元禄救民記〕元禄16年の春に至つて飢人次第に増し、一國忽ち難苦に及ぶ。先々公儀の御慮を開かれかの窮民を救い給うに正月も過、二月に成れば飢人亦多く御救小屋に入者二千余人、其後米穀益々乏しく田地扣家獻持たる者自然に窮迫す。されども御救小屋に入事を恥て飢死に及ぶといへども救屋に入らず非命の死を遂る事彼等が罪にあらず。

我政事の不正より天是を罰し給うならん此罰我一人にあり且は君たるの道に非ず且は国の恥辱ならん

打続きたる国の疲今再ら彼等を救う可き便もなし、詮ずる所我が方衣食を賤め貯へ来る所の着物悉く他國へ出し米穀に代へて國中を居ながら扶持すべし

其上にも手にあい難くば我故に数万人の命失はん事弥天の恐あり、所詮領國を返し奉つて関東の御救を申受けむと御身の咎一つに帰され、宥来りし御能道具を始め凡て御物数寄の品々此時に至て悉く上方へ登せ御売私有て米穀に代へ来る。

かく御心を碎かせ給う故執事の人を初め小役人に至るまで何事も振捨て國中の民一人も餓ぬ様に了簡す。凡居ながら御扶持を賜はる者此殿御一代の内七部の死十二万人に及ぶと承る。

されども御心之なく思召し時も有けるにや御城内を忍び出させ給ひ賤しき者に御身をやつし近郷村を廻り民の難儀を聞せ給う事兩三度に及ぶ

1703 元禄16 8 18(9 28) 風水 (伊予其他)

〔平尾文庫一玉仙院様御行状記〕 大風、國分川筋洪水、処々堤防切れ大津介良辺まで人家に押し込み八幡村にて家2軒流る 西部は風雨

1704 宝永1 2 19(3 24) 火災

〔弘列筆記〕 寅刻紺屋町北側より出火、播磨屋町、鯛町、鍛冶屋町、築屋敷、魚棚町、材木町、弘岡町等数ヶ町卯の刻に焼落ちる

1704 宝永1 7 1(8 1) 風水 (近県記事なし)

〔御家年代略記〕 朔 4日、17日風雨洪水 損亡地高8万石

〔南路志〕 6.30雨 酉の刻大雷雨 申下刻(17時)より大風雨 翌7.1(8.1)大風雨洪水

〔注〕 4月17日は伊予に風水あり

1705 宝永2 2 12(3 7) 大雪 (近県記事なし)

〔山田文化小史一秦山集〕 古今稀な大雪山田野を埋む

1705 宝永2 6 19(8 8) 風雨 (近県記事なし)

〔玉仙院様御行状記〕 19.20大雨につき安喜川、伊与木川、北田野・奈半利、野友川、吉良川筋1丈2尺水増、伊与木、安田、野友辺にては流家28軒、9人死(安田中山にて保佐伐日履小屋にまかりあり山潰れ埋れ死す)

1705 宝永2 6 27(8 16) 風雨 (26日東海道)

〔玉仙院様御行状記〕 風雨のきざし以ての外なり 五台山に祈誓す 夜半より晴れる

1705 宝永2 11 14(12 29) 火災

〔弘列筆記〕 子の刻 小高坂越前町より出火 南川原まで焼抜き築屋敷・片輪町一丁目、北奉公人町、本町、水通町、通町、南奉公人町、尚御郭へ火移り金子橋筋、本町、横町、中島町、上南川原堤阪まで火 寅刻(4時)焼落ちる。

〔玉仙院様御行状記〕 家数680軒余

1706 宝永3 6 25(8 3) 風雨、塩害 (福岡・広島)

〔御家年代略記〕 22日より雨 24、5日風雨甚大にして損毛8万余石

〔南路志〕 大雨 塩風夥しく吹き野山の草木枯れて冬の如し

1707 宝永4 7 4(8 1) 風雨 (近県記事なし)

〔弘列筆記〕 終日大風雨

1707 宝永4 8 19(9 14) 大風(高汐) (九州・広島・伊予)

〔玉仙院様御行状記〕 18日子の刻(2時)より東北より風吹き翌五ツ(8時)に辰巳の方より大風、四ツ(10時)時分より未申の方より大風、國中民屋潰家夥し、尤も大破損の家は一円也 貞享4年9月9日以来の風也 浦々は大波にて吸江種崎の町へ波上る

1707 宝永4 風雨

津呂室戸崎の浜湊大破損 下知、潮江、仁井田、高須堤悉く切崩

〔谷陵記〕 大風雨(柏島)

1707 宝永4 9 12(10 7) 風水 (岡山・讃岐)

〔南路志〕 藩内大風雨

1707 宝永4 10 4(10 28) 狂咲

〔谷陵記〕 8.19の大風雨の後より諸木花開き偏に春の如し、秋毎に風雨すれば花咲

くこと珍らしからずと云へども10.4を過ぎていよいよ草木生かへり山々は揚梅実を結び、野には筍生ること夏に齊し

◎1707 宝永4 10 4(10 28) 南海道沖大震 (M8.4)

〔理科年表〕 潰家死傷夥し(潰家29,000、死4,900)

九州の南岸より伊豆まで津波を受く。土佐にてその高さ20m余り、土佐西南部処々稲没、東南部隆起(135.9E 33.2N)

〔谷陵記〕 未の上刻(14時)大地震起り山穿ち水を漲し川埋り丘となる。

國中の官舎民屋悉く転倒す。逃んとすれども眩て庄に打れ或は頓絶の者多し、又は幽峯寒谷の民は岩石のために死傷する者若干なり、係る後は必ず高汐入る由云伝うなどつぶやく所に同下刻(15時)津波打よせて海辺の在家一所として残る方なし。未の下刻より寅の刻(4時)まで昼夜11度打来る也、中にも第3番の津波高く山の半腹にある家も多く漂流す。國中の死人二千余人

(部落災害記事の摘記)

香我美郡吉原浜の並松の外に古田出る 畔の形明らかなり 庄屋々敷より南西に当る。

土人曰く

この松杉は昔より当所の墓地にして常に7、8尺掘ると云へども終にかくの如き土なしと、著者探ずるに右の古田秦氏の地検帳にもらず何れの代没せしと云う事も拠なし上に三囲りの松樹生植すれば決して三四百年のものにあらず

種崎 一草一木残なく、南の海際に神母の小社残る誠に奇なり

溺死七百余、死骸海際に漂泊し行容衰傷に堪へず且つ臭腐忍ぶべからず

高知 御城は全し、潮江町は真如寺橋より北見通し限り 江ノ口堀筋は常通寺橋より、潮江川は常通寺島限り 新町下知は海となる

潮江 右内海分は初の打入し日より定潮となりいささかも干満なし 潮江、下知、新町、江ノ口より一宮、布師田、大津、介良、下田衣笠まで一般の海になり。船ならでは通路なし

宇佐 潮は橋田の奥宇佐坂の麓萩谷口まで、在家の後の町へ先潮廻りける故通路を失い溺死400余人

福島 在所悉く海に没し溺死1000余人

須崎 潮は山まで池の内村の池を近年新田とす。その溝渠深さ2間、横3間計り当所の故倉という処へ通る。初の地震に橋落けるにより湊より湧入る潮に溺死する者300余人 今在家も亡所

久礼 潮は南は大坂谷まで、中は常源寺の植松限り、北は焼坂の麓まで。市井三分の二海に没す 死人200余人

入野 潮は山まで この浜の松林は八幡加茂の両社潮入と云へども流れず。右松林は概より下田ノ口まで連続し一園の壮观なりしか所々切れ或は打折り根こぎにし又は根を洗い出しける故大半は枯木となる
林の中間に古より潮満ちくれば横20間計の江湾ありけるが高潮堀りうがちて横4.5丁の海となり町6丁程上に波打際となる。此村の地高1300石、谷々に残るところの田畑僅かに90石、里人生業を失うも理也

中村 地震に家3分の2倒る。潮は町窪まで渡川の潮は岩崎脇田の池隈下ノ加江 潮は莖の木まで浜より行程一里 故に市井は海底に沈み船を多く繋ぎぬれば外に記すことなし

〔亡所の浦63(総浦数99) 郷42 湊3大破〕

(公儀差出之写) 流家11,170 潰家4,866 破損1,742

死者1,844(男561 女1,283) 傷者926(男

809 女117) 流失牛馬542 流失米麦24,242

石 濡米麦16,764石 船損害768

流失材54,600本 損田45,170石余 井陶川除堤

損4,109所 流失板橋188

〔弘列筆記〕 未の刻ばかり東南の方おびただしく鳴つて大地ふるいづ。其のゆりわたること天地も一つに成すかと思はる。大地2.3尺割れ、水湧出し、山崩れ人家潰ること将棋倒しを見るが如し。諸人広場に走り出づる5人7人手に手を取組といへどもうつぶしに倒れ、3、4間の内を転ばしあるひはのけになり、又うつぶしになりて逃走することやすからず

半時ばかり大ゆりありて暫止る。此の間に男女気を失うもの数知らず、又暫くしてゆり出しやみてはゆる幾度という限りなし。凡そ一時の内6、7度ゆりやまり間も筏に乗りたる如くにて大地定まらず。割りさけたところより泥水湧き出し世界も今沈む様にぞ覺ゆる。其の時半時ばかりあつて沖より大波押し入ると声々に呼ばり上を下へとかへし近辺の山に逃げ上る。

〔須崎町史〕 須崎浦に入り来りし潮は半山川筋(新莊川)は下郷の中天神の上4.5丁の所に及び多郷は加茂宮の前、吾井の郷は為貞まで何れも川添いに侵入せり。土崎は在家悉く流れ押岡神田は之に次ぎて人家の流失あり、池内村は在家被害なく須崎の死人400余人あり、かくも死人の多かりしは乳池より出る堀川の橋地震に落ちし所へ潮入り来り人々渡る便なく後より大勢押掛け堀川へ押込まれて大半死したり、乳の池には死人流れ集りて筏を組める如し。刈谷の後に長さ數十間斗の大坑を2列に堀り屍を埋めたり

〔須崎宝永津波溺死塚〕 此の塚は昔宝永4年丁亥10月4日大地震して津波起り須崎の地にて四百余人溺死し池の面に流れ寄り筏を組むが如くなるを池の南路に長き穴を二行に掘り死骸を集め埋め有しを今度百五十年忌の折に此の所に改葬するもの也。其の事を管んとする折しも安政始のとし甲寅十一月五日に大震して海溢しけるが昔の事を伝へ聞き且つ記録もあれば人々思い当りて我先にと山林に逃げ登りければ昔の如く人の損じは無かりしなり。

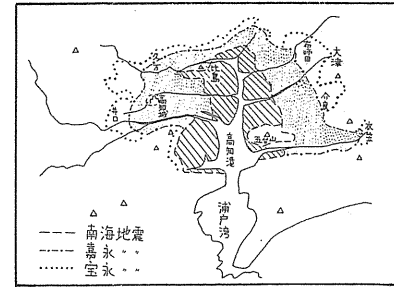
只其の中に船に乗り沖に出でんとして逆巻波に覆され三十余人死したり、いたましき事也、何なれば衆に洩れて斯はせしというに昔語りの中に山に登り落ちかかる石に打たれ死し沖に出たる者悉くなく帰りと云う事の有を聞き語りしたためしもの也、はやく出で沖にあるはしらず此の時に当りて船出するは危かるべし、戒むべき事にこそ、昔の人は地震あればとて津波のくるを辯へず波の高く入り来るを見るよりして逃げ出したれば後れてかくの如き難に逢へり、哀にもまた悲まざらんや、地震すれば津波は起るものと思ひて油断はすまじき事也、されど震り出すや否や波の入るにもあらず。少しの隙は有ものなれば震の様を見計ひ、食物衣類の用意して、さて石の落ちざる高き所を選びてのがるべし、されども高山

の頂きまで登るには及ばず。今度の波も古市 神母の辺は屋鋪の内へも入らず、昔は伊勢力松にて数人助かりしと云えば津波とてさのみ高きものにもあらず。是等百五十年以来二度までの例なれば考にもなるべきなり、今度此宮をなすの印、且後世斯る折に逢わん人の心得にもなれかしと衆議して石を立て其の事を記さん事を予に乞う。依て其のあらましを挙て為に書付るもの也

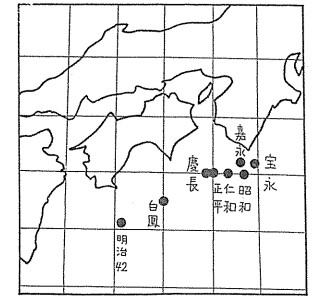
安政三年丙辰十月四日 古屋尉助識

付本願主 發生寺現住 智隆房松園
世話人 龜屋久蔵 鍛冶活助 橋本屋吉左門

- 〔注〕 1. 〔日本大地震年表〕はこの地震を有史時代の最大の地震としている。
2. この年は暖冬で当日も極暑のように暖かかった。〔弘列筆記〕別項狂咲参照
3. 津波は引汐で始まった。〔末世可考事〕に俄に磯より沖へ三丁余りもひき其儘大汐入る（羽根八幡宮板書に同文あり）
4. 津波の高さは〔弘列筆記〕に初度二度目は強からず三度目の波高さ7、8丈斗り、此波に磯御殿残らず流失するとあり、尚〔日本大地震年表〕今村博士の調査では室戸6.5m、安芸5.6、種崎2.3、久礼2.5.7
5. 余震〔宮地氏日記〕の記録では宝永4年9.3巳刻、13日同10.4本震、11.16酉中刻最大の余震5年1.1時々閏1.2以来少しづつ閏1.21今に昼夜一兩度宛は絶えず唯少々のことなり 同2.7 2.15 18 22 25（頗る大震）27 3.1、4.7 8、5.10 18、6.10 16、7.13 22、9.5 15、11.20 12月上旬日夜小震
- 6年1.12、2.20 30、3.11稍強し、4.22二回頗る大、年内時々、7年に入つても止まず。
6. 本震後11.23富士山爆発して宝永山を生む。
7. 室戸地区の隆起は〔弘列筆記〕に津呂室津の辺は又7、8尺も爾来よりゆり上げ高くなる。これより津呂の港船の出入ならず通路不自由なる故急に御普譜ありしかどもとの如くならず、と書かる。室津港番役（久保野家）の港内潮位記録は地震前満潮1.4尺、干潮8.5尺、震後の宝歴9（1759）8.7：3.6 明和3（1766）1.3：6.5～7とあり。
- 沈下については〔丁亥斐記〕に当国の内種崎より宿毛までの内浦に大汐入り赤崎辺より上分灘手は少々宛入る所もあり、又〔谷陵記〕に精しい。
- これらを取りまとめ〔土佐古今の地震〕に高知以東隆起地1、以西陥没地2.1（市街地6 田苑1.2 土地3）とする。
8. 高知城下の汐入りは〔弘列筆記〕に御城下廻り堤打越え押切り大潮入込み西は小高坂、井口、北は万々、久万、秦泉寺、薊野、一宮、布師田、東は介良、大津の山の根まで一面の海となる。この地震は城下廻り6、7里がうち大地7、8尺斗りゆりさげ低したり、愛宕山の麓にて鱒、鱈、王余魚（かれいの類）などおびただしく取りしと、〔谷陵記〕は北は一宮仁王門まで、南は雪蹊寺の院内までとし〔聞出文盲〕は高知地形より2丈も潮高き程なり、大御門前まで海の様になるとありこれらを図にした〔高知市〕（中沢誠一郎）ものを次項に転写する



高知平野の津波浸入図（「高知市」より）



瀬戸内海の震央図

〔宝永地震記〕 大震静まると思海辺雀がはまへの方より逆浪渦巻来り、灯明堂まで浪先湛へ、種崎量瀬の諸家を押し流し、浦戸の町を一掃し、桂浜の御殿は礎も残さず打流し、長浜西孕の迫戸宇津野前八幡の渡まで汐先来る。北は久枝下田衣笠法師鼻吸江前葛島高須を押廻して布志田村石緑村懸川比島を上りに江口瑞応寺の石垣まで汐入り、山田橋より上は堀詰の舟着を越越し本町二丁目の横町まで汐来る。山田橋より石緑までは舟にて往来す。汐汐の時は歩にて渡と云へども裸に不成ば通り難し。三首より吸江の渡りまでの間なる長堤は以ての外に崩れて汐の通路となるに付て其の後は堀詰より各舟にのりて吸江へ渡るに、本の堤は所によりて汐の深さ一丈余も有之と也。堀詰北町の鰲は不及言諸人吾先にと家を捨て、小高坂山塩江山へ北上り急難を遁る。暫くは此方彼方の山中に住して、幕を張り柿蓆等を曳て夜を明し、日を暮すこと数日なれば、夜は狼籍を恐れ行燭を照し、書は己己が家に帰りて、濡れたる家財を持運混乱せしむる為体、前代未聞の地震也。

9. 〔宝永地震記〕 四日の朝当所左川の魚商人、以南須崎浦入赴て其の日も魚船の帰帆を待所に、震潮震災に逢い、左川へ帰る道すがら、大魚細鱗汐に酔て道路の岸根に被打上たるを数々拾取て来る。彼大浪之甚敷事五、六尺宛之大魚無限被打上潮に酔て悉く流死す。渚汀は如是也と云ども、海上は静にして遙之沖に懸りたる他国之廻船は見物していたりとや。彼舟に助け上げられたる数多之瀆陸に帰て語ぬるは、船中の者共物語を聞に、地震否海底の鳴とひとしく地海の境より潮の涌を一二丈にして、浜表砂地に在程之家は柱を地底へ落込軒端限地へ居りたりとや。

地震に土砂穿て如是乎。沖の舟より陸へ浪の上るを見積りに高さ一町程も逆登と見え、又陸に居て入来る浪の高さを見積りに雲へ与えたる様に思はれたりとや。大浪静りたる跡までも小山程宛潮之涌所多数也。他国之懸舟も湊に入れれば悉く破損し商物不残流失する間海辺住居の鰲は賈賤貧富奴婢僕從僧百姓に至迄皆一同に辛き目に逢たる事無優劣。

1707 宝永4 塩作
〔弘列筆記〕 6月永雨の後晴れて、東は安喜辺より潮江村、江ノ口、杓田、夫より西
辺も同然稲夥しく虫付く、併し稲に障り申さず結局今秋豊年なり。

1708 宝永5 3 14(5 4) 降毛 (松山・大阪)
〔日本地震資料一外山私記〕 高知町中白毛降る。晩申の下一刻(17時)より黄昏に至
る。白毛の長さ6寸を長とし4寸或は2寸3寸、一色白く透き通つて白熊の如し
当国に限らず大阪、松山城下にも降ると也

1708 宝永5 5-6(6-7) 風雨 (5、6日伊予風水)
〔太平寺覚書〕 度々風雨出水

1708 宝永5 火災
〔高知年表〕 城下赤岡、安芸火災あり。〔弘列筆記〕 11.2.8(翌1.8)子の刻浦戸
町より出火五十数軒火く。〔安芸郡史考〕百余戸火く

1709 宝永6 1 19(2 28) 火災
〔玉仙院様御行状記〕 下の茅大火 129軒火く

1710 宝永7 3 14(4 12) 雷雨
〔平尾文庫一南路志抄〕 大雷、大雨、洪水

1710 宝永7 4 17(5 15) 洪水 (近県記事なし)
〔御家年代略記〕 大雨 洪水

1710 宝永7 8 3(8 27) 風水 (伊予・讃岐)
〔御家年代略記〕 風雨洪水
〔室戸町誌〕 秋大風 西寺の仁王門、浴室など倒れ浦分の家いたみ激し

1712 正徳2 7 17(8 18) 大雨 (近県記事なし)
〔南路志〕 17-20日大雨止まず 洪水雷鳴 21日晩方は晴れる
〔太平寺覚書〕 7、10月両度大風雨(10月近県記事なし)

1713 正徳3 3 18(4 12) 火災
〔高知年表〕 赤岡浦大火

1713 正徳3 風水 (近県記事なし)
〔南路志〕 3 11(4 5) 7 24(9 13) 25 大風雨洪水

1713 正徳3 夏 干ばつ (島根・加賀)
〔南路志〕 閏5 27(7 19)より7 12(8 21)まで日数45日大干、野山草木枯
れ作付大半損失、中でも山分の畑作には一品も痛まずという事なし、何才も覚えぬ

日照の由

〔注〕 1 原文 4 27とするも日数合わず閏5 27は土用の入り(加賀大干初日)
7 12 西国大風雨につきこの間をとる
2 尚 翌 4 年に干ばつの記事山田文化小史にあるも近県記事をなし或は本年の誤
りか

1714 正徳4 7 29(9 7) 大雨 (近県記事なし)
〔南路志〕 29.30 大雨 大雷 洪水

1714 正徳4.8 8(9 16) 風水(高汐) (伊予、近畿、東海道)
〔南路志〕 大風雨大波鳴る上灘区しけ申し夜須浜の辺は大変の潮より高く堤を打越す

1715 正徳5 6 20(7 20) 風水 (21日伊予)
7 18(8 16) 大雨 (近県記事なし)
〔南路志〕 6.20 物部川大風雨洪水 甲内堤切れ東の堀内へ押込み民家数軒流る
死人あり、其の水仁淀川七合、鏡川六合、物部川九合の由 7.18終日終夜大雨止
まず大洪水

1715 正徳5 8 12(9 9)・11 8(12 3) 雷雨 (近県記事なし)
〔南路志〕 8.12 大雨洪水 酉刻より戌下刻まで(18-21時)大雷雨止まず
11.8 申上刻(16時)より雨夜中大風雨洪水、戌刻より子中刻まで(21-1時)
引切らず雷雨止まず前代未聞也

1715 正徳5 12 火災
〔南路志〕 3日(12 28) 御小人町大火三百五六十軒焼ける。火元南奉公人町二丁
目。通町3、東川筋、水通2、東川端焼ける。8日高岡、一宮も残らず焼ける。夜
中より百余火く。

1716 享保1 7 16(9 1) 風雨 (近県記事なし)
〔平尾文庫一享保雜記〕 16日大風雨 17日は終日雨、雷鳴
〔注〕 17日は二十日と当ると注記あり(現歴と一日差ある模様)

1716 享保1 10 上 土降 (6日伊予)
〔享保雜記〕 須崎浦土降る

1717 享保2 4 22(6 1) 風水 (近県記事なし)
〔享保雜記〕 21日夜より風雨、翌22日大風雨洪水

1717 享保2 9 29(11 2) 雷電 (近県記事なし)
〔享保雜記〕 未上刻より申上刻まで(14-16時)当国大雨激降り大雷鳴火玉飛ぶ

- 1718 享保3 火災
〔安芸郡史考〕 2月甲浦東股111戸(破壊消防を行なう)
〔高知年表〕 閏11 3(12 23)宇佐浦大火
- 1721 享保6 閏7 5(8 27) 風水 (伊予)
12(9 3) 風水 (近県記事なし)
15(9 6) 風水 (中四国 関東)
〔享保雑記〕 3日より雨 4,8風雨 12,15洪水、西分は夥しき洪水、家・人・牛馬流、30年以前の水に3尺5寸高き由、諸国洪水の由。
〔中村町史〕 5日より15日まで度々洪水あり、作物被害甚だし、町内の浸水は地上6尺、人が山に逃れて2日間野宿す。
〔田野文化史〕 田野西へ水入り新町の鼻崩れる。
〔注〕 1. 30年前の風水見当らず。或は1887か。
2. 12日(9.2)近県記事なきも10日中国近畿風水あり。
3. 15日(9.5)伊予の風水の害大(死72、流家889、3.5万石損)
- 1722 享保6 12 29(2 14) 火災
〔高知年表〕 城下通町火事 〔享保雑記〕 470軒
- 1722 享保7 梅雨期 洪水 (近県記事なし)
〔享保雑記〕 3 18(5 3)、4 3(5 17)、5 28(7 11)洪水
- 1722 享保7 6 23(8 4) 洪水 (四国・山陰・奥羽)
〔日本災異誌一御家年代略記〕 土佐洪水
〔享保雑記〕 去年七月の洪水より一尺も高し
〔中村町史〕 昨年に倍する大洪水、往年この兩年の洪水を丑寅の洪水と呼ぶ
〔注〕 中村市では俗に〔丑寅の洪水もさだちより起り、源平の戦も狂いより起る〕と云う。さだちとは俄雨のこと。
- 1722 享保7 7 10(8 21) 風水 (四国洪水)
〔享保雑記〕
- 1722 享保7 飢きん
〔高知年表〕 〔注〕本年は上記の外8 23(10 3)四国風水あり、或はこれ等多数の災害によるものか。
- 1723 享保7 12 5(1 11) 火災
〔佐川町史〕 曉子の刻(0時)古市町傳屋太兵衛西隣隠居より出火、風烈しく大火となり、待町は野田藤太郎宅まで町並は奥の土居限り、東へ焼ぬけ光明寺も亦、105戸

1723 享保8 5 2(6 4) 雷雹 (春諸国雹)
〔享保雑記〕 終日曇雷雹 未下刻(15時)高知霰降る。大きさは6分より7分5厘から8分、鏡川より西降らず。

1724 享保9 3 28(4 21) 火災
〔高知年表〕 柏島浦大火
〔享保雑記〕 百四五十軒焼く
〔注〕 〔大内町史〕翌10年柏島大火100戸の記事あり、或は混同か。

1724 享保9 4-6 干ばつ (四国全県記事あり)
〔享保雑記〕 33年来の干ばつの由
〔注〕 34年前の元禄3年夏畿岐備前大干

1725 享保10 4(5) 長雨 (近畿)
〔曉霞村史〕 3月干、4月長雨 麦作被害

◎1727 享保12 2 1~2(3 23~24) 火災
〔高知市史〕 1日午の下刻(13時)城西・越前町・伊野辺方より出火、折からの西南烈風にあおられ火道数条に分れて東方に延び、高知城は大門を過ぎて三の丸、二の丸より遂に本丸に延焼して全郭烏有に帰し永国寺町に及ぶ。城西郭中の北部より江ノ口は尾戸・大川筋・愛宕町に至り、京町・種崎町・農人町・山田町・鉄砲町まで延焼せり。
二日未の下刻(15時)又々昨日の火元伊野辺の南隣りより出火、烈風北西より吹付けたれば郭中は帯屋町の北側、南側の東半部、鷹匠町の西一郭を残すのみにて他は凡て焼失す。町方にては昨日焼残りたる堅堀より唐人町雑喉場に至るまで一戸を余さず焼失し、尚余炎潮江村に及び農家290余戸を延焼せり。実に開市以来未曾有の大火にて、全市一朝にして焦土と化し光景惨憺を極む。
1日焼失分 侍屋敷205 町方1,163 郷分397
2日 " 187 1,304 325

1728 享保13 凶作
〔平尾文庫一前野氏家記〕 6、7月諸国共雨繁、土佐7月より虫付或は出水、立毛を押し過分の傷み、御國中2/3は御検見を願出、其の上薬くさり色好きものなし、4、50年以來の凶作なり、然れ共天下御政宜しきにや米30匁、345匁には過ぎず。
〔注〕 1681(天和1)凶作あり

1728 享保13 6 22(7 28) 雷雨
〔前野氏家記〕 大雷前代未聞、高知外数ヶ所に落ちる。然れ共過人なし。

1728 享保13 火災
〔高知年表〕 この年下茅、佐川、中村大火

- 〔佐川町史〕 2. 19(3. 29)九ツ(12時)頃古市町豆腐屋より出火、烈風のため西は奥の土居を限り札場まで延焼、青源寺も亦、所々飛火し城山へも延焼、七ツ半時(15時)漸く鎮火、町家196、寺3、侍家24、その他計225
- 〔中村町史〕 4. 7(5. 15)午の刻中村下町(西下町)残らず焼(凡そ130軒)
4. 21 午の刻三町(本・上・紺屋・京町・中ノ丁等の総称)残らず焼(40軒)

1729 享保14 4 17 (5 14) 火災
〔高知年表〕 福島浦大火

1730 享保15 7 24 (9 6) 風雨 (四国 山城 北陸)
〔室津湊番役日記〕 夜大風雨 室津浦御米蔵一軒3間10間吹潰、地下屋敷60軒吹潰す。宮地幸六蔵御分一御蔵ならび是も吹潰す。もつとも波は小波他。

1730 享保15 8 27 (10 8) 風雨 (29日関東・東北)
〔曉霞村史〕

1730 享保15 病氣
〔前野氏家記〕 8月頃より國中風病其後おこり又疹一面にはやり老若貴賤を分たず悉く病む、此の暮までも絶えず。

1731 享保16 風雨 (7. 11阿波、8. 10阿波・伊予)
〔曉霞村史〕 3月、7月、8月風雨洪水 藩内73戸流 490石濱田 5万石損毛
〔室戸岬町史〕 8. 10(9. 10)風水

1731 享保16 火災
〔高知年表〕 是年種崎町、久礼浦大火

1732 享保17 9 28 (11 15) 雷雹
〔前野氏家記〕 風雨洪水雷鳴、高知辺は驚く程の事も無かりしか野田、立田、物部、大埔、野市、赤岡辺は大雷にて雹降り野菜、二番作悉く打倒れ人家二、三軒潰れ人も痛みたる由御郡方へ注進之有、但し一円には之れなく在所の内痛まぬ処も有

1732 享保17 10 13 (11 30) 火災
〔佐川町史〕 夜五ツ時(20時)古市町より出火、侍屋敷・光明寺並に町家等154軒

◎1732 享保17 飢きん
〔御家年代略記〕 うんか虫甚だしく國中立毛 損毛 飢きん
〔前野氏家記〕 お国許大飢きんにて郷中は申すに不及高知町々まで困窮相極め、長浜非人小屋杯は充滿したる由、其節宇津野坂より長浜へ行く道にて行倒者其の数を知らざれ共上々様にも是程の飢きんにて候故御救いの儀相かね
〔南略志〕 麦作より大傷、秋作至極に悪しく御國中他国ともウンカという虫付、御邸

中毛捨つ。

〔高知市史〕 幕府より1.5万両を借りる。長浜中村の救民小屋で12.8万人を救う。

〔注〕〔日本凶荒史考〕去冬寒氣薄く氣候暖ならず、此年春より6月までしばしば降雨淫湿のち陰冷行はる。この頃より九州・四国・中国に蝗害起り漸次畿内に波及し公私領その災に罹るもの極めて多く、収穫半に満たざるもの46藩も算し、九州最も甚だしく所により収穫皆無に終れるあり、

幕府すなわち諸侯及び家士に金録を恩貸すること3.4万余両、米穀を賑貸すること3.4万余石、及び一方には金品の義捐を勧誘し、また時疫食毒の処方分ちいつて救荒の万全を期したり

これより先諸国連年豊熟穀価低落せるを以て士農困窮す。

諸侯又これと同じければ米穀を賤み力めて外に出しついで凶才に遭う。故を以て救荒の法良しきを得ず公領の餓死者を出さざりしに比し、飢疫して死する者極めて多かりしと云う。

〔同上一大阪市史〕 2. 9. 28 諸侯本年の取得平年に比し1/2以上を減せる者に金銀を貸与するを許し一万石より30万石以上まで所領石高の増加するに従い、拝借金を二万両以上二万両まで九等に分ち、江戸若くは大阪に於て便宜に従い払い渡し、明後19年より5ヶ年賦を以て償還すべしとし、次いで之を万石以下の士に及ぼしたり。この拝借金に対し幕府は江戸及び大阪金蔵に貯へたる除金67万1800両余りを以て支払準備金とせり、之により拝借金を許可せられたる諸侯畿内に1、山陰5、山陽4、南海10、西海26人、又万石以下合計25人にして総額金34万1140両に上り11、12月間に貸付を了したり、とあり。

当国松平土佐守豊數もその一人で11. 15(?)に1万5千両借金している。この時の飢人は〔王徳広運録〕に969,946人(餓死人合せて7,048、牛・馬2353)内訳、伊予、安芸、備後、出雲、肥前、豊後、筑前、日向、石見、備中等であり伊予のみで飢人24万、死5,818を出している。

この時の米価騰貴は〔月堂見聞集〕石当り3.40匁が俄に65匁となり極月には百2.30匁位になりとあり、各地で救民が行はれたが当国でも〔高知市史〕翌18年春より困窮続出し殊に郷浦には餓死人夥しく藩庁より吾川郡長浜村に救護小屋を建て賑給したるに食を乞う者日々数万人に及べりと、城下は左程にあらざりしも、当時の惨状推して知るべし、と書かれている。

この飢きんは江戸三大飢きんの最初のもので米価上昇の波及により江戸で始めての民衆暴動があつた。

1733 享保18 2 26 (4 10) 火災
〔高知年表〕 下田浦大火

1733 享保18 豊作
〔前野家記〕 麦作可也、秋作豊年満々たる世とはなれり。

1735 享保20 虫害 (近県記事見当らず)
〔高知年表〕 この年領内の稲作虫害

- 1736 元文1 6 21 (7 29) 嵐雨 (6月讃岐、伊予の記事あり)
〔曉霞村史〕 21、2日風雨、国内損田240石
- 1736 元文1 夏 病氣
〔佐川町史〕 悪疫流行、死亡多し
- 1737 元文1 12 火災
〔安芸郡史考〕 1(翌1 1)夜八ツ時(2時)津呂浦市右エ門の表より出火、南方の湊番久保野家まで残らず焼け西端の大工太兵衛一軒残る
〔高知年表〕 5(翌1 5)城下通町火事
- 1737 元文2 6 7 (7 4) 洪水 (近県記事なし)
〔日本震災凶備考〕 土佐洪水
- 1737 元文2 閏11 2 (12 23) 火災
〔高知年表〕 須崎浦火事 〔平尾文庫〕 140戸
- 1738 元文3 5 9 (6 25) 大風 (備前)
〔南路志〕 朝六ツ時より五ツ過まで(6→8時)大風諸所の橋檻吹折れ古今の大風也
〔曉霞村史〕
- 1739 元文4 風水
〔南路志〕 高知洪水 真如寺橋南側切れ潮江村にて人家20軒流
〔曉霞村史〕 6-9月洪水
〔注〕 6 18(7 23)讃岐、安芸洪水
8 5(9 7)阿波、伊予其他に風雨あり
- 1740 文化5 火災
〔高知年表〕 3 21(4 18)城下 12 20(翌2 5)中村
- 1740 文化5 風雨
〔高知年表〕 被害甚だし
〔注〕 7 1(7 24)阿波、讃岐風雨あり、又8 5(9 25)四国、近畿、奥羽、北海道に風雨洪水。
- 1741 寛保1 火災
〔高知年表〕 1 13(2 28)宇佐浦 9 10(10 19)御免町
- 1741 寛保1 6 7 (7 19) 洪水 (近県記事なし)
〔高知市史〕 潮江真如寺堤30間ばかり切れ人家20余軒流失

- 1742 寛保2 1 21 (2 25) 火災
〔安芸郡史考〕 夜浮津八幡の西松本庄兵衛より出火、室津浦の御免より經元の多田半之丞の近くまで火け酒屋、願船寺庄兵衛御分一役場、御免の端の小屋僅かに残る。浮津170、室津112戸
- 1742 寛保2 飢饉
〔曉霞村史〕 連年の凶作で長浜の救民小屋を増築
- 1743 寛保3 6 19 (8 8) 雷雨
〔曉霞村史〕 大雷雨、4月より度々雨、国内損田21164石
- 1744 寛保3 11 27 (1 11) 天文
〔高知年表〕 彗星現れる
〔注〕 近世に現はれた大彗星の一つ、6本の尾あり
- 1744 延享1 12 火災
〔郷土須崎〕 12 6(1 8)193戸焼
〔高知年表〕 12 19(1 21)下田浦
- 1745 延享2 火災
〔高知年表〕 種崎町、志和浦、須崎浦
- 1746 延享3 8 23 (10 7) 風雨 (四国、山陰、江戸)
〔御家年代略記〕 藩内大風雨
〔注〕 ①伊予、阿波、讃岐では24日とする。②〔南路志〕延享年間汐風吹き諸作並にミカン、ユキカン、クネンボ等の類悉く枯るの記事あり、この風雨によるものか。
- ◎1746-7 延享3 火災
〔高知年表〕 久礼、志和浦
〔高知市史〕 12 6(翌1 16)城西、中須賀、紺屋より出火、上野より焼け始めて南街に及ぶ。
城下2185 郷分256焼け、死55
- 1748 寛延1 1 10 (2 8) 火災
〔安芸郡史考〕 佐喜浜民家150戸
- 1749 寛延2 飢きん
〔御家年代略記〕 去今凶作 飢人多し 3月長浜村に疲人小屋を建て数千人を救いあり。
〔注〕 1 寛延1 讃岐では干ばつに引続き7 21(8 14)、9 2(24)、16(10 8)大風洪水、又四国、九州、諸国凶荒

2. [高知年表] 1年 6. 28 家中俵約定を発す

- 1749 寛延2 5 21 (7 5) 洪水 (近県記事見当らず)
 [日本震災凶謹考] 土佐洪水
 [太平寺覚書] 洪水飢きん
- 1749 寛延2 10 22 (12 1) 火災
 [高知年表] 宇佐浦
- 1750 寛延3 4 (5) 大雨 (近県記事なし)
 [高知年表] 4月大雨洪水
 [注] 京都烈風の日をとれば4 13(5 18)
- 1750 寛延3 7 1 (8 2) 火災
 [高知年表] 下茅浦
- 1751 宝歴1 閏6 12 (8 3) 風雨 (近県に記事なし)
 [亀屋通記] 暴風雨、海上波浪荒れ船数十隻破損、死者百余人に及ぶ
 [田野文化史] 11日より大風
- ◎1751 宝歴1 閏6 18 (8 9) 風水 (四国)
 [田野文化史一福留喜惣太手記] 17日夜より大暴風雨大波、18日夜田野に水入り人々西福寺や岡地へ逃る。18日より19日まで水3回入る。立町辺り腰限り、前町7.8尺、20日朝より水引き午後家へ帰る。
 [物部村志] 12日、18~9日風雨洪水、物部川前代末閘の大出水、高知軒まで水
 [奈半利町史] 死23、船3
- 1751~2 宝歴1 火災
 [高知年表] 浮津、与津、佐川
 [佐川町史] 12. 29(翌2 13)
 寅の刻(4時)西裏町番所扣壁より出火、表裏町共東へ三反田、新町に焼抜け出来町少し残る、149戸
- 1752~3 宝歴2 火災
 [高知年表] 1 15(2 29) 城下八百屋町大火、324戸焼
 [中村町史] 12 23(翌1 26)大火、152戸焼
- 1753~4 宝歴3 火災
 [南路志] 4 17(5 19) 高知通町4丁目より出火、南奉公人町蔵下まで火く
 [高知年表] 12 12(翌1 5) 志和浦大火

- 1754 宝歴4 1 火災
 [高知年表] 久礼、須崎
- 1754 宝歴4 閏2 多雨 (近県記事なし)
 [南路志] 10(4 2)の夜より雨天 3 8(4 29)に日和に成り夜分降る。故28日中
 23日雨、麦作過分の傷に成る
- 1754 宝歴4 7 (8) 風水(高汐) (11(8 26)紀伊外風水あり)
 [日本震災凶謹考一土佐年代略記] 7月大風雨つなみ
 [佐川町史] 7月風雨高汐
- 1755 宝歴5 1 8 (2 18) 火災
 [安芸郡史考] 浮津大火、240戸、寺2戸
- 1755 宝歴5 病氣
 [大内町史] 大疱瘡流行
- △1755 宝歴5 凶作
 [注] この凶作は北日本に発生したが参考のため記載
 [日本凶荒史考] この夏霖雨降水して諸国損亡多し、就中奥羽地方は時候の展和甚しく六月尚冬服をまとうの陰冷行はれて秋に至る。このため諸作青立ちて熱せず遂に早霜の侵すところとなり大いに飢饉す。八戸、盛岡領等餓死する者極めて多くその惨状或は天正以来と称す。
- ◎1757 宝歴6 12 28 (2 16) 火災
 [高知市史] 中須賀より出火、上町及び郭中金子橋まで延焼、火災後井口の町家全てを杣田に移し新井口町(しんち)と称す。 [高知年表] 1. 3 7 6戸焼く
- ◎1757 宝歴7 7 26 (9 9) 風水(高汐) (中・四国、紀伊)
 [御家年代略記] 26日大風雨あり、滄々に激浪襲来し損害多
 [高知市史] 天守シヤチ落
 [真覚寺地蔵日記] 大風雨、大波、橋田一統に流れ寺門前の田に小舟入る
 [室津湊番役日記] 大波のため西波止場の上、外港廻り川筋打付腰巻の堤崩れ2374人役を以て修理
 [田野文化史一福留喜惣太手記] 大風雨洪水は先年より一尺余り増、壁根瓦吹散り御分一役場を始と潰家数十、新町へ波打込み大橋落ち水門下堤切れ寺町の向うへ川流れる。
 [奈半利町史] 大波、天神町の人家の半は打潰れ保佐、材木山の如く岸辺による
 [安芸郡史考] 郡内の死24、負13、家全潰451、半208、大破2250、浸水208、船大破22、堤防潰173間、道6ヶ所・95間
 [佐川町史] 未の下刻(15時)大風雨、近傍諸村被害大、斗賀野の潰家8百4、50

御城下千余軒、郷中1万3千余軒ならん(温故録)

- 1757 宝歴7 9 5 (10 17) 風水 (讃岐、紀伊)
 [田野文化史] 大波で東町の家3軒潰れ再建の御分一役場棟上げ翌日に倒れる
 [高知年表] 9月風雨洪水
 [物部村志] 7 26、9 5大風雨、御当箇の損毛73,500余石
 [曉霞村史] (日付なし)
- 1758 宝歴8 9 23 (10 24) 雷雹 (25日大阪、江戸大雷雹)
 [佐川町史] 昼九ツ時(12時)大雷これより雷を恐る者多し
 [曉霞村史] (月日不明)大あられ降る
- ◎1759 宝歴8 12 28 (1 26) 火災
 [高知年表] 要法寺火事 570戸
- 1760 宝歴10 火災
 [高知年表] 9 28(11 5)下田浦178戸 11 7(12 13)中村200
 余
 [注] [中村町史]に9年大火の記事あるも或は上記の誤りか
- 1762 宝歴12 5~6 干ばつ (讃岐)
 [曉霞村史] (尚本年疫病流行の記事もあり)
- 1762 宝歴12 6 26 (8 15) 風水 (中四国)
 [中村町史] 26日大風雨出汐 死者8、享保6、7年以来の大洪水
 [曉霞村史] お國損田8,815石
- 1763 宝歴13 9 火災
 [安芸郡史考] 13日(10 19)甲浦白浜の漁家124戸 24日(10 30)羽根浦
 の船場71戸 27日(11 2)野根浦164戸
- 1764 明和1 春 不作 (阿波)
 [曉霞村史] 麦作不良 お救米を下さる
- 1764 明和1 7 14 (8 11) 風水 (紀伊)
 [田野文化史] 14、5日風雨大洪水 田野水門より下の堤防切れ材木保佐入り田畑
 を埋める
- 1765 明和2 6 12 (7 29) 火災
 [中村町史] 伊勢屋目代、地藏寺、下町へかけ焼

- 1765 明和2 6 風雨 (26日阿波)
 [曉霞村史] 16(8 2) 26(8 12)風雨
 [太平寺覚書] 6 16 大雨大水 26又風水
- 1765 明和2 8 2 (9 16) 風水(高汐)(四国・近畿・関東)
 [田野文化史] 2-3日大風水 町に汐入 大橋、新町橋落ち橋本の家3軒流る 東
 町潰家数々
 [奈半利町史] 大洪水大波 堤防切れ水は庄屋の庭まで、流家数々
 [太平寺覚書] 2日大風大雨 3日寅の刻まで大風
 [曉霞村史] 大雨
- 1765 明和2 8 8 (9 22) 風水 (四国)
 [奈半利町史] 夜大暴風雨大洪水又堤防切れ前代未聞
 [田野文化史] 大風雨
 [室津湊番久保野家記録] 8月暴風雨のため室津西波止大破損、其他所々崩、
 翌年15ヶ所修理
 [曉霞村史] 風雨
- 1766 明和3 6-8 干ばつ (九州、四国、近畿)
 [曉霞村史] 大干 国内飢人1,500
- 1766 明和3 火災
 [安芸郡史考] 室津、浮津160戸
- 1768 明和5 5、8 風雨 (5月讃岐、9月阿波)
 [曉霞村史] 5 27(7 11) 8 30(10 10)風雨
- ◎1769 明和6 火災
 [高知年表] 2 3(3 10)城下870戸
 12 11(翌1 7)久礼浦244戸
- 1769 明和6 7(8) 天文
 [池川年代記] 東の方にほうき星出る 10月西に出る
- △1769 明和7 夏 干ばつ
 [注] 全国的な干ばつで阿波、伊予に記事あり
- △1770 明和8 夏 干ばつ
 [注] 全国的干ばつ、四国三県記事あり
- 1770 明和8 6 (7) 降毛 (諸国怪雨)
 [池川年代記] 無名の毛降る。長さ4寸余 長短あり、赤きこと栗毛の如し、未少し白く

馬の毛によく似たものなり、立ち所に7、8本、又12、3本も有、地面は元より草木の上にてふりかかる体也。7月始の雨にて止む

- 1772 明和9 8 20 (9 17) 風水 (中・四国~東海)
〔田野文化史〕夜より暴風雨長浜寺銀杏の大木本堂にもたれる。
保佐散乱し番人波にさらわる
〔眺霞村史〕風雨
〔注〕安永改元は11. 16
- 1772 明和9 豊作
〔室戸町史〕天気よくことの外豊年、鯉大漁の歳で悦ばしく目出度く限りなし。
- 1774 安永2-3 火災
〔高知年表〕2年12 30(2 10)吾川郡森山村民家120 倉15
3年1 13(2 23)須崎大火
〔郷土須崎〕198戸火く(茂衛門火事)
- 1774 安永3 春 大寒
〔池川年代記〕春50日無上の大寒也 2月末方(4月上旬)より雨となり和ぐ
- 1774 安永3 5 干ばつ (京都)
〔池川年代記〕17日(6 25)少し雨しろあり、益々空晴渡り無上の干ばつにて秋節(立秋)過ぎて雨降る。諸作種無し 大悪世也
- 1774 安永3 6 23 (7 31) 風水(高汐) (四国、近畿、其他)
〔田野文化史〕大時化 波入り流家死者あり
〔奈半利町史考〕大風雨大波 加納郷の磯辺の家21軒の内20軒潰れ、死3、漁船16流
- 1774 安永3 7 13 (8 19) 風雨 (7月伊予)
〔眺霞村史〕
- 1774 安永3 9 1 (10 5) 風水(高汐) (四国、丹但等)
〔田野文化史〕夜(4時)より大風大波打入り東町中芝前芝の家残らず崩れ、新町は波越え松の下の家と住吉前より西の家皆潰れる。
- 1777 安永5~6 火災
〔高知年表〕5年12 27(2 5)下田浦184戸 6年1 24(3 3)中村町大火147戸
- 1778 安永7 6~7 (7) 長雨
〔田野文化史〕6 20より7 7まで雨、豆は畑でくさり奈半利川川止め、通行人数

百田野大野間にとまる。

- 1779 安永8 7 1 (8 12) 風水 (近畿)
1779 安永8 7 22 (9 2) 大雨 (23日近畿、江戸)
〔高知年表〕1日大雨洪水 22-25日大雨洪水、天神の森、役堤防切れる。
- 1779 安永8 8 20~25 (9 29~10 4) 大雨 (24日東海道、東北)
〔田野文化史〕大雨 新町、浜田へ大波入り西福寺へ逃げる
〔室戸岬町史〕大雨 波高く家流
- 1779 安永8 10 1 (11 8) 降灰 (紀伊)
〔室津湊番役日記〕夜亥刻(22時)より灰の様なる砂ふり出し、翌昼頃までふり、夫よりXXくもり有之候共 朝のようには無之、右砂家々の内へ夥しく入、木の葉は勿論のこと屋頂まで七歩計り積り、前代未聞のことに候
〔注〕椋島の噴火による
- 1781 天明1 8 9 (9 26) 風水 (8月阿波)
20 (10 7)
〔田野文化史〕8 9未明より大時化大出水で奈半利川の古堤切れ町へ流込み、芝町の家5軒流れる。水は軒から椽まで西町で7~10尺、人々船で山へ逃げる。
8 20 夕方から大時化 内町分残らず岡地や西福寺へ逃れる。
- 1781 天明1 9 2 (10 18) 風水 (近畿記事なし)
〔田野文化史〕夜大時化 芝町の人逃げる。
- 1782 天明2 5 (6) 風水 (四国)
〔徳川実紀〕6月、さて今年春のほどより夏に至り淫雨やまず、諸国洪水の患少からず。さか中にも伊予、土佐の地は別て風雨激しく人畜田畝水患にかかること多し、海洋の風波常より強く船破ること百を以て数へつべし
〔高知市史〕國中数度の水害にて米穀稔らず
〔注〕4、5日(阿讃) 25日(讃)風雨、伊予5月風水の記事あり
- 1782 天明2 7 18 (8 26) 大雨 (17日伊予)
〔御家年代略記〕大雨洪水
- 1782 天明2 7 22 (8 30) 風水 (伊予、紀伊)
〔御家年代略記〕大風洪水 比島山崩れ人死す。
〔太平寺覚書〕大雨洪水
- ◎1782 天明2 凶作
〔日本凶荒史考〕この年春夏陰冷霖雨し諸国四分の減収を称へ西海特に南海、九州等大いに凶荒す。東北諸国また違作たりしも米価高を好幾とし余儲あるものは之を豊

國に出せり。然るに翌三年春より陰溼多雨暑氣至らず六月寒冷をもよほし京畿に於て尚冬服を着するの異例あり。また大いに風水して諸川氾濫し農稼を傷む。七月浅間山有史以来の大噴火あり 灰砂と泥流は信上武三州の田畑を害し里落を漂蕩す。諸國の陰冷この後己むことなく遂に早寒の變う所となりて諸國大いに飢荒す。わけでも東北関東は春來北東の寒冷風に終始し未曾有の大凶作となりしも余糧なきを以て泥道に堵なし餓死山野に相望む。弘前、八戸、盛岡の諸領最も凄惨を極め餓害にたへずして人相食むに至る。

超えて四年七八分の作、ところによつて豊作の間ありしも、麦収を待つ能はず、餓死するもの多く去年九月よりこの六月まで津軽一郡のみにて八万千七百余と数へられ、流亡の民また少からず。このため耕耘人なく田圃荒蕪するもの亦少しとせず五年夏東北霖雨、秋畿内東海諸國洪水、翌六年春夏陰霖し五畿内西國洪水あり、また六月寒冷或は冬の如く、七月関東未曾有の大洪水ありて諸國大いに凶荒す 越えて七年春又淫霖し、災變底止するを知らざるもの如し、故を以て米価非常の昂騰を來し諸民大いに窮す。幕府これより先しばしば命じて米穀諸色の買占置等を禁し、需給の円滑を期せんとするも前途を危むあり奸計の行はるるありて米穀動かす遂に細民諸市に蜂起して米商富家を襲撃しここに打こわしの暴動を起すに至れり。天明二年より七年に至る間、北は北海道より南流球に至るまで諸國頻りに飢荒し我國土殆ど完膚なかりしという。

〔高知市史〕 二年國中数度の水害で米穀稔らず、三年春以来米穀並に諸物価暴騰したので藩庁は困窮を救い物価の調節を図るため諭告を出す。

〔池川年代記〕 天明三年春夏秋打続き霖雨にて折々乾くと雖も雨露の乾く事なし。百姓耕すも草枯ること再々なし、春夏植付くる諸作は雨にやられ草にせられ終に消失せ生立つ事なし。秋の取入れと雖も雨におされ諸作も竿に掛け納屋軒下につり渡し実有ると雖も腐りすたり手に掛る物これ無し。無上の悪世にて諸人秋春となく迷惑すること限りなし。

四年春米 1 匁 5 分 (常 7 分)、麦 1 匁 (3 分)、黍 1 匁 2 分 (3.5 分)、稗 6 分 (2 分)、大豆 9 分、塩 1 貫 1 匁、綿 4 匁、紙 1 匁 9 分、楮黒 1 匁に 5 0 0 匁売、金、銀、玉等俄に大高値。

七年 2 月百姓共悪世に攻められ貧の余りに勝てずとやら池川用居 6 0 1 人名野川の内北川組 1 2 0 人逃散してお國を騒がす。

〔尾川の郷土史〕 5 年夏冷秋長雨冬暖、6 年春長雨、7 月数日暴風雨五穀実らず人々飢

〔注〕 1 〔高知年表〕より関連記事を摘記すると 3 年 2 月 4 日庶民救済令、8 月出米免除、四分一借上を令す。4 年難民救済 (米の闇売買を禁ず)、6 年 1 2 月宿毛鎮民騒動、7 年 2 月 1 6 日池川、名野川郷民伊予へ逃散、4 月 2 3 日城下窮民騒動各地に波及、9 月 2 7 日財政緊縮を令し大いに政治を改む。

2 〔日本凶荒史考一三貧凶彙〕 肥後米 (一石) の価格
 2年5月 12 3年1 12 4年1 6 5年12 6年12 7年5 6
 銀 6 0 匁 7 5 1 7 9 8 9 8 1 1 5 7 1 1 1 3 6 2 1 0 1 5 1 7 4 1 8 1
 (〔池川年代記〕のもの本文中にあり)

3 江戸三大キキと云はれるうちの第二回のもの。

1784 天明 4 7 26 (9 10) 風雨 (近県記事なし)
 〔佐川町史〕 大風雨、倒家多く其の害宝歴 4 年と同様

1785 天明 5 2 27 (4 6) 火災
 〔高知年表〕 下田浦 1 3 3 戸

1785 天明 5 5 ~ 6 干ばつ (伊予)
 〔池川年代記〕 干ばつにて大悪世也

1785 天明 5 7 12 (8 16) 大雨 (中・四國)
 〔太平寺覚書〕 12 日より 1 8 日まで大雨
 〔注〕 他國は 1 1 日に記す

◎1786 天明 6 2 3 (3 2) 火災
 〔高知市史〕 夜半 (0 時) 追手筋、北会所西脇より出火、時に西風吹荒れて追手筋、帯屋町、本町、中島町の大半及び南町全部 (浦戸町、納屋掘の南の一部を残す) 焼失、之を会所焼という。1, 5 0 0 戸

1786 天明 6 夏 干ばつ (諸國冷氣)
 〔池川年代記〕 大悪世
 〔注〕 伊予に夏淫雨の記事ある故干ばつ疑はし

1788 天明 8 5 29 (7 2) 洪水 (近県記事なし)
 〔佐川町史〕 大洪水、大破
 〔尾川の郷土史〕 稀有の大洪水

1788 天明 8 7 17 (8 18) 大雨 (紀伊雷)
 〔山田文化小史〕 大雨、物部川洪水 (土佐國古事)

1788 天明 8 7 22 (8 23) 大雨 (阿波)
 〔御家年代略記〕 2 2 日より 2 5 日に至る連日の大雨にて洪水、潮江天神の森、役地堤切れ勝ヶ瀬村、領家村、垂生、久保村等山崩れ人家崩れ死人あり
 〔曉巖村史〕 2 6 日物部川大水、久保の大山崩れ久保源兵衛外 2 8 人宅田畑、宝物悉く埋る。久保の小汐番所埋る

1788 天明 8 火災
 〔上の加江町史〕 浦分全焼 (孫之壱焼)

1789 寛政 1 1 10 (2 4) 火災
 〔奈半利町史考〕 東浜火事、東西の人家 6 軒を残すのみ。

- 1789 寛政14 16 (5 10) 地震 (中・四国)
〔日本地震資料〕 土佐、阿波、備前地震、多少被害あり
〔室津湊番役久保野家記録〕 夜九ツ時(24時)南の方より大地震致し町々石垣等崩れ、所により地割れ申候処も有り、人々立出で汐の干満は如何かと唯うろうろとして居申候処格段の事もこれなく夜も明ける。
- 1789 寛政1 5~8 (6~10) 風雨 (近県記事なし)
〔既震村史〕 この間度々風雨
- 1791 寛政3 8 大風
〔太平寺覚書〕 8月大雨
〔注〕 8.20(9.17) 四国一関東の風台風
- ◎1792 寛政4 7 26 (9 12) 風雨 (中・四国、山陰)
〔御家年代略記〕 大風雨 6.200余軒破損、死亡81
〔高知市史〕 天守閣の北の繞落ち大手門外番所の千貫松及び西大手門附近の老杉多く倒る。
〔既震村史〕 26、28日風水、国内の家損15,466、損毛3万126石、死11
〔池川年代記〕 神風、神雨古今稀なる大荒にて山崩れ、深山は七分通り根こけ中折れ家傷満足の家は再々なし。草木吹散り枯山の如也
〔郷土須崎〕 201戸流
- 1793 寛政4 12 20 (1 31) 火災
〔高知年表〕 須崎浦201戸
- 1795 寛政7 6 18 (8 2) 降雹
〔池川年代記〕 八ツ(14時)頃良の方より雲立塞り神風神雨大雷光隙無く鳴りとどろき氷降る。その形厚み1分斗、広さ5、6分斗、四角、三角、ひし様々にて氷を打割つた体なり。色黒くすき渡り梶草を初め草木の葉打破り石を打つ如くにして一時斗りおわる。
- 1795 寛政7 8 29 (10 11) 洪水 (山陰)
〔高知市史〕 大洪水 天神橋南詰の堤切れ人家流失死人あり
〔注〕 伊予8月大雨の記事あり
- 1798 寛政10 6 20 (8 2) 降雹
〔池川年代記〕 晴天爽にして暖気になへたり、八ツ頃赤黒の雲四方に立塞り闇の如くにして忽ち神風荒れ来り只砂をまく如き氷降り来り、其の形氷を打割りたる如く角有、長さは6、7分斗、巾5、6分角菱あり、犬に当り鳴逃る。草木の葉故々に打落し諸作大いに傷みたり
- 1798 寛政10 5~8 干ばつ (近県記事なし)
- 〔戸波村史〕 5 16(6 29)—8 15(9 24) 9 0日干天続き秋作皆無多し
窪地の岩戸出間以東は豊作
- 1798 寛政10 10 18 (11 25) 大雪 (近県記事なし)
〔池川年代記〕 夜北風激しく大雪降り、高き所へ深さ2尺斗り、当地辺3寸斗り降積り地面一円白妙となる。常々無事他
- 1799 寛政11 8 19 (9 18) 洪水 (四国、摂津)
〔安芸郡史考〕 18、19日奈半利川欠漬、田野福田寺より多気神社まで一面の水
- 1801 享和1 火災
〔安芸郡史考〕 冬奈半利東町大火
- 1801 享和1 7 3 (8 11) 大水 (近県記事なし)
〔北川風土記〕 各地の田畑はかやり又砂入る。山よりはけ流れる(新井来助)
- 1802 享和2 7 6 (8 3) 風水 (近県記事なし)
〔日本災異志〕 土佐6日より8日まで風雨洪水
国中の大損害は凡そ東郡にて死亡82、損田735町余、堤切れ、崩れ76090余間、神社人家番所共流出169軒、流死牛馬55匹、幡多郡にて死亡1、損田2934石余、堤切れ22050間余、流失家12軒
- ◎1803 享和2 12 29 (1 22) 火災
〔高知市史〕 朝四ツ時(10時)細工町菓子屋(俵屋)より出火、西風激しく山田町、廿代町、廻池町、紺屋町、新堀、菜園場、農人町(うら町)、新町、鉄砲町を通じ一戸を残さず。尚下知村農家に及び焦土と化し夜六ツ時(18時)鎮火せり
戸数1100軒余り焼
- 1803 享和3 洪水
〔山田文化小史〕 洪水のため諸記録流出(高知県史資料より)
〔注〕 本年近県の洪水は6 5(紀伊)、8月(和泉)
- 1803 享和3 病氣
〔既震村史〕 痘瘡流行
- 1804 文化1 7 26 (8 31) 風雨 (四国)
〔高知年表〕 領内暴風雨、高岡、幡多二郡被害甚大
〔森家日記〕 四ツ頃より時化、南東風暮頃止む
- 1804 文化1 8 29(10 2) 風雨 (九州から東海道)
〔室戸町史〕 打続いて悪天、本日朝よりイナサ風で時化、大南風に変り大浪立ち、夜四ツ(22時)過ぎから七ツ半(5時)頃まで御倉倉へ数度大浪入る

- 〔森家日記〕 夜四ツ頃より東風時化、先日より強し、夜明に止む
〔北川風土記〕 近年の大風石を飛ばす(新井来助日記)
- 1804 文化1 病氣
〔曉霞村史〕 麻疹流行
- 1805 文化2 6 4 (6 30) 洪水 (近県記事なし)
〔下川口村史〕 (郷士辞職願) 不意の洪水に川筋破損埋れ上り亡所同様に相成り
領地過半損田仕り職分相立難く是非に及ばず拝辞願い奉候(丑の洪水)
- △1806 文化3 夏 干ばつ (中・四国)
〔注〕 四国三県記事あり
- 1807 文化4 8 嵐雨、長雨 (伊予大水)
〔太平寺覚書〕 朔(9 2)、5(9 6)両度嵐雨、8月長雨
- 1807 文化4 8 28 (9 29) 天文
〔高知年表〕 彗星見ゆ
- 1808 文化4 12 (1) 嵐雨 (2 9日記伊)
〔北川風土記〕 大風大雨家々の屋根はげる(新井来助日記)
- 1808 文化5 6 25 (7 18) 嵐雨 (近県記事なし)
〔北川風土記〕 杉林大傷み(新井来助日記)
〔注〕 28日嶺岐風水あり
- 1809 文化6 6 17 (7 29) 大雨 (越前)
〔池川年代記〕 大雨水出水により土居竹之谷漉り得ず、小表の大遷に相詰る
- 1811 文化8 秋 天文
〔曉霞村史〕 彗星
〔注〕 近世に現れた大彗星の一つ、17ヶ月見られる。尾長2.5度
- 1811 文化8 大雪
〔曉霞村史〕
〔注〕 月日不明 1月近江、12月因幡大雪の記事あり
- 1812 文化9 3 10 (4 21) 地震 (四国西部)
〔宮地日記〕 戌上刻(20時)地震頗る甚しく未曾有のことなり
幡多、中村去る10日夜の地震御城下よりは格別強かりし由、翌日まで11度ゆり
其後も度々震う由
〔安芸郡史考〕 浦辺は山へ逃げる者多く騒動する(北川村名本 新井来助)

〔注〕 松山も大地震15日まで少々づつ震う(愛媛県気象資料)

- 1812 文化9 6 3 (7 11) 洪水 (伊予)
〔太平寺覚書〕
- 1812 文化9 7 (8) 洪水 (12、3日伊予)
〔太平寺覚書〕 3(8 9)洪水 10-13(16-19)大風雨洪水
- 1814 文化11 10 11 (11 22) 地震 (局地地震)
〔日本地震資料-宮地日記〕 夜酉の上刻(18時)地震余程強くゆる。去々年3月
10日の夜の地震よりは強き方に覺ゆ。家中下町辺垣壁等少し破損有之由
其後も夜中今12日にかけて小震度となり
- ◎1815 文化12 7 6 (8 10) 風水【亥の大変】(伊予、阿波、東海)
〔御家年代略記〕 六日より八日に至り風雨洪水ありて国中被害夥しく死人83、流失
家屋181軒、損害数万石
〔立田村誌〕 8日物部川の山田セキ以南兩岸殆んど欠潰、小田島以南は勿論西稻生、
東吉川までも浸水、物部川は上唾内の西を流れ三島と田村前浜を通る
山田セキは12箱(180間)を流され床の深さ2.3尺、小田島の赤芻北から明治
村境まで堤防欠潰、蔵福寺島の東端堤防から川中へ兩東に突出した(享和12年築
造の)打流しも一掃される。
〔香美郡田村誌〕 大風雨 未曾有の大洪水 物部川の堤7分通り欠潰 下流の被害大
床上2、3尺も泥が積る由、当村は上島より王子まで被害大、セキ大破大埋
〔田野文化史〕 田野堤防切れ水入る、安田床田の家4、5軒流。安芸川僧津へ切込み
村中一円砂入り8軒流、138人被害、藩よりお救米あり
〔太平寺覚書〕 幡多郡損田2934石余 堤防破壊22500間余、潰家12
- 1816 文化13 8 23 (9 14) 風水 (伊予)
〔太平寺覚書〕 大風洪水
- 1816 文化13 閏8 2 (9 23) 洪水 (中・四国以東)
〔太平寺覚書〕 2、3日洪水
〔安芸郡史考〕 田野堤防切れ(後大修理)
〔注〕 近県では3、4日に発生
- 1817 文化14 9 9 (10 19) 風水 (四国)
〔室戸町誌〕 夜半亥の頃から俄かに大北雨時化、大納屋の市艇二綱切れて吹流さる
丑の刻(2時)頃からタカマゼ(高雨風)強く大浪となる。浦中大いたみ網家倉と
も吹きはがれ
- 1820 文政3 6 20 (7 29) 大風 (近県記事なし)
〔安芸郡史考〕 俄に大風、田野、安田の廻船大破、安田の船員牟岐へ上陸、田野福吉

屋重蔵の木材散乱大騒動

- 1821 文政4 6 29 (7 28) 病気
〔池川年代記〕 御銅山(安居銅山)痢病流行につき二夜三日御祈禱
- 1822 文政5 6 3 (7 20) 洪水 (2日伊予)
〔御家年代略記〕 3日、4日大雨、西部大洪水川々堤及び田地等大破損
〔中村町史〕 5 29夜より大風雨、6.2大洪水、宮崎嘉道翁手記に小姓町の郡役所土居屋敷への移転はこれによるものとあり。
〔大野見村史〕 午の年の大洪水
- △1823 文政6 夏 干ばつ (四国、近畿)
〔注〕 (四国三県記事あり)
- 1824 文政7 6 27 (7 23) 風雨 (28日兵庫)
〔高知年表〕 大風雨、安居銅山崩潰
- 1825 文政8 8 14 (9 26) 風雨 (四国、紀伊、石川)
〔皆山集〕 (次項参照)
- 1825 文政8 8 15 (9 27) 天文
〔皆山集一川谷蘆山峯星考〕 14日大いに風雨あり 翌15日夜異星を昴宿の内に見
る。此時月光明るく諸星この為光を奪はれて其の所在を験する能はず。21日の昏
に至りて之を窺うに昴宿天苑星の内にあり
〔注〕 昴星はスバル、胃宿は28宿の1つで赤経7°~21°、天苑星はその南天に位す
る星座で現今エリダン座
- 1826 文政9 5 21 (6 26) 風水 (中・四国、近畿)
〔太平寺覚書〕 大風雨洪水、田畑損傷
〔北川風土記〕 家々木々吹折る
- 1829 文政12 5 23 (6 24) 風雨 (四国、安芸、伊勢等)
〔太平寺覚書〕 大風雨
- 1830 天保1 6 25 (8 13) 洪水 (近県記事なし)
〔日本災異志〕 土佐洪水
- 1831 天保1 12 7 (1 20) 火災
〔高知年表〕 中村大火 105戸焼く
- 1832 天保3 4 12 (5 12) 降雹
〔池川年代記〕 朝より晴天八ツ(14時)時に至りて俄に雲立ち塞ぎ神風神雷荒光り

只闇の如くにて後降り其形霰粒の大なる如し、色白く例へば雪の玉となり半時斗り
にして晴る

- 1832 天保3 6 15 (7 12) 洪水 (近県記事なし)
〔池川年代記〕 6月霖雨14日より荒雨、15日より神雨甚しく少しも止時なし無上の洪水、山崩
れ河沿いの諸作流る。17日四ツ時(10時)より快晴となり無上の干ばつ
- 1832 天保3 6~7 (7~8) 干ばつ (四国、近畿、その他)
〔森村史〕 6 18~8 3(7 15~8 28)の4日降らず、7 17~8 5水切り来る
(和田喜久平記録)
〔池川年代記〕 7 28(8 23)に少し夕立けれ共地のしめる事なし 8 25(9
19)より雨となる悪世也 御奉行見廻りあつて種無の御見分
- 1832 天保3 9 11 (10 4) 風雨 (沖縄、福岡)
〔室戸天災資料〕 9、8より北東風吹き雨天に候処11日夜五ツ時(20時)よりい
なき高まぜにかわし、同刻より明七ツ時(4時)頃まで俄に稀なる大波立ち相成り
舟倉沖の方闘い残らず打つぶし(翌年幕府より許可を得て修築)
- ◎1833 天保4 凶作
〔池川年代記〕 4年長々干ばつ風雨度々にて悪世、作物4分の上とかや
5年同じく作物3分半の見付也、6年4月中旬より干初め6月中頃風雨干となり
7月の中旬荒風大雨、下旬に大荒風雨して諸作皆無也、米1匁5分、酒3匁、麦1
匁、稗5分、椿草白3匁、丸42匁、7年春より多雨にて諸作生い立ちける時
7月6日夜俄に雲立ち風雨はげし、16、7日大荒(別記) 8年春世上大飢きん
米3匁、裸麦2匁、大豆1.5匁、酒4匁、椿草白3匁、丸32匁、冬方50匁に及
ぶ、9年兩年諸作9分出来、椿草白53匁~60匁、米1匁6分、酒3匁2分、
10年干ばつ諸作7分、芋皆無、然れ共椿草山寄分総じて影地は十分也、13年兩年
春椿草53、夏30、秋25匁売手なし
〔注〕 6年7 23 阿波風雨、中旬には近県の閩運記事なし
〔注〕 1 〔日本凶災史考〕この年春より時候不順、夏陰冷行はれ六月関東尚裕を
用ふるの異例あり。秋大風洪水のち早冷を来し諸穀登らず、東海道の六分七厘作
を最良とし奥羽二州の平均三分五厘二毛と称へ或は収穫皆無の惨あり。
翌5年漸く平年作に近かりしも凶作のきず癒えざるに6年春また和順を欠き夏秋
陰冷多く蝗害の地ありて津軽地方の四分作を初め諸國逆作多し。越えて7年初夏
より陰冷甚しく畿内に於て6月尚冬服を用いるの大異変行はれ、盛夏暑気感ず
ること稀にして9月に入り遂に早寒の襲うところとなり全国大いに飢荒す。即ち
山陽南海の五分五厘作を最良とし山陰・関東は三分二厘内外を称へ、陸奥は二分
八厘作にて無収穫に終れるあり。この時貨幣粗悪にしてその価値下落せるを以て
諸物異幣の暴騰を来し庶民の困窮甚しきに米穀の需給の途極度につまり、都邑大
いに窮す。8年2月大塩中弁この凶歳にあい時幣を慨し救民を標榜して大阪に
挙兵するあり、東北諸國は天保初年より頻りに飢荒しこの後尚止まずために飢死
者、流民極めて多く、4年より10年に至る七ヶ年津軽一郡のみの死者三万五千

- 六百余他郷に流離する者四万七千余人を数へたり。
2. 〔大阪市史〕による肥後米価格（一石）
4年8月 12月 5年5月 7年6月 9月 10月 12月 8年2月 3月 6月
銀 100.5匁 1185 136 104 162.5 137 151.5 167 218.5 248
 3. 〔高知年表〕から関係記事を摘記すると、4年2月出米免除10分1借上げ、5年2.20五ヶ年省略発令、2.23行政整理、10年4.23出米免除、8.1家中儉約令
 4. 〔御家略記〕（天保8年の記事）去秋度々大雨により穀物損毛に付き郷山分所々寄航人少なからず。依つてお救米を下さる。東国筋には餓死人多くある趣
 5. 江戸三大キキンの最後のもの
- 1834 天保5 8 6 (9 8) 大風 (讃岐、中国、紀伊)
〔北川風土記〕 朝から大暴風雨、稲穂大いたみ(福留平太兵衛日記)
〔中村町史〕 大風
- 1835 天保6 7 23 (8 17) 風雨 (阿波)
〔太平寺覚書〕 前夜より大風雨
〔注〕 原文6月とあるも関連記事見当らず
- 1835 天保6 閏7 6 (8 29) 風雨 (中・四国以東)
〔太平寺覚書〕 5日より6日まで大風雨、屋頃止む、又西方大いに吹く(同26日大風雨洪水の記事あるも近県見当らず、但し21日阿波風水)
- 1835 天保6 天文
周期彗星ハリーの出現(11月前後)
- 1836 天保7 7 7 (8 18) 風水 (伊予、阿波)
〔御家年代略記〕 7日、8日風水洪水、東西御普請所4.020間破損
〔池川年代記〕 (天保4年凶作の項参照)
- 1836 天保7 7 17 (8 28) 風雨 (18日関東、奥羽)
〔池川年代記〕 16、7日大荒れ風雨甚しく諸作皆無
- 1836 天保7 8 3 (9 13) 風水 (近県記事なし)
〔御家年代略記〕 大風雨洪水、円満寺橋常通寺橋共流れ。今7月、此度の洪水にて田畑56.500石余損毛公刃お届あり。
〔高知市史〕 2日杓田水神堂の西江ノ口閘破壊し、井口、小高坂、江ノ口大水、井口永福寺橋、北奉公人町、四丁目橋、円満寺橋、河原町橋、尾戸橋流失、其の他江ノ口、愛宕町、百軒町、七軒町、寿庵墨敷、藏屋敷等座上に浸水、七軒町は座上舟を乗るに至る
- 1836 天保7 10 18 (11 26) 大雪 (19日鳥取初雪)
〔森村史〕 朝より夕方まで大雪、最晩稲稔らず、米価昇る。
樞山越して南部より米を荷い越す者多く日に50~70荷(和田喜久平記録)
- 1836 天保7 10 29 (12 8) 火災
〔高知年表〕 下ノ加江大火
- 1837 天保8 8 6 (9 5) 大波 (近県記事見当らず)
〔室戸町史〕 大浪室津港再び大破
〔注〕 前の損傷は天保3 9 11
- 1840 天保11 5 14 (6 13) 大雨 (近県記事なし)
〔北川風土記〕 大出水で佐喜浜の家11軒流れる(新井来助日記)
- 1841 天保12 3 15 (5 5) 晩雪 (18日阿波)
〔森村史〕 4月節(立夏)に入る日雪、小高い処2、3寸積る(和田喜久平日記)
- 1842 天保13 6 4 (7 11) 風雨 (阿波)
〔池川年代記〕 3、4日風雨激しく裾大傷、稲草うんかにて皆無種
〔太平寺覚書〕 3、4日洪水、所々大破
- 1842 天保13 6 25 (8 1) 風水 (阿波)
〔高知年表〕 風雨洪水
〔太平寺覚書〕 24日洪水、先の水より7.8尺斗り大なり、作物被害甚大
〔池川年代記〕 21日荒風雨止む時なく無上の洪水、河沿いの田畑壊れ流る(注21日は25日の誤りか)
- 1843 天保14 2 16 (3 16) 天文(彗星)
〔池川年代記〕 西の方より東を指して長き雲立つ、穴より日の光抜けたる様の体、巾せまく凡そ2尺斗、15日して次第に西の方へ引入る
〔森村史〕 210~月末西の方よりカセ星の本まで白木綿を引たる如く白くなり、暮六ツ時より五ツ時まであり。是は星という事、次第に西へ行き申候
〔注〕 1. 近世に現れた大彗星の尾(巾約1度、長さ40度、実長3億キロ、地平近くに伸びる)の記録
2. カセ星は主に石鎚山系で用いられるオリオンの三ツ星の称(野尻抱影)
- 1843 天保14 9 9 (10 2) 洪水 (10日東海、関東)
〔池川年代記〕 6、7日荒雨洪水にて船渡更になし、9日増々洪水
- 1844 弘化1 火災
〔上の加江町史〕 浦分全焼(新六焼)

- 1845 弘化2 8 1 (9 2) 大雨 (近県記事なし)
 [晧霞村史] 1日より5日大雨洪水 王子の田で死2
 [注] [太平寺覚書] に5月風雨出水の記事あり。近県見当らず
- 1846 弘化3 6~7 大雨 (京都並諸国長雨)
 [中村町史] 3月に大雨があつて度々出水、6 16大風雨、1 9日夜まで大雨の末出水、7月1日より風雨3日甚しく出水、8日又風雨激しく人家多数破損、17日夜大風雨、この年は数回の洪水があつて俗に「丙午の洪水」と呼ぶ。
 [注] 6 16(8 7) 関東 7 1(8 22) 近県記事なし
 7 18(9 8) 伊予風水
- 1846 弘化3 7 9 (8 30) 風水 (伊予)
 [高知年表] 暴風雨、幡多郡被害多し
 [下川口村史] 朝より凄じき暴風起り木を折り家を倒し、終日吹荒れ暮に至り止む。家大半倒れ、殊に下川口浦は殆ど全倒、城山及び横吹坂、分水の南北に亘る三尋半の巨松根元より吹倒さる(丙午の風)
- 1847 弘化4 7 13 (8 23) 風雨 (四国、丹後)
 [池川年代記] 11日より日増時増風雨はげしく屋毎に板戸しめ、殊に神風神雨の13日夜(強盗入る)
- 1847 弘化4 7 22 (9 1) 洪水 (近県記事なし)
 [高知年表] 潮江川洪水
- 1849 嘉永2 5 長雨 (江戸)
 [中村町史] 5 1(6 20)頃より大雨、5日まで続き出水
- ◎1849 嘉永2 7 9~11 (8 26~28) 風水 (四国、安芸)
 [中村町史] 7 9大風雨、夜に入りても止まず出水、10日8時より又大風雨となり4年前の丙午の年と同様北東風強く樹木を吹倒す。11日出水、両出水共平地(小姓町)より4、5尺高しと
 [綜合渡川史一上岡利太郎手記] 嘉永二酉年七月暴風大洪水、市中内船乗廻る。御用船北丸には喜太郎親子乗、南丸には十吾衛乗、両船共御郡方役人乗、中白の轍を立て市中を乗、水は座より一尺揚る。風は荒し雨は暴し、下田横浜切れ居ると聞く、下町築地早々切ると夜分人々声して通る。古今稀なる暴風雨につき皆々迷惑相極候
 [池川年代記] 5月末方より雨干共丑寅壱立未申へ飛び行く、諸人曰く、此の雲行にて風発らば寛政4子の歳に異ならずと恐れ、屋かこい木或は庭木等の枝打ち等致しける。7月8日より雨風少発、雲行甚悪く日増に荒風神雨、10日に至り荒雨波立、大風吹立、天地もさくる如くにて夜九ツ時一雷鳴て風鎮る。諸人屋をあけ岡野に伏して命ばかりをかこひかね生死の苦浅からず。大木は七分通り根こけ中折、屋大傷で屋直し料としてお上より60目宛拝領す。無上の洪水にて山岸河沿大半壊れ人家の壱舗荒増 壊れ池川郷内27軒屋舗の形無し

- 1849 嘉永2 8 23 (10 9) 風雨 (近県記事なし)
 [羽根村史] 風雨
- 1850 嘉永3 春 飢きん
 [池川年代記] 去年悪世の種無にて飢きん限りなし
 米2匁、酒3匁、黍1.2匁、麦1.2匁
- 1850 嘉永3 春~夏 長雨 (6月九州、四国)
 [池川年代記] 春より霖雨、麦作十分、4月中旬よりいや増霖雨甚しく60日の間日、月、星の光を見ず。8 20頃5、4日雨となる。1日半日晴と雖雨霧のかわく事なし。
- 1850 嘉永3 9 2 (10 7) 大風 (中国より中部、奥羽)
 [太平寺覚書] 東風家々破損、夜分微雷
 [阿波藩民政資料] 土佐鯉節の廻 船津田川口で難破
- 1852 嘉永5 夏 干ばつ (四国、近畿他)
 [戸波村史] 5~7月干 稲作皆無の所多し
- 1853 嘉永6 夏 干ばつ (四国、紀伊、其他)
 [戸波村史] 5 23(6 29)より7 3(8 7)の40日干、稲作皆無の所多し
- 1853 嘉永6 8 3 (9 5) 風水 (伊予、讃岐)
 [太平寺覚書] 大風雨 出水
 [注] 本文4日とあるも近県では3日
- 1853 嘉永6 9 23 (10 25) 大風 (近県記事なし)
 [下川口村誌] 三崎浦カツオ船19人乗全死
- 1854 嘉永7 4 17 (5 13) 風水 (近県記事なし)
 [上の加江町史一利高清左エ門記録] 17日大風雨洪水 18日波高く御分一の前浜打越しハト半分程にて腰位立つ
- 1854 嘉永7 7 15 (8 8) 風水 (近県記事なし)
 [太平寺覚書] 盆に大風雨、盆祭り出来ず、市中は上町辺水揚る
- ◎1854 嘉永7 11 5 (12 24) 南海道沖大震 [M 8.4]
 [理科年表] 伊勢海より九州東北部に及ぶ。土佐、阿波、紀伊甚し [135.6 E 33.2 N]
 大津波は房総半島より九州東岸に及ぶ震災地を通じ住家全潰1万余、焼失6,000土佐、紀伊、大阪にて津波のため流失1.5万、半潰4万、死3,000、震火水の為の損失家屋6万

〔日本地震資料〕 高知にては2491棟焼失し、徳島に於ては約1,000戸、田辺にては住家355戸、土蔵寺院等383棟を灰燼となせり。房総半島より九州東岸に至るまでの間地震後津波押寄せ就中紀伊の西岸及び土佐湾の沿岸中、赤岡浦戸付近より以西の全部は非常の災害を被りたり

〔三災録〕による損害、侍屋敷359の内11焼失、91潰家、254半潰市郷家数17,469の内2460焼失、3,182流失、2939潰、8,888半潰土蔵納屋3,960軒の内805焼失、588流失、1,687潰家、88半潰田地21,530石9の内14,121石5損田、7,409石5沙場土堤53,052間、道路9,227間破損、橋65の内6焼失、32流失、27破損米17,589石の内14,778石焼失、2001石流失、810石濡、怪我人180(男73、女107)、死者372(男96、女276)

〔高知市史〕 四日辰の下刻(9時)小震あり、其頃より何となく潮汐に変状を呈し、八ツ時(14時)までの間に3回の干満あり。夜小震3回に及ぶ。明くれば五日の朝は一天快晴にして一朵の雲を見ず。正午頃に至り潮汐も亦平調に復して人々安堵の思をなせり。然るに此日七ツ過(16時過)に及びて未曾有の大震起りて家屋の倒壊するものさながら将棋を倒すが如く。折から戸々晩さん炊事の際なりしかば火災忽ち各所に起りて光景凄惨を極む。しかのみならず少時にして海嘯浦戸口より押し込み来り。先づ下知堤を決して下町に浸入せり。尤も此海嘯の害は幸に軽微なりしも震災と火災は宝永の大変に劣らず惨状を極めたり。但上町及郭中は火災なかりしを以て損害も亦少かりしが、下町に至ては損害非常に多く即ち火災の難を免れし町を挙ぐれば唐人町全部、弘岡町及朝倉町の南側米倉共、掛川町、要法寺町、搦町、八百壺町、京町(町会所及官倉とも)、戯人町、北新町、鉄砲町及下知にして其他町方目貫の市街は悉皆烏有に帰せり。市内の損害は、流家1,676、潰家568、死人106

〔南海大震災誌〕 中村町の被害人口2005、死30、全潰156、半70、焼失(中ノ丁殆んど、本町、上町の東側、京町、新町の一部)189戸

〔地震日記〕 5日申の下刻(17時)大地震初り乾の方(北西)より鳴動する音恰も暴風の山林に響けるに等しく聞え、地動揺すること大波の如く、良久しくして止む、而して又頻りに震すること間隔なし、暮に至ても尚ほ止まず。酉の上刻(18時)頃に及んで津波くる。高知大火(後に聞けば中村町、宿毛町も焼けるという)同夜震うこと70度、寒強く霜大に降る。初め大に震りし時地裂け山崩れ岩落ち河川水漲りて堤上に昇り半は減り残る所の水は濁濁して泥の如し。堤割れ道破れ橋落ち家蔵或は潰れ或は倒れ或は瓦を落し或は壁崩れ、一室も破傷せざるは無し(下略)

〔浦戸港震災記〕 最初南洋より直ちに仁井田浜に衝突し其の反動桂浜に奔劇するや初めは一番波二番波と區別する猶予あるも三番波以後はその界を知らず。一番二番波にて全村総て流亡に帰せり。然れども幸い命を失いたる唯一人にて彼彦江というものの一番波に恐れて山によじ登りしと雖も自宅に金銭の結りあるを失念し乃ち取り来らんとし不幸二番波の襲来にあい流命せり。この他山中に逃れんとし既に大波に捲流されしものあるも憐憐にも樹木等に取付き辛ふじて九死を出てたるもの数名あり桂浜と浦戸境なる越戸は海面より高さ20尺なり。かの大波はこの越戸の頂上に達せんとせしも超越するに至らず。よつて大波の高さも凡そ20尺内外なると想像すべきか。

〔土佐市宇佐萩谷 海嘯の跡の碑〕

南無阿弥陀仏 安政元甲寅歳十一月五日申の刻大地震、日入前より津波大に溢れ速こと八九度人家漂流残る家僅六七十軒。溺死の男女宇佐福島を合せて七十余人なりき。皆て宇佐の地勢は前高く後低く、東は岩崎西は福島の低みより汐先迷路を取巻故 昔宝永の變にも油断の者夥敷、流死の由。今度もその遺談を信じ取あへず山手へ逃登る者皆恙なく。衣食等調度し又は狼狽て船にのりなどせるは流死の数を免れず可哀哉。其翌日は御倉開けて御救米頂戴し凍餓に至るものなく誠に有難御仁沢下りければ後代の變に逢う人必用意なくとも早く山の平なる傍に岩なき所を択びて逃よかし。且流失の家財衣服等を拾い得し人暫時の内福に似たれども間もなく流行の悪疫に染み悉皆なくなりしを眼前見聞したると告げ残し、殊に両度溺死の人の菩提を弔ふにいと衆議して此碑を立てるものと云爾

安政丁巳十一月 世話人 西村畔助 緑尾 伝平 久市尾菊右エ門 梶和尾源次郎

〔注〕 この碑文の撰者は真覚寺和尚静照 筆者は西村畔助

〔温知録〕 一同家の前なる畑に集り居して震動烈しく立つておれざれば何れも膝を地につけて居れども動揺尚甚しく、予は畑に引き残りし大根に取付き倒れぬ様にしておりしに風も無く静なる夕方なるに何処ともなくザワザワと騒しければ頭を上げて傍を見れば4、5間位の距離にある柿の木の家軒よりずつと高木の梢が西に東に地面をしわきつけると見し時は只夢の心地して5、6人集り居たる者一人として一言も出ず者なく生きたる心地もせざりき。

〔真覚寺地震日記〕 *七時半時(17時)俄に一天薄闇と相成、近代未曾有の大地震、山川鳴り渡り土煙空中に満ち、飛鳥も度を失い人家は縦横無尽に潰崩し瓦石は四方へ飛び、大地破裂してたやすく逃走する事も成難く、男女只狼狽周章し児童呼叫の声おびたし。間もなく沖より山の如き波入り来り宇佐福島一面の海となる。今夜月の入迄に津波入る寧凡七八度、一番浪より二番、三番の引汐に浦中皆流る。忽して大變の時の汐は進むに緩く退くは急なり。福島中須賀の間家軒も残らず。渭の浜山際迄波溢る。宇佐は流れ残りの家僅かに60軒斗、其中造作にかり候もの20余軒、其余は家残りし迄のことに取繕出来ず。浪の入り時諸道具打捨置き山へ逃上る者は皆命を助り、金銀雜具に目をかけ油断せし者は悉く溺死す。今日の流死福島に50余人、宇佐にも10余人これあり 一以下津波の浸入限界の記事一

引汐の音百千の雷の如く、波につれて家流れ5軒10軒宛連り海に入る。此時金銀米銭を始め家に秘蔵の諸品海に流入する物夥しく男女児童の泣叫ぶ声夜に入てもやまず。今日まで貯置し諸道具眼前海に入るを見る人々の心中推しはかられて哀れなり。夜に入れ共灯火の用意もなく暫くは月の光を便として皆々山中に踞り波の音を聞きつつ地震を凌ぐ

〔室戸町誌一当家記〕 稀なる大地震、津波入、引汐激しきにつき片時も油断なし難しというにつき沖合を見渡せば既に奈良師の前のシバエ(師署)と申すは昔より見たる人無之に此度は波の根より長さ一丁ばかり山の如く相見え候、しかるに汐の上りも少なくあまつさえ室津港の汐4尺計りも足り申さざる様に相成りて諸船入津出来

申さず。

〔大内町史〕（柏島詰役一円嘉平次報告）五日七時半頃ゆり出し別て強強く取敢へず御家を出裏口の畑にて四方見合候処暫時に総囲いの石垣残らず崩れ、見る中庄屋の居宅も一時に潰込み、石垣は高さ6尺余りにて上柔之石垣の如くにて其間二間余も相隣候、鳥へ飛びて頭上をかすりて二度斗飛越し、其石中々四人かきにて一貫頃の石は彼是もなく微塵恐しき事云う計なし

海上見合候処溪内に掛り居る数十艘の漁船市艇の爾采目通り見清候 屋（根）遙か見上げる程に成つて海ふくれ行き山に見え、さて又沖島の近辺に当り海上より真黒き雲と片面は火の燃える様に火と雲との気立ち上り、実に二目とは見られず悪しき景色何とも申す可き様なし。

*土佐市宇佐町橋田の真宗真覚寺八世静照の日記
 嘉永7 10 21 より始まる地震日記は文久3年まで9巻、翌年より始まる晴雨日記は明治1年まで5巻
 本文は研究家森下管根氏の文よりとる。

〔注〕

1. 安政改元は地震後の11 27につき本震を安政の大地震と称えるのは（安政2 10 2の江戸大震と混用のおそれもある）不可
2. 本震の前日東海道沖に震源（13.78 E 34.1 N）をもつ大地震あり〔M8.4〕東海東山、南海道に及び又大津波あり。倒壊、流失家屋8,300、焼失300、死1,000、富士川洪水を起す〔理科年表〕
3. 宝永地震に比べて震動は弱い。〔三災録〕宝永地震の筆記に人を転すこと丸き物を投擲するが如し、おそろしき事何とも途方あるものなしと南略志にあり。又諸人広場に走り出るに五人七人手に手を取組むといへどもうつぶしに倒れ、3、4間の内を転しあるひはのけに成、又うつぶしに成て逃走することやすらからずと万変記にあれども去冬の震に如此事なし。
 〔嘉永七寅大変記〕間もなく地動くこと恰も沖合の舟におるが如く。乾の空を見上ぐれば天色土色の如く、否や群集をおしわけ右往左往に走出所大地うねりて足本もさだかならず、（鏡川）川原を北へ千鳥足して走る。
4. 今回も室戸方面が上昇し高知及び以西で沈下している。
 〔室津湊番役久保野家記録〕5日大震後夕4尺程へり（安政2 2 7港掘下げ）〔三災録〕去冬大汐以来甲浦を初め東灘の港は浅くなり、下灘の港は深くなりたりという
 〔三災録〕大震後の高汐浦戸より内地汐より3尺4、5寸高くなりしという
 〔利高清左エ門記録〕殊に海面大潮前よりの潮に較ぶるに4、5尺も高さ故地の人一同浦へ出張る者これなく上の加江浦の絶えるは今なる哉と衆人大いに愁う尚高知市に於ける大震後の地盤沈下状況は〔三災録〕に「六日下知村北の丸堤切れ新町へ押入、満潮の時は船を乗る。同月末より切戸御普請ありて12月5日より新町に潮差引入り来る事は自ら止む」が其の後高汐や風雨の嵐に度々堤切れがあり、大津、鹿兒まで一面の海となり、「本町は西へ一丁半程上る帯屋町、中島丁、兩与力町、片町の汐は北御会所角より南見通し限」「帯屋町東一丁の内にて投網にて小ボラを取」とあり
5. 津波回数〔真覚寺日記〕に宇佐で月の入までに津波入ること凡そ八、九度、一番波より二番、三番の引込に浦中皆流るとあり、又〔大変略記〕には福島7度

で4、5番最も高く山際の家も十に八、九流失とあり、入野〔地震碑〕でも大体同様（7度で4番波最高）だが下川口では〔今村明恒〕3回で2番最大といっている。

柏島では3回で大汐後尚1尺余りの余波ありと土地の沈下を示している。尚上記によつて足摺岬を廻ることで津波の勢力が大いに弱つたことが判る。

6. 津波の高さについては〔浦戸港震浪記〕の20尺というのが唯一の記録の様だが〔真覚寺地震日記〕に「浪門内へ入来り本堂の前より庫裏を廻りけれ共地形小高き故礎をも湿さずして引退く」となつていので真覚寺の海拔10米位が津波の波頭と考えてよい。尚引つづき「宝永四亥大波には宇佐福島の間に残る家は只一軒滝ヶ谷に有之由。此度より高さ5尺計りなるべし」という
 又安政2 4 8日記に「此度は4、50軒残れるは汐低き証なるべし」としている

7. 余震については〔大変略記〕〔真覚寺日記〕〔地震日記〕に非常に精しい。これらによつて高知地方気象台森幸寿が調査した地震回数

経過日数	100	200	300	400	500	600	700	762	計
有有感回数	1254	310	228	164	227	133	90	62	2468

 この数は昭和21年の南海道大地震2年間の有感回数150回に比べ1.6倍であり、その勢力の大きかつたことが判る。

〔三災録〕記載の地震回数は水門番人喜之助（75才）の筆記によつたもので

	11月	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
大	7	3				1	1								
中	44	20	8	7	6	4	2	1	6	10	2	1			
小	196	73	107	56	42	41	31	31	30	9	19	28	18	14	
計	247	96	115	63	48	46	34	32	36	19	21	29	18	14	818

〔地震日記〕によると5日70度、6日45、7日53、8日41震勢漸く弱るとあり、余震の内最大のは安政1 12 30(1855. 2 16)で〔真覚寺日記〕に五ツ（8時）頃大地震、霜月5日のゆりと全く同じ、本堂の柱くるいゆがむ。法衣のまま飛出る。己家の者は皆家を出て山へ逃上る。当寺は本尊様を又長持に納め庭前へ出す、同所にて喫飲して少々道具を片付け波のくるいあるなしの所気をつける。一時余りの間に30余度ゆる。皆小ゆりはなく中ゆり斗なり、長ゆりして止まぬ所は霜月5日よりははるかに烈し。ゆりよりは鳴る音夥しく煙草のむ間もなくゆる。今日のゆりより算用すれば当月10日14日両度のゆりは物の数にもあらず……今日五ツ頃より日暮までのゆりの数凡そ845度斗、その内小ゆりは少く中ゆり多し、ゆる度毎に穴中にてじだんとふむ如き音聞ゆ。家の動くこと此間中よりは烈し。夜に入り候ても昼と同じく少しも間なく鳴動の声共にゆる。暮六ツ時より夜明まで又120余度ゆる。内70度程は10日、14日のゆりと同じく皆中の大なり。

8. 本地震の記念碑は甲浦万福寺、香美郡岸本飛鳥神社、浦戸稲荷、宇佐萩谷、須崎宝永津波溺死塚（本碑についてはP15）
 大方町伊田及び入野加茂神社、清水中ノ浜（2ヶ）
9. 高知市内津波浸入図は（P17）

1855 嘉永7 11 16 (14) 大雪 (越前、若狭大風)
 [利岡清左エ門記録] (上の加江村) 15日より大寒を催し大風吹出し大雪になる。
 16日は往来止め、近來の大雪なり。
 [注] [真覚寺日記]では16日四ツ頃より雪降り九ツ頃より雨と成る。晩景止む。
 17日朝雪降る。四ツ半頃止む、大風吹く。

1855 嘉永7 11 25 (13) 風雨 (近畿記事なし)
 [真覚寺日記] (大風雨)波高く四ツ(22時)頃雷鳴、八ツ(2時)前雷電し風雨
 共に止む。今日の波橋田辺は人家の有りし処まで溢れ来る。
 [利岡清左エ門] 暮間頃より沖より風強く吹き出し夜五ツ(20時)時より大時化と
 なる。夜明まで大いに雷鳴致し久礼のあたり家一軒焼失、此の夜浦々己が家に居る
 者又々流さると申して闇夜の山へ逃げ朝まで雨に打たる者多し。26日もしけに
 て汐高き上に高水になり一隻破船

1855 安政1 12 20 (翌26) 火災
 [真覚寺日記] (22日の記事)一昨夜潮江に出火有つて其火昨廿一日治りし所家数
 200軒余焼失(細川地震日記には300軒とす)

1855 安政2 7 14 (8 26) 風水(高汐) (伊予)
 [御家略記] 大風雨洪水、潮高越堤所々破損
 [三災録] 13日夜半より雨、14日より風雨となる。潮高く大震の日より2尺高く
 平和の汐より都合5尺4、5寸(海辺は7尺)高かりしという。
 [真覚寺日記] (雨天)風吹き波高し、四ツ(10時)頃より大時化。波は陸へ漸々
 に上り風雨は次第に烈しく四方の戸を閉ぢ潜み居る。日入頃雨やみ雲少しなおる。
 庭木の梨只の一つも木になき様に吹落されしは誠に残念。雨中宇佐中町の浜にて漁
 船の新造を竜舞上げ落し三ツ程にさけ砕くという。
 [注] 尚真覚寺日記によると4 20(6 4)風雨、6 2(7 15)大波、同 20(8 2)大雨、翌3年には5 9(6 11)15日、21日に風雨、
 7 15(8 15)大波の記事あり

1855 安政2 8 20(9 30) 風雨 (四国、近畿、東海道)
 [日本災異志] 土佐大風、所々破損
 [大變異記] 風雨 波瀾岸を洗う。
 [真覚寺日記] (曇天)五ツ半(9時)頃より風雨、四ツより九ツ半(10~13時)
 までの間格別烈し、わら葺の家は屋根を取られ大に騒ぐ。弘岡より森山、西畑の田
 芋大いたみ根共に飛ばけ候もの夥しく人家のいたみ城下同様

1857 安政4 7 1 (8 20) 風雨 (四国、近畿)
 [真覚寺日記] (雨天)波大いに高し。五ツ半(9時)頃より大風雨九ツ(12時)
 前に至り雨止み風穏になる。作物少々宛いたむ。梨15、6程庭木に有之処けふの
 風に残らず落ちる。

1857 安政4 7 22 (9 10) 風水 (江戸雷雨)
 [大變略記] 22日雨、同夜岸切川洪水真如寺橋上下より潮江へ切込み24、5軒流失
 其余所々洪水あり

[真覚寺日記] 21日夜雨止まず。少々出水なりという、22日(高知より帰路)西
 畑川原にて大風雨に逢い積置し藁の陰にて雨を凌ぐ。さて渡場大出水風雨中故今一
 渡しの後は船を留るといふ話、よき時に渡りしと悦び九ツ半時(15時)宿帰、雨
 止まず波高し。七ツ時(16時)より大雨、本堂畳へ雨もる。23日雨天、連日の
 波にて当浦々生魚一向なし。昨夜の大雨に潮江橋の本堤切れ潮江の人家二三十軒流
 損せし由。人傷みは無之趣、又高岡清滝寺の山より水を吹出し寺の家ねちれゆがみ
 住僧始め泥坊になりしという。戸波にも水大いに溢れ人家少々流るといふ。

[注] 1 岸切川は現在の鏡川
 2 尚真覚寺日記には4 26(5 19) 7 14~18(9 5~9)大波の記事あり。

◎1857 安政4 7 29(9 17) 風水(高汐) (四国、近畿)
 [三災録] 三つ頭御番所より東稻荷宮までの並松、この風雨に倒れ木多く今40本計
 り存在す。

[大變略記] 七ツ頃(5時)より暮合まで大風雨、波荒汐甚が高し。大變以来の大汐
 なり。

[真覚寺日記] 夜中大雨、九ツ半頃(13時)より黒雲東西へ馳違ひ八ツ半時(15
 時)より風雨ますます烈しく波陸へ上り海へ近き家々は壁を毀たれ諸道具をぬらし
 迷惑の場合、七ツ時(16時)より大時化、雨は篠を乱せる如く風は諸木を折り家を
 を巻き上げ、船を損し恐ろしき事いふべからず。

井尻松岡の辺尤も烈しく家々の戸障子は空に翻り瓦は雨と交りて飛び、児女子の呼
 叫の声喧し、当寺は風当その地ゆへ如何成やらんと懼るるより病中ながら本尊様へ
 打敷をかけ四幅の御影をも手早く巻き箱に収め庫裏の床へ御供するや否や本堂内陣
 の上瓦二三三百飛上り御厨子の上より余間の檀内陣外陣の差別なく又大雨泥土に交り
 て落下一向近寄れぬ形勢、畳を上げんと思ひしが其下より風の吹らん事を恐れ
 れ、ぬれ次第にし、仏具は一つにても取留たく、もし万一本堂潰る事もしれずと
 風と争いゆるぎ渡る堂内に入り仏具を庫裏へ運ぶ中余間の障子二枚、雨戸二枚、外
 陣の戸袋風のために吹散されて微塵に成る。余間に戸なくんば此堂忽ち吹抜くべし
 と俄に風呂屋の戸をばづし返りに括りつけ風の入らぬように致し、最早命の惜さに
 御本尊の御厨子だけは一人二人位にて手に合ぬゆへぬれ次第にし庫裏に帰るに内
 縁より廊下の上の瓦追々飛び庫裏の上も少々屋根損し夫より寺子家門、浴室、雪隠
 に至るまで一つも無事なるはなし。諸所の壁落ち庭樹の大なるは皆倒れ土台戸を明
 けられず日入頃風おさまる暫くあつて雨止む。誠に我等一向覚えぬ大風雨

8 1 昨日一時程の間に橋田ばかりに濱家12、3軒有り、夫より新在家より福島、
 井尻辺無難なるは一軒もなし。家に圧されて死せし人も有という。晩方に噂を聞け
 ば雨濁辺より城下辺までも同断のこと、上の茅などは在所ごとごとく潰れ四、五軒
 残りしという。五ツ半(9時)頃兩人の人を雇いまづ御厨子をおろしけるにつ
 ぶぬれになり箔もおち膠もはづれ大分傷む。本堂の縁にて取乱し水を取り乾かす。
 夫より畳を出し干す。飛散る瓦を拾い片付る。晩景には橋田辺の若者共倒れかかり

の家を綱にて引おこし騒動する。今日は凡て八朔のかたちもなし。夜空晴れ、銀漢明にして自ら秋氣をしる。宝歴七丑年大風雨の後昨日のごとき風雨は多年無之という。(欄外記事)与洲松山、大洲宇和島等の城下大崩れにて家居は勿論死人怪我人等も夥しく之れある趣、

8.4 過日の大時化にて江廻り堤切傷み、新町、農人町辺汐溢込み今以て住居出来難く大地震の時より2尺斗も汐高きよし取沙汰有之廿代辺も大半汐家々へ入る。

〔太平寺覚書〕 大風雨出水

1855~7 安政 2~4 病氣

〔真覚寺日記〕 大變後年々おこり大流行、今にしてやまず

△1857 安政 4 8 25 (10 12) 地震

〔理科年表〕 伊予、安芸(132.8E 33.8N) [M 6.4] 諸城破損(大分三崎半島線の東方)

〔注〕 本県の地震ではないが資料として下記

〔真覚寺日記〕 (半時)五ツ半時(9時)大にゆる。大ゆれ半時斗有て又ゆる小、直にまたゆる。中ゆれ初度のゆりは近頃なき大ゆりにて家の内に居るものなく皆門口へ飛出る。暫らくゆりやまず。其中波以前のこく入来らん事をおそれ、宇佐中皆騒ぎ荷物を山へ運び丈夫な家へ頼み、男女の騒ぐ声喧し、当寺へも籠司長持の類より諸品を持来り積重ねる。八ツ半時(15時)ゆる小。七ツ時(16時)又ゆる小の大、六ツ半時(19時)より曉までの間に小ゆり4度

26日晴天風大に吹く、昨日のゆりの事を漁船の人に尋候に地方より3、4里沖に船掛りいたし申内、五ツ半頃波だぶだぶとして船ゆり家にてゆらるるも断断同時に与津浦の山崩れ煙のこときもの立つを見て扱は何方も大地震なるべしと相考へ櫓を立直し帰りける趣

1857 安政 4 豊作

〔室戸町誌〕 麦豊作、一貫に2升(白米は1升)尚松魚船も大漁

1858 安政 5 6 29 (8 8) 風雨 (筑後暴風)

〔真覚寺日記〕 28日晚方大風雨 波高く風烈しく往来する者なし。畠地物少々傷む新在家西外山の岸今日の波に又崩れ往来の者迷惑する。29日風雨、八ツ時(14時)まで風雨相交り戸をたたく波大いに高し。七ツ(16時)頃より風斗り吹く日入頃雲少々退く、夜星二つ三つ見ゆる。夜中風大いに吹く。

1858 安政 5 7 14 (8 22) 洪水 (近県記事なし)

〔真覚寺日記〕 (雨天)波濁り大いに高し、雲は昨日の通り。巽より乾の方へしきりに飛ぶ。日没後雲少し廻る由、15日、昨日二淀川洪水、川上より家流れ来り、当浦の者塩地坂畔へ水を見に行きし由、浦洲の浜へ猪一匹流れ来り数人集り切りさき分ち食うに其肉新しく少しも腐臭なき趣、高岡辺も水入来るべしとの覚悟にて家の諸道具取片づけ待ちけれ共、次第に水引きけるゆへ安心すという。

〔中村町史〕 13、14日大風雨洪水、上岡利太郎手記に水は川上の堤防道路位2、

3軒まで、町は築地の辺位にて相済み、後川は道路上町は紺屋良蔵辺位

〔注〕 尚真覚寺日記に8.4(9.10)大雨の記事あり

1858 安政 5 8 (9) 天文(彗星)

〔高知市史〕 大なる彗星北西に現はれ、コレラ流行の折から或は夜間彗星の毒氣井に入りて病を發すと稱して井を覆い且つ夜行を戒む

〔室戸町誌〕 9日夜半彗星東天に出る

〔真覚寺日記〕 8.19(9.25)この間中彗星毎夜出るといふ。始は南東の方に見え此頃は乾の方に当りて見ゆる由、又曰く此星朝七ツ頃には南東に出る。頭東にあつて尾は西に有り、又夜六ツ時には西北に見ゆ。星の頭西に有つて尾は東に有るといふ。8.21日暮れて後彼の星西北に出るを見る。尾の端北斗に近し、色白くして雲の如く流星に似たり。星の頭西にありて光りて白し。

8.29 此間中より方角南により尾を引くときの白氣倍して長し。9.21以前より遙南方へ寄り白氣も少くなり幽に見ゆ。

〔注〕 近世の大彗星の一つ(ドナテ彗星)秋10月最大50°に達する曲つた尾を持ち他に2本の直線状の細尾が見られ稲穂の垂れた形を思わせ穂垂星又は稲星の和名あり。

1858~9 安政 5~6 病氣

〔大變略記〕 5年8月より諸國一般頓虎狼痢流行救い得るもの百に一人、諸國死亡夥し、御園御城下並三浦にて死亡多し、福島浦にては一人死す。

6年又頓虎狼痢の症浪華より宇佐へ伝染し来り四人死す。

今年8月より9月まで冷徹疫止まず宇佐にて七月より死亡100人に近し

〔室戸町誌〕 7月下旬より悪病流行し10月までに両津に人数凡そ50人余り死申候

〔池川年代記〕 6年春夏山筋トンコロリはやり死人多大なり。古今稀なる変症にて諸医その療を知らず。

〔真覚寺日記〕 安政6.8.18 当浦家々にしめ縄を張りにんにくと唐辛を門口に吊るもの多く又誰か言出しけん、頭上に唐辛一つ挟み居るものへは悪病来らずとて男女共頭に辛を頂く。遠方より見ればかんざしの如し。予之を見て考えるに去年分八ツ葉を門口へ吊るもの有しに今年は唐辛にかわる時の変化なるべし

当年は八ツ手をやめて唐辛ワケにはさむ流行(はやり)もの也

髪のある人は理屈がよくけれども坊主頭はせん方もなし

28日 今日まで当浦中悪病にて死去のもの男女合して42、3人有

9.6 今日より37、8年以前大坂辺にて此病はやり死人夥敷由、此病には生魚宜しからずと申事にて大坂辺廻節の値段大上りと成且軍用にも相成趣を以て近頃無相場と申事

〔高知市史〕 安政5年8、9月病氣総数95(16人農人町、15人新市町、13人朝倉町、10人浦戸・新町、7人廿代町、6人蓮池・掛川町、5人種崎町、2人水通・通町、1人堺・唐人・本町)病中の者83人

〔注〕 〔虎痢病流行記〕 安政5年6月コレラ始めて長崎に發し、其の勢の猛烈なる。僅に一月を経て速かに江戸に伝播せり、8月上旬より中旬に至るの際には毎日の死亡千を以て算へ、京・大阪は8月に發し蝦夷及び函館は7月より始まり死亡頗る多し。然れども江戸に比すればその害少なり。氣候秋冷に赴き一時屏熄せ

しと雖も翌年に至り再発して各所に熾盛の勢をなせり、万延元年には稍衰退の状を現し文久元年に至り全く消滅せり

1859 安政 6 7 24 (8 22) 大波 (中部、関東、奥羽風水)
〔真覚寺日記〕 晴大風 波大に高く岩崎の岸又崩れかかる

1859 安政 6 不作
〔曉霞村史〕 不順不作
〔池川年代記〕 安政元實の年より以來中吉の世並にて諸作七、八分、田畑作上る。高嶺の山畑は十分の諸作出来たれ共当年に至りて諸穀高値也。7月に御城下にて米1.9匁山分にて2.2匁、白米2.5、酒3.5、麦1.5、キビ1.4、ケラ麦1、梶草2.7、茶中1.2・下8・極上々2.5、海魚少くて高値なり、是何故を知らず

1860 安政 7 2~3 病氣
〔高知市史〕 寒流行、当時之を犬吠風と称す。即ち患者の内痰の切れざるためセキする毎に拾も犬の筒吠の如き奇声を発せしを以てこの名称を付せしという

1860 万延 1 4 8 (5 28) 大雨 (北九州)
〔真覚寺日記〕 7日陰天五ツ半(9時)頃より又雨、八ツ時(14時)より大雨塊を穿つ。夜中風添ふ。雨益々甚し。8月大雨終日少しも隙なく降る。本堂の後の谷水大いに出る。昨年冬岸を築き以來斯様の出水は今が始なり。夜中同断本堂諸所へ雨洩る。

1860 万延 1 5 (6) 長雨
〔真覚寺日記〕 10日梅雨中当年は別して降続き日夜うつつう敷、衣類諸道具にかび渡り、足の裏は畳に引付き近頃お月様おがみたる者なし。洗濯したる着物日を経ても乾かず、打盤にてうてん故雨天雨天というぞ。夜中大雨波高し。11日風雨波高し。夜一天雲なく始めて月を見る。

〔注〕 1. 11日中部、関東、奥羽大風雨洪水
2. 真覚寺日記に4.3(5.23)より5.22(7.10)までの4.9日間に雨の記事のある日数は38日。この間下記の記事あり
3. 尚8.4(9.18)大雨の記事あり

1860 万延 1 5 14 (7 2) 風雨 (11~16日阿波大水)
〔真覚寺日記〕 昨夜中別して風雨烈しく雨戸をたたき風枝を折り波の音雷の如し、恐ろしく、雨戸を閉めて夜を明かす。薬師谷の水大いに漲り畠を流し岸を穿ち石を転し浜に至りて人家の門口より床下に入る。往来の道に留る水の深さ1尺余り。雪隠の穢物これに糞り流る。人家損せぬは少なく新在家の堤切れ往来出来かたし。人々大騒動連日の大雨にて小家の者共食物より薪杯に困入る。庭前の梨、柿数十残らず落ちる。此辺のもので小家の者共食物より薪杯に困入る。庭前の梨、柿数十残らず落ちる。此辺のもので近々斯様の長雨谷川の出水凡て覚えざと
〔中村町資料〕 5月中風風雨出水

1860 万延 1 6 10 (7 27) 竜巻 (九州、関東に風水)
〔真覚寺日記〕 五ツ(8時)頃より大風雨、樹木の動揺する声夥しく誠に恐ろしく四ツ(10時)頃萩の海にて竜水を取る。海面摺鉢の如くなり。橋田の浜俄にくらく沙渦の如くに舞う。当寺本堂庫裏共縁側より敷居に沙来る。障子を明んとするに沙飛込んで目を撲つ。橋田の家無事なるはなし。男女沙を被りて騒動する。西浜にて漁船一艘破損
25日、当10日の大風雨の節改田沖にて破損の市艇4、5艘ありし由、中にも五百石位の船は船頭の考を以て陸へ船をつかし上げ即時に船は微塵に成しかども船中の人命に恙なし。其他松尾の酒屋の船に御家中柴田桂吉という人主従三年目江府より帰るに大坂より復船し右の風雨にあい船頭のいう様最早叶はぬゆえ覚悟なされよと、其時柴田は大小を五体え巻つけ主従死を待つ処へ大浪来り只一払に落され海の深層となる。船頭並にカシキ兩人同時に死す。其余船方二人船津に取付き漸く陸に上る

1860 万延 1 7 11 (8 27) 風雨 (四国、近畿)
〔真覚寺日記〕 陰天波別して高し、四ツ(10時)頃より雨降り出す。九ツ(12時)頃より風添ふ。八ツ(14時)頃法用に付新町へ行く。風雨甚し岩崎の山際へ波打掛け往来出来難し。帰りに又岩崎を通るに山へ上り神明の鳥居の前を東へ下る。大波のこぬ間を見て山際を走る有様かの親知らずを通るに異ならず。
〔注〕 新町は宇佐町郵便局付近、岩崎は新在家西はずれの山際

1860 万延 1 不作
〔曉霞村史〕 虫害 米麦共大不作

1861 文久 1 2 27 (4 6) 風水 (近県記事なし)
〔真覚寺日記〕 26夜大雨 27大風雨添、夜に入ますます風雨曉に至てやむ
28晴 29九ツ半(13時)頃より雨夜大雨 30雨 八ツ(14時)頃雨止む
3. 1 此間中の大雨に雁切川の新橋破れ流るという。

1861 文久 1 5~7 干ばつ (紀伊)
〔真覚寺日記〕 6.9(7.15)諸方雨乞の祈禱有という。近年未曾有の旱ばつ也
6.20、此頃の干ばつ一宮近辺別して甚しく水に乏しく田畑は勿論朝夕飯事に用ひるさへ不自由也という。雁切川徒渡り石立八幡辺りまでも同断
6.22(7.29)夜四ツ半頃大雨 鶏鳴頃止む 塵土空に漲る程の干ゆへ雨後大地大に臭し。雨を得て喜ぶ事恰も児童の灸を苦しむ後に砂糖を買いぬぶるが如し。
6.23 久しく干ばつに苦しむ処に甘雨頻りに降り百穀又生榮す。唐芋の枯たる処へ新しき蔓を切り復植る。
〔注〕 1. 同日記によると6月19・22、7月1・4・7・21・22日等に降る
2. 〔池川年代記〕による夏の物価、酒3.9匁、米3.4、黍1.7、大豆5.2、塩1丸1.2、綿1斤6、茶1丸4.0目、梶草3丸3.4(秋9月に4.2)、紙2.3~2.7

1861 文久161 (78) 天文(彗星)
 [森村史] 6月初めより7日の間亥の方へホウキ星出る
 [注] 近世現れた大彗星の一つ 光度木星以上、尾100度。[真覚寺日記]に記
 事なし。

1861 文久1 豊作
 [真覚寺日記] 7.20(8.25) 当年の残暑は別して甚しという。御国中の稲作の
 豊熟近年珍敷事なりという。然れ共城下を始め米価先づ同断、御町方御郡方より下
 知として諸所に於て小売米を出し、貧民を賑給す。一升の価一匁七分という。
 8.5(9.9) 他国は知らず御国中の稲作の豊熟近年なき事にて今年一ヶ年の作に
 て5ヶ年の物なりを取止むという程の事。百姓に尋ねるに一人も不足をいう者なく
 皆大豊年なりという。是を以て愈々満作なる事を知る。夫ゆへ米価次第に下り此頃
 新古共一升に付2匁内外になる。
 8.17(9.21) 米次第に下値に成り1石に付19匁左右、上方筋も追々安くな
 るという。
 [注] 真覚寺日記に8.2~4(9.6~8) 10.5(11.7) 風雨の記事あり

△1862 文久2113 (211) 風雨 (近県記事なし)
 [真覚寺日記] 1.26日記 当13日宇佐福島辺の市艇数艘上方へ登る処天氣俄に狂
 い大風雨。荷打捨て命限り甲浦へ馳込も有り。阿州由岐の湊へ入るも有。当浦中野
 尾船砂糖二百四五十挺捨たる由、然し人は一人も落ちず。是は室津沖より甲浦まで
 の間にひかる難風に逢たる由

1862 文久2 病氣
 [高知市史] 1月寒冒、6月はしか、疫痢流行
 はしかは中年の者重症にして小児の多く軽症なり。又当時赤トンボと呼ぶ悪疫流行
 し患者の面部より一体に赤色を帯び来たり。下痢数回に及ぶや、2、3日にして死亡
 せしものの如し。猩紅熱ならんか。
 [真覚寺日記] 8.20 赤ころり又は金時ころりとも云う。

1862 文久251 (529) 風雨 (2日記伊大風)
 [真覚寺日記] 1日大風雨、2日大風、昨日の雨に二淀川大水上下の渡場往來留、
 当浦の波濁り高し。和泉屋漁船下浦にて鰹節を積入れ帰るに昨日の風雨に逢い船破
 損積荷残らず海上に没し七八貫目の損という。其外4、5艘同時に破れたる有と。

1862 文久2714 (89) 風雨 (讃岐)
 [真覚寺日記] 大風雨、八時半(15時)頃よりますます烈敷、当三年覚えぬ大時化
 日入頃本堂動行する風強く戸をたたき畳を吹上るよふに覚え、尻こそばゆき事也、
 日暮て風少しづつ穩になる。夜半頃より雨止む。

1862 文久2 閏811 (104) 風水 (近県記事なし)
 [真覚寺日記] 日入後極大雨、夜に入りますます烈しく門前の札を吹き折る。二淀川

の渡り止る。小便に出られぬ程の大時化実に入り入る。
 14日記、11日の風雨の時二淀川大水にて川上より数種の物流れ来り。当所にて
 も材木類拾取る者多し。去る酉の年(嘉永2年)以後今度のごとき洪水はなしと
 いう。炭、保佐の類を浜へ打寄せたる事夥しく、ミマセ辺の者はたばねたる稲を拾
 いしもの多しという。
 安喜川、物部川、雁切川皆大水、岸崩れ田畑を破る。
 [曉霞村史] 本年不順

1863 文久328 (326) 風雨 (近県記事なし)
 [真覚寺日記] 7日夜中大風雨、波ますます高し。8日四ツ(10時)頃止む。浪大い
 に高し。東灘津呂の鯨船久保津の帰りを竜の磯に碇をおろし日和を見合す内風波の
 為碇綱を切られ磯繫くことも出来難く、矢帆斗にて沖合へ出るに間もなく船横にな
 る。此船に布団7、80枚も積み鯨の油、鯨の不塩、金子の類悉く海に沈む。乗合
 5、6人の内19才になる男は其家富て万事不足なき者なるが、衆人に向いいう様
 最早命も危し。積荷の損失は苦にし惜しむべからず。何卒何卒我が命さへ助け呉た
 らば一統へ損はかけましといへ共所詮救う手立もなければ共せめては死骸なり共知れ
 る様に致し遣はずべしと漂ふたる帆柱へ括りつけ只波にゆられる。最後待つ斗なり。
 時に竜浦の男女遙に此様子を見て何卒助けんものと血氣の若者18人同時に不動尊
 へ祈誓し皆髪を切り船を押出す。漸く近寄り先づ船津に取付たる者共を助け次に帆
 柱の二人を救い双方共危きを凌ぎ帰る由
 夜中大風吹き尤も寒し。

1863 文久3 良作
 [池川年代記] 諸作諸穀出来、総じて悪疫も近頃無し。尤もトンコロリと云う病流行
 したけれども浦町方にあり山分には少し。梶草高価にて暮し好き時節なりしが去冬
 以来諸品高値なり。塩92匁、米3匁4、5分、大豆は皆無にて5.5匁、黍1匁、
 麦11匁、小豆2
 [注] 尚4年の物価は、梶草72.3匁、諸品高値なり。越年酒3.5、春取3.75、
 米2.7、黍1.7、麦1.8、塩1丸2.4、綿80

1864 元治1528 (71) 風水 (29日京都洪水)
 [真覚寺日記] 27日夜に入り大雨となり曉に至りて大時化、暫時恐怖す。諸人風を
 追う。28日朝大風雨、五ツ(8時)頃風止む。本堂へ雨もり、篋を落し庭木を東
 西せしめ実には安からず。橋田の中傾く家多し。井尻辺の市艇一艘損し人知れずとて
 騒動す。
 [注] 尚同上日記に5.20風雨川止めの記事あり

1865 慶応116 (21) 大水 (近県記事なし)
 [中村町史] 雷雨出水、安政5年以来の水という。

1865 慶応1529 (622) 風雨 (近県記事なし)
 [真覚寺日記] 五ツ(8時)頃より雨降る。晩方大雨、七ツ(16時)頃雲俄に動き

浪高くなる。漁者あわてて船を陸に引上る。日入過より風雨、五ツ(20時)頃より大時化、四ツ半(23時)頃風烈しく雨頻りに戸を打つ。鶏鳴頃より少し風静になる。

閏5.1 大雨夜に入るもやまず。2日雨終日やまず。3日雨晩方風添う。七ツ頃より雨やみ雲薄くなる。新居川(仁淀川)出水人馬渡りなし。

〔注〕〔中村町資料〕夏暴風雨

1865 慶応16 干ばつ (伊予)

〔真覚寺日記〕7.12(9.1)日記 昨夜より今朝までの甘雨に草木甦る。万民声を発して喜び合う。

〔注〕同日記には6.10以後30日間に雨は2日(6月21、22日)のみ

1866 慶応271(810) 風水 (伊予)

〔真覚寺日記〕(大雨)浪高く風添う。四ツ(10時)頃より風雨強く樹木を動揺し田芋の葉を破る。九ツ(12時)頃風別して烈しく屋根の瓦も飛んとする程の勢なり。八ツ(14時)頃雨止む。3日、1昨日より昨日まで新居川出水川留、去る酉年(文久1)以後始めての洪水の由、西畑の百姓甘蔗を流し又は唐芋を押し流され迷惑の家々多し。

〔中村町資料〕6.29 7.1甚雨出水

〔注〕尚同上日記には2.2、5.2 風雨、5.14 大雨の記事あり

◎1866 慶応287(915) 風雨(高汐) (四国、近畿以東)

〔真覚寺日記〕5日雨、6日大雨、波高し百姓皆出て浜方の水へ気をつけ海の方へきり流す。晩方益々大雨夜同断

7日(大雨浪高し)四ツ(10時)頃より風添い雨戸を立籠る。夜入風大に吹き怒ろし。本堂余間の雨頻りに漏り夜半過より風斗になる。

8日 昨夜の風雨に惣じての家も鳥物も散々にて成て当寺浜の唐芋地へ少々汐打込というて来る。夜秋風肌に覚え月明也

9日 此間の大浪に岩崎の道崩れ往来成難きゆへ今日惣出にて道を作る。月明也。

12日 7日の大波に池、浦坂の麓まで浪打来り夫より東唐芋地へ皆汐入る。人家へ浪の入たるも有。先年の大波よりは波別して高かりしという。仁の村は堤を浪打こし文庫落しの麓より北へかけての地皆汐入り。

〔中村町資料〕甚雨風雨激しくキビ、稲大損、凶作

1866 慶応2815(923) 風水 (阿波、兵庫、京等)

〔真覚寺日記〕九ツ頃より雨降り出す。夜中大雨、浪高し

16日(雨)新居川又出水、往来留という。浪も高し。夜九ツ頃月蝕明かに見ゆる

25日 当15日御国処々大水、崖切川別して烈しく今度懸りし橋の上を水越し。西の橋台も崩れ、東の岸も大破一廻りならぬ大傷み。其近辺田畠の損亡云うべからず

其水思案橋より内へ押入る所は井口、高坂辺迄、水深く人家に入たるも有由、東灘

筋川々皆洪水にて村々大傷み、阿州にては川筋の家流れ人傷み凡千人斗死骸海に入りたるを網にて引上ぐる由。是は多分吉野川筋の村々成べき

其日宇佐辺は浪は高かれ共水は左程の事なし。波介、壺池は窪田なれば稲の傷みは当然。波川、大内近辺皆稲大傷み検見の在所多し。早稲の土地は仕合せ能く、晩稲は皆以て散々也

〔注〕吉野川洪水は前項87の風雨によつて起つたもので、この風雨では大害なし

1866 慶応2 凶作

〔日本凶荒史考〕この夏陰冷、秋風水の災ありて諸国登らず。これより先安政6年我が五国通商以降国内の需給円滑ならず。加ふるに維新の変革を前にして天下擾乱。ために穀路は閉ち商旅通せず。去秋より諸物の価騰貴す。幕府乃ち酒造の量を減じ或は外米の輸入を許可し以てその調整を計りたるも昂騰、この秋に至つて殆んど廃止するところを知らず。庶民大いに飢窮す。

〔高知市史〕国中米価騰貴し、細民の生活困難に陥りたるを以て之か調整を図り、米の供給を円滑ならしむる為藩庁より触書を出し米の公定相場を改める。

〔真覚寺日記〕慶応2.8.11 大阪の米1升御国銭にして14匁位に当るといふより又々米を囲い値段を上るもの有由也。七銭1匁3分位に売たる米を八銭1匁3分に売る店多しという。

宇佐辺小店の者其の僅なる利を貪り不仁の所業根性の小さき誠に悪むべし。

15日米価又上り1匁に成る。昨今の祭を得手にして昨晩方米を囲い今朝に至り一升にて5分づつ上げ売りし者新在家に有という。新町辺には昨夜店に米なき故夕飯を食はずに寝たる家2軒あり。唐芋1貫目に付5匁5分、醤油一挺5匁8匁、鰯1貫目6匁位、空大豆1升4匁7分

26日 醤油1升10匁、小豆8匁、米12匁5分、柿一ケ2分以上、木練柿4〜5、栗1升5匁、黒砂糖1斤16匁

30日 宇佐の小家の者米の高きに苦しみ空大豆を買米2合半の中へ空豆1升入れ飯に炊き食するも有。又粥の中へ空豆を沢山入れてすすするも有。麦飯へ空豆入る者は稀也。麦8匁になり空豆5匁5分、米は上方筋は大分下るといへ共当辺一向下らず。塩1升2匁2分

12.19 昨日より酒値上りたり一升16匁4分8厘になる。糯米14匁、灯油1升43匁、上ケ油5匁1匁、小豆1升12匁、大豆9匁5分、麦9〜11匁6、7分、醤油10匁左右、豆ふ1丁1匁、黒砂糖1斤9.5匁、山芋1貫目に付20目以上、唐芋切干1升5匁、唐芋1貫目8匁

12.21 当浦米又値上り13匁に成る。糯米17、麦10、唐芋85、元結一繰25文

〔注〕〔池川年代記〕による物価

慶応1夏	梶草 105	酒 1升 7.5	米 5.5	黍 3	塩 24
2		15	14		麦 5
3.4	白3匁	130~140	22	10	11

1867 慶応35(6) 多雨

〔真覚寺日記〕6.2 当年は入梅の日(5.9)より惣じて雨多く其の上寒くして我等

夜は袷を着し布団を敷き、屋は肌着単物を着る日も有之。又単物二枚重る時也有。
是病身の身なる故也

- 1867 慶応3 7 28 (8 27) 豊作
〔真覚寺日記〕 草林共に枯れ凋む。宇佐の稲は水乾き不熟なれ共波介、蓮池辺の窪地は大豊作三年の分を一度に取込むという程の事也。其余御国中惣じて稲作は豊年、申分なしという。
- 1867 慶応3 8 30 (9 27) 風雨 (筑後大風)
〔真覚寺日記〕 26日雨終日止まず夜中雨なし。28大雨、29雨晩方より別して大雨、30雨四ツ(10時)頃大風雨波高し。九時半(13時)頃より雨やみ大風になる。屋根を取られ墮倒れたる家多し。夜星見ゆる。
- 1868 慶応4 閏4~5 長雨 (四国、近畿以東長雨洪水)
〔真覚寺日記〕 5.18(7.8) 当年ほど雨の降る年もなく暑き事もなし。此頃の雨天の寒さに風を引くもの多し。余り降り過ぎて鳥の為悪しという。漁事もさっぱりなく惣じて淋しき事なり
19日 雨天、八ツ(14時)頃雨やみ夜に入又ふる。冷也。新居川大水也という
〔注〕1 同日記によると閏4.15(6.5) 入梅日より5.22(7.11) までの37日間に降雨した日数は28日あり
2. 5.11~15 梅雨末期豪雨、大阪の被害大
- 1868 慶応4 8 1 (9 16) 風雨 (愛知)
〔真覚寺日記〕 晩方風雨、波大に高し。夜に入雨ますます降り雷鳴甚し。谷水大に漲る
2日 大雨、谷水堤を切つて田の中に流れ出る。浜の堤も一ヶ所崩れる。
新在家界の堤も崩る。中々以て大水なり。
〔注〕 明治改元は9.8
- △1869 明治2 凶作
〔気象学ハンドブック〕 春より不順で凶作となり東北飢饉、米価暴騰し騒動起る。
- 1870 明治3 9 7 (10 1) 風水 (四国、関東)
〔中村町史〕 7月風雨おこり8日出水、嘉永2年以来の洪水で同年に比べ1、2尺低し。
〔大内町史〕 4日から雨、7日に大暴風となり波巻き起り野中(兼山)氏の堤防は数ヶ所欠損。東堀端の家は4尺の浸水、翌3月より修理
〔注〕 引続き18日(10.12) 四国、東海道の風雨あり
- △1871 明治4 5 17 (7 4) 風水 (本県記事なし)
〔日本気象資料〕 四国、近畿風水洪水

- 1873 明治6* 干ばつ
〔綜合斗賀野村誌略〕 54日干続く。
〔注〕 時期不明、(愛媛県気象災害史)によれば1~5月雨なし。
(日本気象史料綜覧)によれば夏諸地方大干の記事あり。
*明治5年末より太陽歴を採用
- 1873 明治6 8 30 風水 (中・四国特に島根)
〔日本気象資料〕
〔中村町資料〕 29日風雨出水、難破船多
- 1873 明治6 10 2 風水 (四国、石川)
〔中村町資料〕 又風雨出水
- 1874 明治7 4 天文(彗星)
〔注〕 本年以降の大彗星は明治13.2、14.5、15.9、20.1、34.4、40.6、41.9、43.1及5月(後者はハリ彗星)、44.7、大4初、昭2.12等である。
- 1875 明治8 豊作
〔綜合斗賀野村誌略〕 大豊作
- 1876 明治9 10 31 雷雨 (近県記事なし)
〔中村町資料〕 夜甚雷雨、中筋川、後川の川筋山崩れ多く没家死死者多し。耕地被害も甚大
- 1878 明治11 風水 (2.1 崧山で大風雨)
〔大津村史〕 洪水で被害大 地租軽減を嘆願す。
- 1879 明治12 干ばつ (和歌山大暑)
〔綜合斗賀野村誌略〕 河水干れ草木枯死
- 1879 明治12 病氣
〔高知市史〕 全国一般にコレラ流行し、本県も亦この災禍に合ひ市民の大半侵され、全市門戸を閉して業を休む。当時この病に犯されれば必ず死すものとして扱い、死屍累々として山をなし、又阿比叫かんの声戸外に濡れたりという。当時は病原菌は空気伝染するものと信じ盛に石灰を全市に散布して捨も大雪の如くにし、各町の人口には番屋を設けて通行者を收容し首を外部に突き出し、下より硫黄を以て燻蒸して後之を離し、町民交代して之に当たりたりと。

1880 明治13 6 3 風雨 (九州)
 [橋本敬函] 高知県3日頃より海嘯し、5日より風雨烈しく10日に至り俄然洪水
 [注] 本月25日四国(伊予、阿波)~関東の風雨あり。

1880 明治13 火災
 [上の加江町史] 九番小路の北全焼

近代篇

- 1882 明治15 6 24 地震
 [気象集誌(高知)] 11時02分強震 壁にひび入り石燈倒る
- 1882 明治15 9~10 天文
 [森村史] 9月初めより10月末まで己の方(SSE)へ夜の七ツ時(4時)大彗星出る
 [注] 近代の大彗星の一つ。尾の分裂や核の変形が著しかった。
- 1883 明治16 2 7 大雪 (北海道、東京、近畿に記事)
 [森村史] 朝より雪 夜2尺つむ(高知は雨)
- 1883 明治16 病氣
 [山田文化小史] コレラ流行
- 1883 明治16 9 12 台風 (九州、四国、近畿)
 土佐沖を北東進した735ミリ程度の台風 高知P744 E79 R61
 [高知県史] 11~15日風雨
 [大津村史] 9月暴風雨 被害大
- 1884 明治17 5 26 晩霜 (28日群馬霜害)
 [森村史] 朝霜降り被害(高知の最低気温11.0度)
- 1884 明治17 8 12 台風 (九州、四国、近畿)
 九州中部から清水と汐岬を掠めた740ミリ程度の台風* 高知P742 E13以上 R96
 [高知県史、羽根村史]
 *台風示度は主に上陸前のものを示す
- 1884 明治17 8 25 台風 (九州~北陸)
 九州中部より周防灘中国に進んだ730ミリ程度の台風、沿岸の被害甚大(死1798)
 高知P738 SSE2θ以上 R27
 [森村史] 九ツ時(12時)大時化 家田畑被害
 [中村町資料] 大風雨少し添う 作物大傷み
 [注] 9月に尚2回位台風害あり、又東北冷凶となる
- 1885 明治18 7 1 台風 (近畿~関東)
 紀伊半島より佐渡へ抜けた735ミリ程度の台風 近畿中部被害甚大 高知P745 N7
 R(6.30)133
 [中村町資料] 暴風雨出水、堤防破壊し家橋流れ田畑損傷、死傷多
 [羽根村史]

1885 明治18 10 15 台風 (東海道、関東)
室戸沖を東北東進した台風 高知 P749 N20以上 R35
〔摘要類函〕 高知16日19時頃より翌朝まで非常の暴風雨〔羽根村史、大津村史〕

1886 明治19 2 低温(少雨)
2月の平均気温3.8は気象観測全期間を通して低温第三位*
〔注〕 尚7月雨量58ミリは累年少雨記録の第4位
*これらの記録は明治15年観測開始以来昭和40年までの毎月(又は年)の値の比較順位を云う。以下略して記録順位又は累年順位

1886 明治19 8 20 台風 (九州、中・四国)
北西進して宮崎に上陸、北九州から北東進した台風 高知21日P751 R117 ESE16.5
m以上
〔下川口村誌〕 16時より21日5時まで暴風雨
〔大津村史〕 8月暴風雨〔戸波村誌〕
〔綜合渡川史〕 1.9時頃から北東の暴風雨、21日益々猛烈、12時頃より河水増加し
14時市街地浸水、風雨は18時ころ衰えたが洪水は19時より減水して、17時の最高
水位は+2.95尺(明治3.9.8より8.3尺、嘉永2.7.9より4.5高い) 住家5、6
流
(上岡利太郎手記) 早き水にて9時頃上町へ、12時頃自宅庭に間もなく座上 これまで
にない水
(右山土居龜太郎日記) 19日より雨始り20日大洪水 太平寺石段18階
〔注〕 P、Rは最低気圧、日雨量の略字(単位ミ、イ)、風向速は最大値を示す

1886 明治19 9 10 台風 (九州、中・四国)
10日の夜翌後水道を北上し11日6時隠岐の北に出た720ミリ以下の台風(経路図は
23.9.11の台風のところあり) 愛媛の被害大 高知P740以下 R84
〔綜合斗賀野村誌略〕 倒家33、死1、山の木多く倒れ2、3日後に赤山となる
〔戸波村誌〕 10日15時より11日5時まで暴風雨出水甚しく倒家40軒余り、大木倒
れ堤防欠損
〔大内町史〕 大暴風雨
〔下川口村誌〕 猛烈な暴風雨 城の峯の巨松多く倒る
〔佐川町史〕 暴風雨 松崎、室原、柏原の家倒れ全村で潰家38、半20、堤防74ヶ、
756間、負傷3、年内821.9.10、17等4回の暴風あり 米収1/2
〔立田村誌〕 秋洪水、竹の端の堤約100間欠潰、稲ぐるを流す
〔高知県史〕 下知村の測候所は庁官の東壁を吹き破られ観測出来ず
〔綜合渡川史〕 暴風強く瓦の飛ぶこと木の葉の如く。市中破損数十軒、不破八幡大杉倒る
(百笑の宮崎記録) 今回の風雨は過般のものに比べ一層猛烈なりし故水かさ亦甚しから
んと口出し合いたりしが、1、2時頃に至り風雨共に衰え雲東に向う。水は漸く進み座
上するものあり。午後漸く減水に向う。町内市郷共潰家夥しく役場、学校等倒壊、屋根
を剥がれる家多し。当年は如何なる凶年か前後大小4回の出水あり諸作皆無同様なり。
住家倒壊91 流4 大破22

(右山土居龜太郎日記) 四度の洪水のところ今日暴風雨 宮林其他山林の大木皆倒れ田地
悉く荒地となる

1886 明治19 9 17 台風 (近県記事なし)
高知P748 R53 風力5で東から南南東に変わる
〔綜合渡川史〕 夜より翌17時まで風雨、水は上町鍛冶屋辺
〔下川口村誌、佐川町史、戸波村誌〕

1886 明治19 9 24 台風 (愛媛、岡山、和歌山、福井、新潟)
被害地から見ると高知近くから福井県に抜けた台風と思われる。南紀、大島付近で遭難した
英船ノルマントン号は日本の裁判史上に大きな影響を残した
高知P741以下 R50 E風力6
〔綜合渡川史〕 水は上町浜屋まで

1886 明治19 病気
〔高知市史〕 コレラ流行 尚硫黄燻蒸法を行い石炭酸を吸入する。患者220

1886 明治19 不作
上記のように年内米収期に台風多く尚其他の不順も加わって本年の反収は88升(当時の標
準値の75%) (昭和20年を除き最低記録)
〔山田文化小史〕 米価騰貴
〔注〕 スンダ海峽のクラカトア火山が爆発したのは1883.8.27 この時吹上げられた
火山灰が成層圏をおおい、以後3年間地球上の日射を10%以上も減らし気温を下
げ、世界的大凶作の原因を作ったと云う

1887 明治20 1~2 降雨異常
1月の雨量は213ミリ累年第2位多雨、反対に2月15ミリは第2位少雨、両月合計量は
平年の140%

1887 明治20 10 7 台風 (四国、近畿、東海)
西日本の南方沖合を北東進した745ミリ以下の台風 高知R91 8日P743 N18.6m
〔日本気象資料〕 沼津以西電信不通
〔高知県史〕 暴風雨

1887 明治20 10 20 豪雨
高知の日雨量212ミリは10月として第一位

1887 明治20 火災
〔久礼読本〕 3.16札場町より出火240戸火く
〔宇佐町史〕 12月、宵の大風にあおられ東の丁の一部と西の丁の殆んど全部を火く。
火元の名をとつておじゆん焼

1888 明治 21 7 22 台風

高知付近から広島を東を通り日本海へ抜けた台風 高知 P734 N114 R23日107
吉野川洪水となる。

1888 明治 21 9 11 台風

豊後水道を北東進した台風 高知 P751 R161 E122

1888 明治 22 1 20 火災

〔羽根町史〕 120正午頃東浜の西から出火 400余 死1

1889 明治 22 8 19 台風

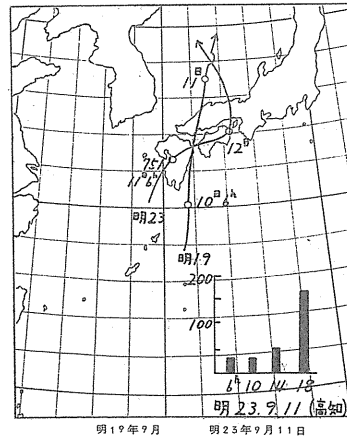
安芸に上陸し高松を通った台風 高知 P733 NW20.5 雨は少い(14ミリ)
〔田野文化史〕 8月奈半利川大洪水堤切
〔注〕〔紀州災異誌〕和歌山の水害甚大 死1221 流家2400 潰家3200

1889 明治 22 9 11 台風

紀伊半島より新潟に抜けた台風 700ミリ位か 高知 P738 R100 N96
〔高知市史〕 公園の宜久忘帰の二亭倒

◎1890 明治 23 9 11 台風

九州・四国を横断した台風 高知 P750 風弱
本県の降雨甚しく死者213 不明者3を出す。
高知日雨量293.1ミリ(4時間に166ミリ)
〔佐川町史〕 9日18時より11日まで稀有の大洪水 死3 全潰3 半17 流8 大破168 堤防137ヶ所(1748間) 道27(257) 橋8
〔戸波村誌〕 9日18時より11日11時頃まで覆盆の大雨、出水山崩れ破堤橋流れ等
〔久礼読本〕 13時大洪水 流家数十戸 人畜死傷
〔おもかげ一須崎市めぐり〕 10日より11日の豪雨に新莊川平水より2丈高く大氾濫、上分全地区濁流渦巻き被害は死不明8 家流失33 倒18 半倒30 浸水278(全戸数486の57%) 堤防流77 破損19 道139(258) 橋流15 田流20反 荒952反 畑10(148) 山崩1200ヶ所
〔奈半利町史考〕 堤防欠かい
〔綜合渡川史〕 9日15時頃よりボツボツ雨、11日豪雨物すごく上町、本町辺も瞬く間に浸水、西空明るくなるも水は尚増加し21時過から漸く減水
市街惨状言語に絶し溺死多数を出した。不破山崩れ3死
(上岡利太郎日記)座上4、5尺 昼夜至急荷物を揚げる。命限りの仕事なり。拙者共こ



の様な洪水には出合はざる也

(土居亀太郎日記)太平寺石灯21皆去。田畑残らず荒地となり1~10年の荒地 免租町被害死13 家流45 全倒13 半13 大破279 田損86.3町 畑70.3 堤269間 道22 大破335 船流6 用水路3060間 溜池4ヶ

〔注〕 この台風引続き18日に194ミリ、又22日~24日殆んど同経路を取った台風の雨300ミリを加える等で次項のような多雨記録が生まれ不作の原因となった。

1890 明治 23 高温多雨(麦不作)

年平均気温16.5は平年より1度高く、同程度の高温が現われるのに昭和30年代の暖候期まで70年位が必要だった。この高温は2、12月の異常昇温(記録順は3位、1位)と殆んど全年に亘る多雨とも関係があり、中でも9、12月及び年雨量は夫々多雨記録順位第1位となる。

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気温	59	93	107	161	186	219	245	259	234	176	128	111	165
平年より	+0.6	3.4	1.6	1.9	0.6	0.5	-0.6	0.1	0.3	-0.1	0.3	3.7	10度
雨量	77	249	385	328	439	271	426	84	1020	353	157	368	4157
平年の	12	25	21	12	16	0.8	13	0.3	2.6	18	14	4.7	15倍

- 〔注〕 1 上表で見られる通り2~4月顕著な暖冬となった。
2 又8月は特に少雨で累年順位は第6位
3 〔高知市史〕米価騰貴、細民困窮とあるも本年水稻反収は並以上(144升、標準値の105%)でむしろ春の高温多雨が麦作に大きく影響し小麦の反収45升(当時の平均値の64%)に過ぎなかつた。

1891 明治 24 9 14 台風

長崎市から日本海へ抜けた715ミリ以下の強い台風 高知 P747 S E 12.3 雨天は7~13日
〔羽根町史〕 風雨

〔注〕 尚8.16高知の東を北上した736ミリの台風あり、安芸郡に被害が予想される。

△1891 明治 24 10 28 濃尾大地震

1891 明治 24 10~11 少雨

各月雨量は31ミリ、18ミリで平年の15%程度、少雨順位では1、2位を占める。

1892 明治 25 4 1 黄砂

11時頃の雨に交り降る。
〔森村史〕 空一面かすむ。土降る。

1892 明治 25 7 23 台風

23日6時頃高知市付近に上陸し北西進して島根県に抜けた730ミリ以下の台風 風は弱かつたが大変な雨で隣県徳島では311人の死者を出した。高知 P733 S E 7.8 R23日36、24日122、25日187、26日79 (吉野川は25日大水)
〔田野文化史〕 大風水、奈半利川堤防欠壊は26.7年に修理

〔立田村史〕 当村被害小、三島村は物部川中須の堤（久枝水門の下より大曲まで約3丁）
欠壊、流家3 死1 十善寺深淵神社の社地流失
〔大内町史〕 泊川洪水
〔戸波村史〕 新莊川筋大變、堤防欠かい、虚空蔵の西山崩れ永野浅井の砂留大破

1892 明治25 8 少雨

月計24.5ミリは少い順位で1894年に次ぐ第2位、然し7、9月とも多雨で米収に支障は無かつた。

1892 明治25 9 12 台風

朝紀伊水道から大阪富山に抜けた730ミリ程度の台風 高知13日P736 NE13.4
R52
〔県史〕 暴風雨

1893 明治26 寒冬

〔1〕 前年12月より2月にかけての寒冬は顕著であり、又低温の傾向は6月まで続いた。
12(平年より) 1 2 冬期
気温 4.8(-2.6) 4.7(-0.6) 3.9(-2.0) 4.5(-1.7)
尚12月雨量9.9は稀らしい少雨で平年の1/8程度である。
〔2〕 本年11、12月は共に平年より可成り低く、年頭の低温に加えて年平均気温14.8は記録順位第2位 尚12月雨量9.4も稀少であつた。
11(平年より) 12 年
気温 10.0(-2.5) 6.0(-1.4) 14.8(-0.7)

1893 明治26 4 22 天文(流星?)

〔森村史〕 夜大火玉南へ飛び間もなく大音

1893 明治26 夏 大干

6月末より8月初まで雨少く西日本被害
〔綜合斗賀野村史略〕 50日間降らず水稻多く枯死
〔佐川町史〕 7.5より不降水稻枯死、8.5漸く大雨
〔戸波村史〕 7.5稻田亀裂 二毛作田は井水を灌ぐ。8.3微雨、5日大雨
〔注〕1 高知で6.25以降の雨は7.9(0.3ミリ)、20日(9.1)、従つて7月雨量9.4ミリは月量最少レコードを作る。8.3(18.0ミリ)
2 7月の日照345時間は7月の多照レコード、尚今年の日照続時数2654時間も累年第1位

1893 明治26 10 14 台風

宮崎・足摺を通り東進して汐岬沖合へ南転した728ミリの台風 高知P740 E17.6
R13日178

〔大内町史〕 暴風雨激浪堤欠山崩あり

〔注〕1 進行おそく西日本の被害大
2 本年8.17四国沖を北東進して紀州に上陸した台風あり、多少被害か。
〔高知県史〕 暴風雨

1894 明治27 夏 高温干ばつ

6月の梅雨期よりの高温少雨が10月の中旬にまで続き、特に8月高知雨量は7.6ミリで驚異の記録となつた。県内でも津呂0.8 越知4.8 窪川11.5 清水10.0等
月 6 7 8 9 年
気温(平年より) 232(+18) 263(+12) 268(+10) 249(+18) 161(+05)
雨量(平年の) 192(52%) 122(36) 8(2) 264(69) 1605(61)
高知では7.26~9.1の38日間に(1ミリ以上の)雨の日2日に過ぎない。
〔注〕1 この年は近国皆干ばつ被害あり。〔綜合斗賀野村誌略〕河水かれ
2 年雨量1605ミリは少雨記録第2位、8月気温26.8は高温第3位

1894 明治27 8 6 火災

〔久礼読本〕 七軒町より出火 180戸

1894 明治27 9 11 台風

11日朝宮崎の海岸を北上して12時米子へ抜けた720ミリ程度の台風、この雨は越知313 中村267 窪川237 高知P740 SE16.9 R64
被害主に西郡で死4 傷50 全倒2252 半1671 流12 大破5792 床上126 下315 田流埋27町 畑48 小舟流47 破161 水稻被害6779町
32396石減(39.8%に当たる)
〔注〕〔綜合斗賀野村誌略〕倒家数ヶ 〔高知県史〕西部水害大 〔田野文化史〕

1895 明治28 3 4 流星

〔森村史〕 10時南空で大雷数個一時に鳴りし音して、2、3分後に白煙を漂はせる。
流星大気圏で破裂の由 全国に聞えし由
〔区内報告〕 (窪川)11時南東より流星の如きもの北西に飛ぶ中破裂発煙すぐに大砲の如き音を出し家屋震動す。(中村)10時過東より北へ火玉の如きもの飛び暫くして大音、其他清水、桑尾で聞える。
〔注〕〔山田文化小史〕に27年瀬戸内に大隕石、授業中障子震い児童驚くの記事あるも上記の流星と混同か。

1895 明治28 8 台風

(1) 22日9時須崎より北上、松江に抜けた730ミリ位の台風 次の台風の前駆をする。
高知P739 風雨は弱い 津呂140ミリ
(2) 24日11時30分桜島を通り北九州へ北上した719ミリ以下の強台風 高知25日
P744 SE12.1 R69 久主318 越知245 中村157ミリで多少被害
上記の外9上旬・10中旬に台風害があり、総被害は死1 傷3 全倒23 半15 大破61 床上26 下80 田流埋63.7町 畑211 堤欠887間 破1175 道2321

橋流 8

△1896 明治 29 6 15 地震
三陸大津波

△1896 明治 29 暖冬
雪激減 ノリ大損害

1896 明治 29 8 18 台風
17時頃清水の西に上陸し米子にぬけた730ミリの台風 高知 P734 ESE 22.5
雨量 16日 久主 350 越知 122 17日 川崎 206 久主 202 大柄 167
18日 川崎 320 で西部県境は16~18日の3日間に500~600を計り海岸で100
ミリになっている。西部被害大
〔高知県史〕 西部洪水
〔注〕 本年は尚 8.30 紀州を北上したもの(高知 N20.8) 9.11 県南を掠めて NE
進んだ台風がある(高知 P742 N17.8) これらの両台風で和歌山の被害大

1896 明治 29 9 上旬 大雨
上記〔注〕の台風の外 4 日前線性の大雨があつて上旬は連日雨天となり徳島や近畿以東で広
範囲に被害となつた。県内 4 日の雨量 上野尻 470 大柄 267 高知 265 桑尾 211
(其他は少い)
〔注〕 徳島県南部の雨量は10日間に1000ミリを越えた。

1897 明治 30 9 29 台風
夜熊本付近から上陸し四国北部を東進した735ミリの台風、27~29日の3日間大雨の
ため出水、高知 P741 SW7 (R240)* 県内雨量 27日 津呂 144、28日 窪川
235 中村 204、29日 本山 280 桑尾 202 三日合計雨量は本山 498 窪川
平石が455 東部海岸が200ミリ程度
〔注〕 1 嶺北地方の雨量は500ミリで吉野川洪水となり徳島県の被害大
2 尚本月9日0時に汐岬を掠めて東京へ進んだ722ミリの台風があり東海等に
被害
*(R) は22時観測雨量を、カツコ無しは10時観測値を示す。

1897 明治 30 9 秋りん
上記二箇の台風に加えて月中雨天多く(20日位) 県内の雨量は500~1000になつた。
(その内の約半量は29日の台風の雨) 桑尾 1076 本山 901 横山 821 高知
730 窪川 702
〔注〕 1 本年は全国的には冷害、西日本・太平洋側はむしろ多雨が特長となる。
2 上記のように8月以後の天候不良で不作となり、反収120は標準の84%

1897 明治 30 12 27 怪雨
〔戸波村誌〕 2時大震動の後大雨、灰を混ず。

1898 明治 31 1~2 温暖
前年末12月は平年より2度以上の低温だったが1月79(平年より2.6)、2月71
(12)と甚だしく昇温し、特に1月の高温は累年順位第1位となる。

1898 明治 31 2 1 隕石
〔在所村史〕 4時頃 SE に大砲音あり初の音が最大10発位聞える。急に空明るくなり南
から北に火の玉飛び破裂して花火の如く大音と共に落下、3尺以上掘り起こす(朴ノ木部
落)
〔天文と気象〕 (1964 11) 重さ0.3キロ、比重4.9の石鉄隕石

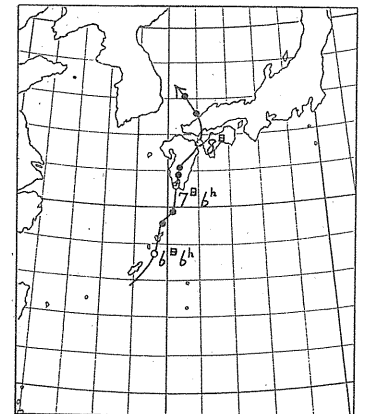
1898 明治 31 9 2 台風
九州南部から四国を通つた台風 高知 P744 SE 5.5 尚この台風に先だつ31日24
時頃四国を通つた低気圧があつて引続きの大雨に、多少の被害となつた〔高知県史〕
8.30~31 合計雨量 須崎 398 越知・高知 247 桑尾 243 安芸 203
9.1~2の合計 榎原 237 須崎 233 桑尾 211

1898 明治 31 豊作
米作期の気温は大体並、雨量も夫程の差は無かつたが日照多く、今年の豊作を作つたと思わ
れる。反収 182 (標準値の124%)
気温(平年差) 4 5 6 7 8 9
135(-07) 181(+01) 217(03) 252(01) 260(02) 234(03)
雨量(平年比) 178(69%) 291(109) 364(108) 145(41) 462(141) 370(97)
日照(") 199(105) 221(109) 195(128) 227(106) 256(116) 218(130)
〔注〕 小麦作は並

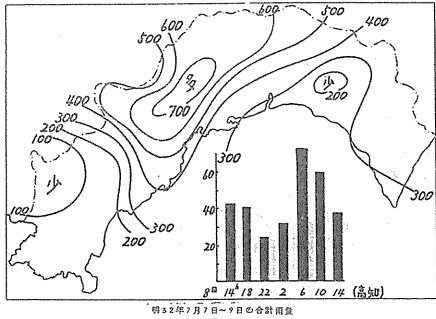
◎1899 明治 32 7 8 台風 (西日本)

715ミリ以下の台風、沖縄からゆつくり北上し
て14時鹿兒島、9日6時佐田岬を通つた。西日
本は風雨害大きく本県も仁淀川の洪水被害で死者
多数を出した。(次項注2参照)
高知 P738 ESE 22.1 R263 越知
484 窪川 397 本山 386 桑尾 362
榎原 343
7~9日の3日合計雨量は図の通りで仁淀川中流
域が900ミリ近い。

〔注〕 1 〔戸波村誌〕 大風雨出水、仁淀川
は中島堤かけ流13戸 死19(「土
佐の地震」では水没18 死9)
〔立田村誌〕 物部川堤約100間切、
本村大害なし。
〔大内町史・高知市史〕 暴風雨



明32年7月8日



明治32年7月7日～9日の合計雨量

〔綜合斗賀野村誌略〕大洪水役場の東にかけ路面上2尺、西山太谷の大崩れで田畑数反埋る。

〔中村町資料〕町内109戸を除き全部浸水、平水より29.5尺

2. 吉野川洪水となり徳島県の死傷多し。

◎1899 明治32 8 28 台風

(西日本)

720ミリ位の強い台風で進路一体に豪雨となり、隣県愛媛、香川の被害は殊に大きく本県も死者多数を出した。(下注2参照)

高知 P722 ESE22.5以上 R79 嵯原217 本山159 越知136
尚降雨は27日午後から28日中で大体終り、総雨量 嵯原264 本山238 越知195
で海岸が1000ミリ

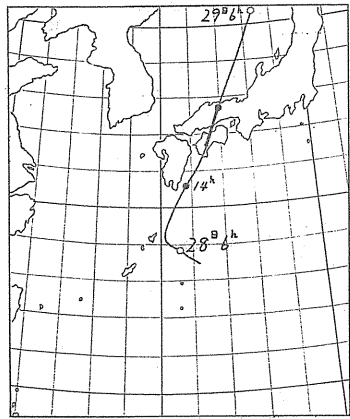
被害 死104 傷192 全倒7469 半2733 船流110 橋流22 道245
所1709間 堤1210所1953間(この数疑あり)

〔注〕1 〔県史〕高知城天守のシャチ、測候所風力計飛ぶ(従つて19時15分以後の記録なし)

2 本台風の県内雨量少く、又下記の4によつても上記の被害を予想することは困難である。

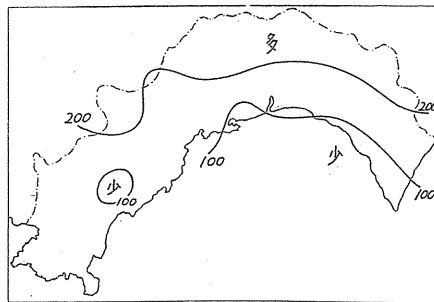
別の統計では死36 傷63 船33 家全潰2064 半816とあり上記の大被害は恐らく7、8月の合計量であり、7月の被害の方が大きいのでは無かろうか。尚本台風による高知市内全壊243戸

3. 本月の大雨は本文記載以外に14、5日(北九州、山陽通過の台風)20日



明治32年8月 太陽 高知の風速15%以上

4. 〔立田村誌〕本村左程でなし
- 〔大津村史〕学校一部倒
- 〔山田文化小史〕電火起り火竜巻くこと空前
- 〔中村町資料〕15時頃より雨
- 16時頃南風起り17時半頃北に



明治32年8月28日の雨量

変り暴風雨となる。18時西に変わる。近代未聞の風也。19年の風に数倍す。人は歩行する能はず、礫小石の如き、恰も豆を投げるが如し。住家全倒66 半36 大破729(非住92 28 517)

〔おもかげ一須崎市〕上分の倒家17 半9 大破17 小学校1

〔綜合渡川史〕暴風雨は短期であつたが風強く19年の暴風雨に数倍し全潰66 大破725

〔佐川町史〕負3 倒家38 水害少し。

〔戸波村誌〕63戸破倒

〔久礼読本〕数戸及び仮校舎1倒 尚火災あり。

〔土佐の地震〕荒しの間電光あり、市中無きずの家一もなし。

5. 本台風により愛媛県では別子銅山の崩壊で512 其他河川氾らんで150の死者あり。又香川の死者は340という。

1899 明治32 9 8 台風

10時頃室戸岬を掠めて北東進し14時前和歌山に上陸した730ミリの台風
高知 P740 NNE25.6(R7日64) 7日田野283 窪川135

〔注〕〔土佐の地震〕後免警察調べ被害 死6 傷18 倒家478 半267 流2

〔田野文化史〕大暴風雨

1899 明治32 9 21 台風

20日夜九州西岸を北上し22日午後日本海へ入つた台風、進行速度がおそいので大雨被害を出す。高知 P751 SE9.9 R19.4 20日雨量越知360 中村252 須崎200 21日窪川477 越知421 嵯原192

雨量図は3日合計だが殆んどが20、21両日に降っている。

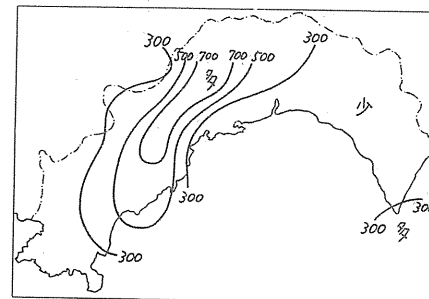
〔注〕1 〔森村史〕18時より大暴風雨
村内数十戸倒 高須12戸

〔佐川町史〕洪水堤欠20所(615間) 破38(382) 道流4

(20) 破15(150) 橋流9 破2

〔戸波村史〕洪水朝よりの風午後甚だ強

〔久礼読本〕暴風雨大洪水 堤欠6000間 田畑大損 300



明治32年9月19日～21日の合計雨量

戸避難

〔おもかげ一須崎市〕上分床上浸水39

2. この大雨其の他に月量は1000ミリを越えたところあり(下記参照)

1899 明治32 9 下旬 秋雨

上記の台風による豪雨の外23、4日 南方洋上西進のもの等で19～29の11日間殆んど連続雨天となつた。

この11日間の雨量は越知972 窪川865 清水・中村565 津呂518 本山483 桑尾473 梶原447等。従つて本月雨量は8日の台風の雨を加えて県西部の傾斜地で1000ミリを越えた。

尚この大雨は次項のように非常な低温と日照不足の一因となり大不作を起した。
(越知1141 窪川1062 中村702 室戸689)

1899 明治32 不作

相つぐ台風の襲来と天候不順は米作に大きく影響し、反収114升(標準の77%)となる。本年の天候を平年と比べると

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気温	49	71	103	147	184	224	248	251	217	149	105	93	153
平均より	-04	+12	+12	+05	+04	+10	-03	-07	-14	-28	-20	+19	-02
雨量	67	200	131	309	247	473	632	502	516	153	81	84	3394
平均の	11	20	07	12	09	14	19	15	20	07	07	11	13倍

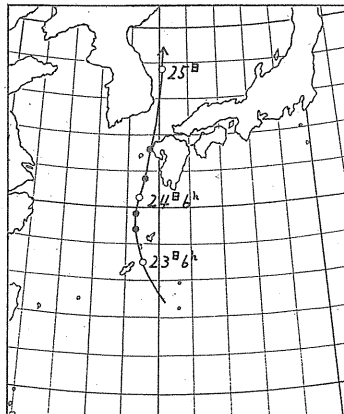
稲作前期は稍高温並雨、並照に経過したが後半に入り低温多雨となり特に10月の温度は低温記録第1位

(注) 30・31年共豊作、本年小麦作は並

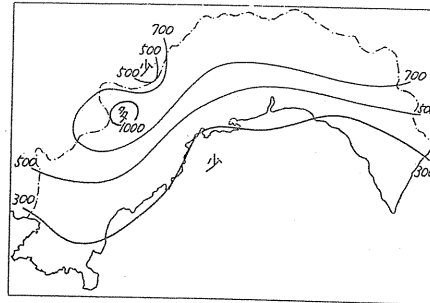
1900 明治33 8 24 台風

23日朝沖繩の東、24日九州西を北上した738ミリの台風 低速のため雨台風になつた。高知P753 梶原105 23日R101 梶原399 越知274 田野々250 桑尾230 24日本山292 大栃265

(注) 1 19日朝九州東岸を北上した速い台風があり、多いところで1000ミリを観測したが雨天は引続いて本項の台風にまで延びたので、18~25日の8日雨量は図のように北部県境一体の大雨になり、梶原では1000ミリを越した。従つて月雨量も梶原1041 本山970 大栃878
2 全県的な大雨で被害があつたと思われるが記事がない。



明治33年8月24日



明治33年8月18日~25日の合計雨量

1900 明治33 9 28 台風

28日の朝土佐沖を通り汐岬に上陸した715ミリ位の台風 本県では海岸で200~300ミリ、西部内陸は100ミリ程度、高知P739 N197 27日R242 県内多少被害

1900 明治33 12 9 大雪

大陸高気圧の張り出し強く8日から西部山地で大雪になり、梶原では56cm積る。

1901 明治34 1~2 気温急変

1月気温7.8は明治31年につぐ高温で平年値より+2.5を示し平均気温の累年順位は第2位となつたが、翌2月3.4度は反対に-2.5となり、低い順位で同じ第2位を占めるという異常を示した。(2月の低温は翌3月に続き平年より-1.1)

1901 明治34 5 15 晩霜

13日から15日移動性高気圧の通過中で12日は剣山にも冠雪があり13・4日中部地方を中心に晩霜あり。本県梶原では15日の朝霜を見た。

1901 明治34 6~7 梅雨顕著

入梅後13日前後に一雨あり飛んで20日から本降りとなつた。7.20まで殆んど連雨し(降らないのは23・4日と7月6・9・18日位)、この間の雨量は上野尻の1000から安芸の550ミリの間で県の中央山嶺に添うて東西方向に多く、海岸部と吉野川盆地が少い。尚7月は下旬後半にも毎日雨が降つて、月の雨日数は20日を数えるので、関連して月平均気温は低下し、23.2は低極順位第1位となる。

1901 明治34 火災

(安芸郡史考) 甲浦の東股120戸

1902 明治35 4 11~14 晩霜

10日にNW風強く11~14日移動性高気圧におおわれて(全国的に)連日の晩霜があり。尚梶原では降雪を見た。高知の最低気温は11日より0.9 -0.5 10 2.2

1902 明治35 4~8 低温多雨

平年比較は次の通りで4、7月が特に低く(7、8月は低順位第3位)又雨量では5、8月が甚だ多くなつている。

月	4	5	6	7	8	年
気温(平年より)	127(-15)	177(-03)	208(-06)	235(-16)	247(-11)	154(-01)
雨量(平年の)	315(12倍)	547(20)	392(12)	351(10)	615(19)	3354(13)

この間に7.20前後の梅雨末期の大雨や8.10台風等の襲来がある。

(注) 1 本年は全国的な不作で殊に東北地方は冷凶害を受けたが本県の反収は141升標準値の93%
2 8月の平均気温は第2位低温記録となる。

1902 明治35 8 10 台風 (関西)

10日14時熊本に上陸した720ミリの台風 鳥取付近から日本海へ出た。
高知P744 S77 R115 寺内248 本山238 大柄224 檜原176
関西地方で大水害を起したが本県も連日降雨の後とて多少被害と思われる。

〔注〕 尚18日には桑尾、伊野を中心として200ミリ以上の降雨がある。

1902 明治35 9 7 台風(高汐)

この台風は北西進して7日夕方宮崎に上陸し以後北進した730ミリのもの。さがみ灘の浪害が特に有名 高知P741 ESE275 R62 鶴原448 田野々371 本山358 寺内355 大柄342 江川崎311等で西部山地に多く洪水被害となった(又海岸で浪害)が東部は少量

〔注〕1 〔中村町資料〕8日11時満水、平水より24.3尺高。半倒5 大破10 床上45 下77戸

〔久礼読本〕暴風雨高汐 7日増々激しく町民1000避難

〔立田村誌・高知市史〕暴風雨

2 県の統計書による本年土木被害 河川462千円 道38 橋9 建物16 田14.6 畑34

1902~3 明治35~6 暖冬(麦不作)

11月に始まって4月に終る暖冬は3~5月の多雨と相伴つて明治36年の麦作に大害を与え記録的な低収となった〔反収大麦90 稈73 小麦42(当時の平均の64%)〕

月	11	12	1	2	3
気温(平均より)	14.3(+18)	9.5(+21)	6.7(+14)	6.4(0.5)	11.7(26)
雨量	3月417(平年の2.3倍)	4月360(14)	5月578(22)		

〔注〕 本年以降の顕著な麦不作は昭18、21、38、39

1903 明治36 冬~春 暖冬

麦のサビ病で31府県大被害

1903 明治36 7 8 大雨

6月下旬からの梅雨は7月中統き特に8、9日大雨となる。この雨は7日午後山陰を通つた低気圧と9日早朝四国沖に現れた低気圧(恐らく熱低745ミリ)によるもので近畿中心に水害が発生した。8日雨量中村・田野338 安芸313 窪川305 大柄296 清水290 上野尻250 7日からの合計雨量は多いところで400ミリ位になり洪水害を起した。

〔注〕1 本月は雨天日数20日以上で甚だ多雨になった(次項参照)

2 〔中村町資料〕浸水50戸 平水より21尺

1903 明治36 7 低温多雨

前項の大雨に加えて月内雨天多く(20日以上)多いところは1000ミリを越した。多雨地帯は東部山地から中央山嶺を経て堂ヶ森台地へ東西に連り、海岸部と嶺北地区が少い。

1037ミリ(桑尾)と701(檜原)の間、高知の雨量769は順位第5位

尚今月の気温23.6は低極順位第2位である。

〔注〕1 翌8月は反対に好晴連続し雨日数5~10 雨量50~130で両月の合計量は平年の1.2倍と云つたところ。高知月雨量57ミリは少雨順第3位

2 〔県の統計書〕本年の土木被害(単位千円)河川354 道24 橋19 田136 畑46

◎1904 明治37 豊作

6月を除いて各月降雨少く従つて多照で(気温は並)、特に台風の影響少なかった事が空前の豊作をもたらした。反収194升(標準値の125%) (以後この様な豊作になるのは29年後の昭8)

月	4	5	6	7	8	9	10	年
雨量(平年の)	246(09倍)	172(06)	419(12)	222(07)	153(05)	70(02)	184(09)	1799(07)
日照(平年の)	150(08)	183(09)	145(09)	235(12)	269(12)	188(11)	186(10)	2305(10)

〔注〕 本年の台風は8.31室戸を、9.17紀井水道を北上したが影響少い。

1905 明治38 6 梅雨顕著

7~9日と下旬の2、3日を除いて降雨連続し特に梅雨入り始めに大雨して日量100ミリ以上の日は10、13、14、20日等。このため月総計は600~900ミリ、東部から嶺北に多い(大柄972 本山964 大田口940等)。これに加えて日照不足(平年の60%)は3月の不順と相俟つて麦作に大きく響いた。

〔注〕1 3月は多雨(雨日数20日内外、高知の雨量は平年の1.7倍)と日照不足(平年の60%、少い順位第1位)

2 反収大麦93 稈89 小66 以後これ程の低収を記録することはない。

3 〔戸波村誌〕14日大雨

1905 明治38 8 16 台風 (西日本)

天草から別府を通つて17日朝呉に進んだ台風、735ミリ程度 多雨のために被害を出した(宮崎、愛媛) 高知P747(17日) E10.8 R153(10時)

県内の雨は15日午後から降り出し17日朝までに県境で200~300ミリ、特に檜原は380ミリになった。

16日量 檜原357 大柄346 越知311 田野々256 上野尻252 窪川247 本山245 桑尾232 中村196

〔注〕1 〔中村町資料〕平水より23.5尺

2 〔県の統計書〕本年土木被害 河川390千円 道5.2 橋2.7 建物10

田13.9 畑3.3 尚37年は無害、39年は少被害

1905 明治38 8 低温

本月の平均気温24.5(平年より-1.3)は順位第1位の低温になる。この低温は全国的で特に奥羽に激しく(平年より3、4度低い)、従つて全国的な冷凶をもたらした(幸い本県水稲作への影響は少なかった)

この原因として多雨(降雨日数20日前後)、少照(平年の65%)が挙げられる。

〔注〕1 気候不順は本月で終り9、10月は平年値に戻る。

2 本年の米作反収 145 升 (標準の 92%)

1907 明治40 2 11 大雪

台湾方面からの低気圧が四国沖を通過したために関東以西は大雪となったもので、四国では 10 日夜から積った。県内の記事を挙げる

土佐山村 北方 森村境では 10 尺以上に垂んとし、他の村境でも 5 尺を降(くだ)らず村内 1 尺以上

本山 15~18 尺 梶原 8.5 寸 須崎・斗賀野峠 1 尺~1.5 高知 4~5 寸 大田口 1.9 時 頃 3.5 寸 2.3 時 7.3 時 9.8 7 時 15.5 窪川 5 寸 近くの山坂 1 尺以上 津呂 4 寸

安芸積らず 中村雨

- [注] 1 今月の平均気温 4.0 (平年より -1.9)
- 2. [綜合斗賀野村誌略] 平地 1 尺 竹多く折れる。

1907 明治40 7 18 台風

北西進して 18 日夕方足摺岬に上陸し山口県へぬけた 740 ミリ以下の台風 高知 P744 E193 R115 越知 241 上野尻 236 大田口 204 大筋 197

急に天気悪化したため被害を増大した模様

1907 明治40 9 7 台風

九州の西岸から山口県へ北上した 735 ミリの台風 ゆるい速度で大雨時間が延びる。高知 P745 E14.8 R179 県内では 4 日から多雨となり、5~8 日は 100 ミリ以上を観測した。各地の雨量

日	中村	下山	田野々	梶原	窪川	越知	桑尾	本山	大田口	上野尻	大筋
6	208	215	193	341	325	194	248	204	146	149	212
7	29	118	251	272	130	208	205	384	241	158	150

このため 4~8 日に 700 ミリ以上になったところもあるが大体は上記の 6、7 日に集中し洪水被害を起した。

- [注] 1 [中村町資料] 浸水約 500 戸 平水より 20 尺余り。
[綜合渡川史] 明 23 年以來の洪水 京町、中町等高所も床下浸水
- 2 吉野川大洪水
- 3. [県統計書] 本年土木被害 河川 123.9 千円 道 18.3 橋 24 建物 19.4 田 22.3 畑 14.6 船 0.9

1908 明治41 8 10 雷雨

7 日に土佐沖を通った台風のあと小低気圧停滞し大雷雨になった。特に越知、須崎を中心に日雨量 400 ミリを計り越知、戸波では 11 日夜にまで続き出水した。

須崎 40.3 越知 39.8 窪川 33.1 梶原 28.8 伊野 20.4 田野々 20.0

- [注] 1 [戸波村誌] 10 日夕大雨覆盆 電光雷鳴 11 日夜を徹して豪雨出水
- 2 越知では 9 日 12.8、11 日 19.2、12 日 10.8 で合計雨量は 82.6 ミリ

1908 明治41 8 多雨

今月は 7 日土佐沖を北東進した台風と 24.5 日東支那海をゆつくり北上した台風があり、

尚上記の雷雨が重なって、降雨日数 19~24 日、100 ミリ以上は越知では 7 日を数える等で非常に多雨になった。特に少量なのは大田口の 37.6 ミリ

越知 163.0 窪川 130.9 桑尾 112.4 須崎 109.8 其他 600~800 高知 88.3 は第 3 順位

- [注] 1 高知の雨量 83.3 ミリは第 3 位多雨記録、尚 9 月雨量は平年の 4.7%
- 2. [県統計書] 土木被害 河川 193.3 千円 道 6.6 港 2.0 田 26.9 畑 5.9

1909 明治42 8 6 台風 (九州・四国)

西北西進して土佐沖を通り 6 日 6 時宮崎北方へ上陸した 740 ミリの台風、天気急変したため漁民遭難多く、宮崎、大分被害大、死 111 高知 P750 NEN10.6 R26

梶原 16.7 田野々 14.9

- [注] 1 [下川口村誌] 漁民大難 100 余 5 日快晴出漁 14 時頃より西風、16 時頃 SE に株疋生ず。たそがれ北東のなまぬるい風北に変わり、24 時頃殊に激し。且つ覆盆の大雨加はる。翌 6 日 7 時頃より再び猛しく南東に変わり午後止む。出漁の 19 隻中 3 隻のみ帰る。
- 2 南予の漁民足摺岬南方で罾釣り中遭難し大部は大分県に漂着、宮崎海岸へは 518 人 死体 88 舟 26
- 3. [県統計書] 本年土木被害 河川 2.9 千円 道 1.2 橋 2.2 田 1.8 畑 1.9

1909 明治42 11 10 地震 (日向灘) [M7.9]

15 時 14 分発震、高知でも壁、庇の破損多く負傷者あり。
[理科年表] 震域広く日向、土佐、豊後、備中等にて漬家死者を出した。

1909 明治42 11 30 火災

[高知市史] 新市町下一丁目より出火、折からの西風に南新町 4 丁目まで焼け 144 軒

1910 明治43 5 20 天文 (ハリ彗星)

[室戸町誌] 19 日太陽面通過、本日地球と最近
[注] 前の出現は 1835 11 月

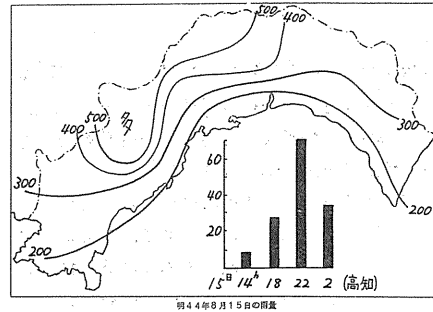
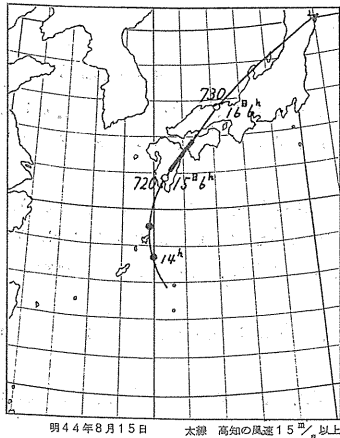
1910 明治43 9 7 台風

7 日夕方草島から上陸し瀬戸内を通った 745 ミリの台風 本県で降雨は 3~8 日、5.6 日に集中し各日 100~200 ミリを計った。高知 P751 SE10.7 R6日 117 5 日須崎 17.0 本山 15.3 伊野 14.5 6 日大田口 22.5 伊野 20.1 本山 19.0 7 日本山 21.2 合計雨量は嶺北が 600 ミリを越え (従って吉野川洪水を起こす) 東西両岬が 100 ミリ以下だった。大きな被害はなかつた模様。

- [注] 1 今月の降雨日数は 20 日を越えた所多く (月雨量は並量を上廻る程度) 極端な少照となった。日照時 72.9 (平年の 4.4%)
- 2. [県統計書] 本年土木被害 河川 6.0 千円 建物 2.0 田 6.8 畑 1.3

1911 明治44 8 15 台風

風雨は15日で殆んど終つたが山地での日雨量は400ミリを越した。このため西部の被害大きく、又吉野川大洪水となり徳島で土佐水と云われる。高知P735 B20.8 R113 用居437 桑尾386 田野々383 橋原379 大栃356 大田口339 越知318 長者305



〔注〕1 〔綜合渡川史〕23時全町浸水、流・全潰24 破1000 床上800 下200 渡川は平水より26.5尺、後川は28尺 〔立田村誌・高知市史〕暴風雨

2 〔県統計書〕本年土木被害 河川95.8千円 道21.8 橋28.7 港8.1 建物28.3 田48.3 畑21.7 船13.6

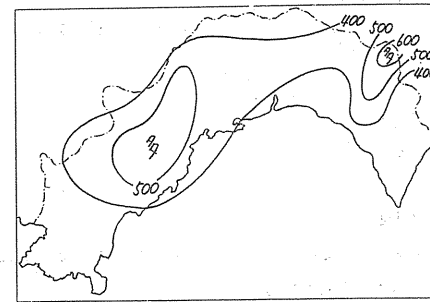
◎1912 大正1 8 23 台風(高汐)

土佐沖を北上して来た730ミリ程度の台風(経路図は下記台風と同載)この夜、夜須付近に上陸し東部は激しい暴風雨高汐となり被害甚大 高知P743 NW12.8 雨量少 東部で局所的な大雨となり馬路416 大井298 津呂209 安芸140 別府250 大栃120 被害 安芸郡死33 全潰1854 半1240 大破2100 浸水115 漁船82 県下全潰3160 半6000

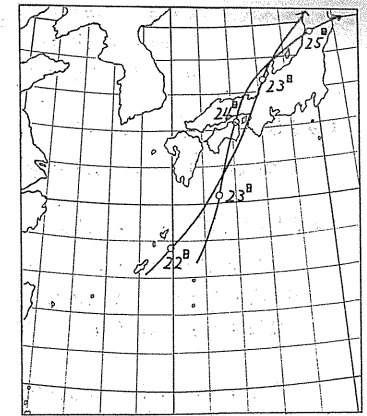
〔注〕1 〔室戸町誌〕無数の怪火飛んで昼の如し。早朝台風眼を観測する。松の大木を倒す。津波あり港の被害大 波は渡川橋まで。 〔羽根村村史〕新築の小学校39間2棟、中川内分校、八幡宮本殿外寺2 人家372倒 167半潰 漁船山林8分 作物6分の被害 戎町に波入り南側の人家は床上浸水道路上2尺余 〔綜合渡川史〕6時過ぎ全町浸水 全及び流戸7 半10 2 台風経路図は9月台風に並記 3 明治45年は730改元

1912 大正1 9 22 台風(高汐) (近畿以東)

夜中に県の東部海岸を掠めて北上した700ミリの大型台風、21・22日の合計雨量は



大1年9月21日~22日の合計雨量



大1年9月22日

500ミリ内外で風水害が大きく、又経路が室戸台風と似ていて高汐害も大きい。高知23日P723 NW16.7 R19.7 21日窪川271 須崎267 伊野234 22日別府448 長者380 橋原・田野々・窪川・大田口・芳生野・大見野・瀬戸・大井330~300 被害:死1 不明3 全潰250 半130 大破170 床上1040 下3200 船流破200 浸水6619町 流埋81

〔注〕1 〔立田村誌〕又室戸岬で火の玉飛ぶのを見る。 〔中村町資料〕23日6時5分全町浸水、道路堤防の破損多し。前年8.15の洪水と大差なし。 2 尚10.2おそくと3日の昼に四国を通つた二つの台風があり、県内で200ミリ内外の雨を見た。 3 〔県統計書〕本年土木被害 河川78.7千円 道15.2 橋8.8 港12.3 建物256.5 田86.0 畑34.2 船4.4

1914 大正3 1 12 空震(桜島噴火)

〔戸波村誌〕夕方間断ない大音、戸障子鳴る(県内で降灰のところあり)

1914 大正3 3 2 雹

かなり優勢な低気圧の通過直後電雷に伴い降雹(窪川、越知方面) 〔戸波村誌〕直径2、3分の大雹

1914 大正3 9 14 台風

6時前清水南方海上で転向しすぐに上陸して740ミリの台風、神戸付近をN進する。高知P746 SB20.4 R51 橋原197 芳生野194 窪川189 名野川・越知面・土居・田野々・下山・中村160以上 幡多郡被害 全潰1152 半821 中村死3 負3 宿毛(漁船遭難)死11 不明15

〔注〕1 〔綜合渡川史〕死3 傷2 住全34 半37 大破47 流1 後川橋流失 〔立田村史〕

2. 〔県統計書〕本年被害 河川17.0千円 道0.7 死8 傷17 不25 家
205.7 田585.1 畑164.2 船3.7
尚前年には河川9.48 道6.8 橋3.1 港2.5 死1 傷1 家7.3
田263.4 畑24.5

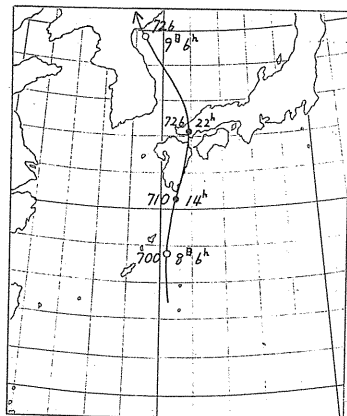
1915 大正4 1 8 火災
〔久礼読本〕 八幡町より出火 230戸

1915 大正4 6 24 大雨
6.4から梅雨顕著、特に19日より可成りの雨が25日まで連続している。24日は物部川
中上流で100ミリを越えたので下流泥らんとした。
〔立田村誌〕 大雨洪水で山田堰西部の主要部を一掃、堰裏から小田島堤防まで615間半
潰
〔注〕 本月の降雨日数は県内の大部分で22・3日、特に物部川、安芸川域に多い。
尚梅雨上りは7.5

1915 大正4 7 干天
顕著な梅雨が本月6日にかけて後好晴連続し31日までの雨日数は5日内外、雨量は10～
20ミリだった。高知月雨量は6.5 少ない順位は第5位 但し気温は平年並
〔注〕 1 6月は殆んど連日降雨し(雨天20日以上)月雨量は500～800ミリ、又
日照は極めて少ない(平年の48%)が裸麦以外の麦は良作
2 前年7月は四国内、他の3県は干害に苦しんだが本県のみは雨に恵まれた。然
し気温高く平均27.1は順位第3、19日の最高気温37.1は順位第2だった。

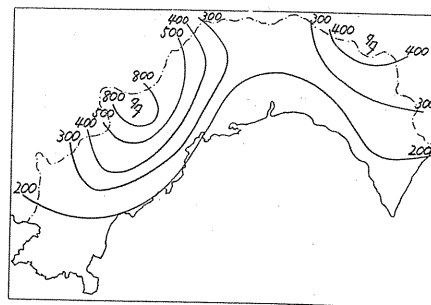
1915 大正4 9 8 台風(高汐) (西日本)

この日中に九州中央を速く北上した710ミリの台風、3日より連日雨となり檮原付近で
は6～8日各日200ミリ以上を計り、台風関係の総雨量は900ミリを越す程で風雨害強
かった。高知P736 BSE18.5 R25



大4年9月8日

6日越知面261 芳生野180 7日越知面300
芳生野258 檮原229 大野見198 8日芳
生野283 越知面270 名野川236 檮原



大4年9月5日～8日合計雨量

225 土居222 大滝200

被害 沿岸高汐 家流失あり(浦戸湾堤欠、市内の交通船を用う)、電信、電力不通(発電
所障害)

〔注〕 1 この台風に加え月末の熱低あり、月雨量多く越知面では1000ミリを越す。
2 10.7夜土佐湾を北上し高知付近を通つた720ミリの台風あり。100～
300ミリの雨を降らせたが被害は少ない模様 高知P727 B18.8 R99
長沢375 地蔵寺353
3. 〔県統計書〕本年被害 河川36.7千円 道2.0 橋5.9 港8.8 傷1 家
4.3 田204.8 畑72.7 船0.5

1915～16 大正4 10～大正5 2 暖冬

下表のように可成りの暖冬となつたが3月に入り逆転したので麦作への影響は殆んど無かつ
た。

大4.9 10 11 12 大5.1 2 3
気温(平年より) 238(+07) 1% (19) 140(15) 84(10) 74(21) 75(16) 71(-20)

〔注〕 尚19.15 3月も同程度の低温だった。

1916 大正5 1 9 火災
〔宇佐町史〕 早朝西ノ浜火事 70戸

1916 大正5 夏 病気
〔高知市史〕 コレラ流行 患者105

1916 大正5 9 多雨(東部)

上中旬は温帯低気圧、下旬は台風、2箇の影響を受けて中東部は多雨になつたが、西部は3
～400ミリに留まつた。高知783ミリは9月第2位

〔注〕 1 24日東支那海中央部を北上した台風で高知日雨量362(24日10時)
2. 〔県統計書〕本年被害 河川7.1千円 道1.1 田26.1

1916 大正5 12 27 大雪

25日に気圧の谷が通つた後、大陸高気圧の張り出し強く季節風に伴う大雪となる。
26日初雪のところ多く27日から28日朝にかけて山手で大雪

〔注〕 1 この時オホツク海では低気圧の発達が強くと日本海側、北海道で暴風雨、高波害
を出す。
2. 〔綜合斗賀野村誌略〕大雪

1917 大正6 10 10 台風

大隅半島、足摺岬を掠めて22時田野に上陸し、徳島、和歌山を通つた730ミリ位の台風
高知P739 WNW12.3 R11.4 県内の雨も殆んど1日で終り200～100ミ
リで多少の被害

(9、10日合計)長者256 地蔵寺240 野根233 田野々224 土居・窪川
215 芳生野・名野川200以上

〔注〕 香川、和歌山被害稍大

1917~18 大正6 11~7 1 寒冬少雨

6年秋は台風の影響多く、引続いて低温少雨となった。

月	11	12	1
気温(平年差)	9.6(-2.9)	4.1(-3.3)	2.6(-2.7)
雨量(平年比)	30(27%)	3(4)	2(3)

順位を拾うと気温11、12月は夫々の月での第1位、1月は第3位

雨量11月は第5、12月第3、1月第1位

〔注〕 大正6の1月も平均気温3.1(平年より-2.2)

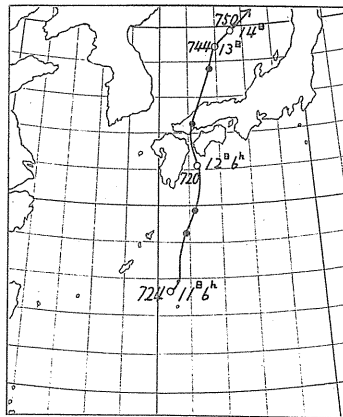
1918 大正7 5 20 火災

〔中村町史〕 17時過南京町より出火 東西約3丁、南北2丁を焼き19時50分消、80戸

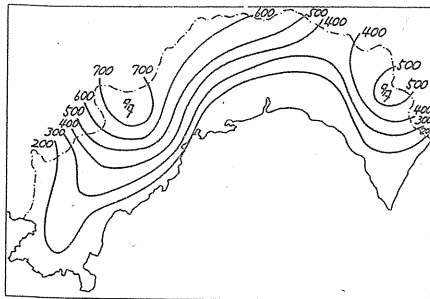
1918 大正7 7 12 台風(高汐) (九州・四国)

豊後水道を北上した720ミリの台風 12日朝までに2日連続の大雨となり瀬原付近では700ミリを越え、中部以西大洪水となる。尚土佐湾沿岸の高汐害も大きい。

高知 P731 ES E18.2 R54 10日名
野川 204 芳生野 181 11日芳生野 570
瀬原 497 名野川 362 大柄 357 長者
310 田野々 301 大野見 290 馬路 263
被害 安芸、須崎高汐害あり。鏡川、久万川氾らん。傷11 全潰75 半56 流25 床上
973 下935 堤欠556間破1001
道流埋2141 破2083 橋流29



大7年7月12日



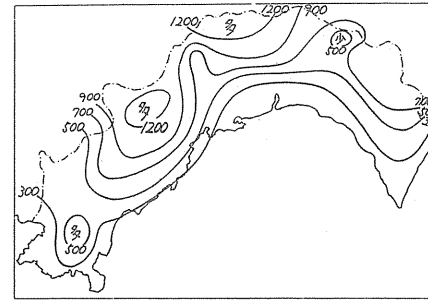
大7年7月8日~12日の合計雨量

- 〔注〕 1 〔中村町資料〕浸水戸数約500
平水より22.5尺
2 この台風による被害甚大
3 引続き20日に北上した台風(746ミリ)による雨は割に少なく150ミリ程度

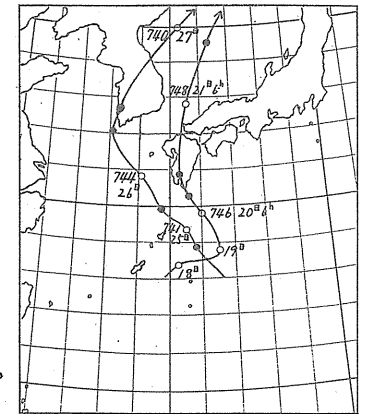
26日に東海を北上した台風(740ミリ)の雨もほぼ同程度

1918 大正7 7 8 多雨

7月は前記12日の台風に加えて20日、26日の両台風があり(夫々150ミリ内外)、



大7年7月の雨量



大7年7月

その他にも屢々降つて月の雨日数は20日を越える処が多く、多雨地の月雨量は1200ミリを越えた。一方海岸では200ミリに過ぎず特徴のある分布になった。日雨量100ミリ以上の日は多いところで

5日になる。8月は7月雨量分布と対照的に県境よりも中央嶺に添うて東西に多雨、海岸では最多雨地の倍以上という均等な分布をした。地藏寺1338 長者1231ミリ

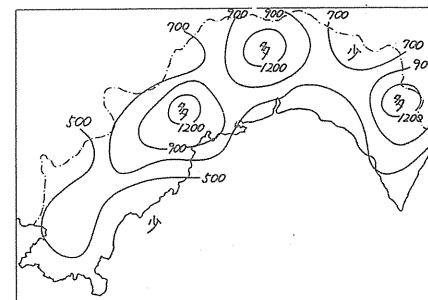
下表の日に近接した台風3ヶあり(29日のもの最強、次項記事参照)

各地の雨量

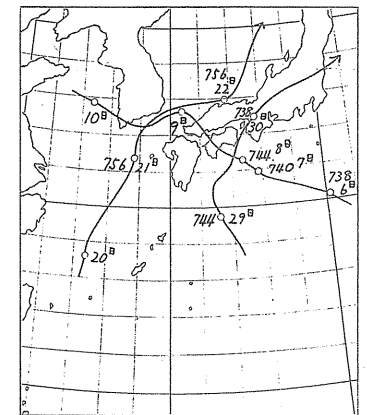
日	地藏寺	長者	須崎	桑尾	馬路	長沢	芳生野	入河内	津呂	瀬原
8	361	230	300	327	204	206	216	87	88	120
21前後	290	214	146	143	230	201	62	151	39	54
29	204	380	265	146	396	214	289	264	247	201

〔注〕 日照不足については下記不作の項参照

1918 大正7 8 29 台風



大7年8月の雨量



大7年8月

上図中室戸を掠めて大阪へ抜けた720ミリ程度の台風、瀬戸内海の波浪高く遭難船多数を出す。高知 P731 NE16.0 R140 雨量は前項に記載被害 死2 全壊158 半113 流3 床上188

下429 堤欠2799間破137 道流埋209 破1067 橋流7

- 〔注〕 1 〔立田村誌〕8.7~8.29、9.14風雨 〔中村町資料〕本年の洪水3回、被害甚大
2 〔県統計書〕本年被害 河川246.7千円 道417.9 橋29.5 港9.9 死7 傷8 家26.2 田235.9 畑62.2 船14.7

1918 大正7 不作

前項のように屢々台風の襲来があり日照不足を起こし、加えて9月にも14、24日に南方海上を通った台風がある等で稲作極めて悪く、反収133升(当時の標準値の79%)に過ぎない。この様な低収はこの後昭和20年まで現われない。

月	7	8	9	10
気温(平年差)	25.1(0)	25.1(-0.7)	21.8(-1.3)	17.8(+0.1)
雨量(平年比)	273(0.8)	709(2.2)	287(0.8)	280(1.4)
日照時(%)	123(0.6)	184(0.8)	165(1.0)	131(0.7)

〔注〕〔高知市史〕欧州大戦の影響と不作との為米価暴騰した(日本の各地で米騒動が起こる)

〔室戸町誌〕白米一升55銭(平常45銭)〔山田文化小史〕8月各地に米騒動

1918 大正7 10~12 病気

〔高知市史〕 流感の死者665、腸チブス赤痢等で死46

〔山田文化小史〕 11月悪性感冒、欠席児童353人、1週間休校

〔高知年表〕 スペイン風邪流行

1919 大正8 9 14 台風

14、5と引続いて九州を北上した二つの弱い台風(748ミリ)の雨は特に県東部に多く500ミリを越え、河川はらんを起したと思われる。西部は150~250ミリで少い。高知P748 SE6.1 R184 13日馬路379 津呂357 田野223

14日馬路202 田野194 津呂156

〔注〕〔県統計書〕本年被害 河川182.2千円 道3.17 橋2.3 田295.2 畑12.1

1920 大正9 7 24 台風 (中・四国)

北西進して17時に須崎付近から上陸し松江に抜けた730ミリ程度の台風

高知P739 SE16.7 R165 25日115

県内の雨は23日の夜から小雨、24日の午後から翌早朝に強く東部は非常な豪雨で山崩れを出した。西部は100ミリに足りない程。24日雨量

大滝501 本山483 地蔵寺423 桑尾410 大柄23日112、24日325

馬路330 上野尻317 高知276 後免245 長沢・須崎・入河内200以上

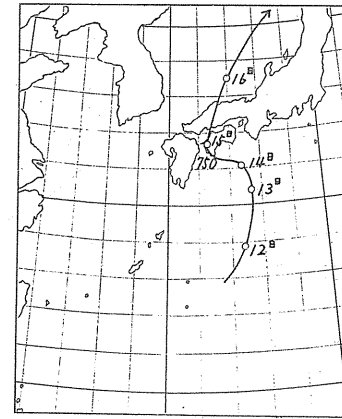
被害 東部で河川はらん、山崩れ農作物被害等、高知鏡川堤欠

〔注〕〔山田文化小史〕大風水20年目の大出水

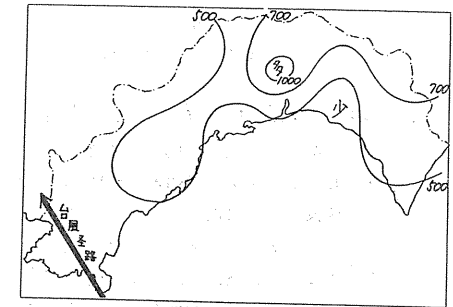
〔立田村誌〕物部は戸坂島鳥井先より馬越の上まで堤潰、家一軒流、吉川村堤64間潰

◎1920 大正9 8 15 台風

ゆつくり土佐湾を北西進して足摺から上陸した750ミリの台風 豪雨となり特に中央嶺に多く3日間で1000ミリを越えた。従って高知市内等も甚しい浸水害を見、県西で多数死傷者を出した。高知P749 SE11.7 R364(この日雨量は8月第1順位)



大9年8月15日



大9年8月14日~16日の合計雨量

各地の雨量

	日	桑尾	地蔵寺	本山	高知	馬路	窪川	大野見	越知	安芸	田野
14	405	427	189	129	260	210	223	170	108	163	
15	625	390	557	425	250	320	238	220	138	187	
16	143	174	125	115	180	156	165	214	159	199	

被害 死186 傷31 全潰310 半342 流185 床上7895 下8875

堤欠821ヶ所 86.884間 破397:16.471 道流埋976:34478

破818:23350 橋流315ヶ 破25(幡多郡の被害は上記の9割位)

〔注〕1 〔下川口村誌〕大洪水雷雨

〔綜合渡川史〕中村で全4 流1 田畑111町・桑56 橋2 特に宿毛は松田川堤欠かいし人畜被害あり。中村町の被害に比し幡西、南の惨状言語に絶す。罹災30町、人畜死傷200 家屋倒流450 損害高2千万円に及ぶ。

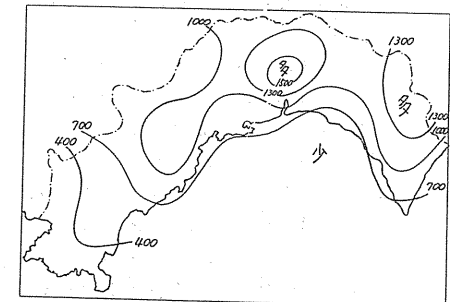
2 〔県統計書〕本年被害 河川4105.3千円 道567.9 橋374.2

港25.3 死187 傷50 家2484 田6554.5 畑694.9 船44.1

1920 大正9 8 多雨

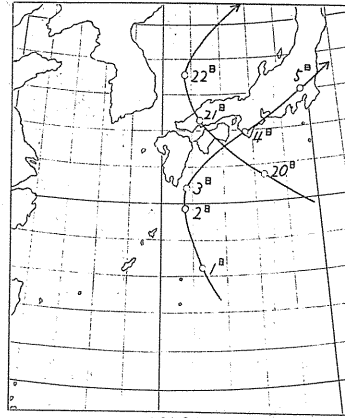
上記の台風に加えて4日朝室戸をかすめて北東進したもの(720ミリ)〔室戸P738 E29.0〕21日2時に高知市付近から上陸して北西進したもの(720以下)〔室戸P722 E34.5〕があり、前者は150ミリ、後者は250ミリ位を中〜東部に降らせる等で結局月雨量は1000ミリを越える処多く、県の中央部が多雨域となり高知では累年順位第1位となった。

〔注〕1 高知9月雨量1142ミリ



大9年8月の雨量

は月雨量の最高記録となる。従つて年雨量は
3606ミリとなり明治23年(1890)に
次く第2位多雨年であった。
2. 9、10月は少雨、10月稍多照に経過した
が米作回復せず145升(標準値の86%)



1921 大正10 6 梅雨顕著

4日に始まつた雨は一応7日に上り、9日から再
び降り出して72まで殆んど連続した。従つて降
雨日数は28日になつたところもあり(高知付近
)総雨量は600~800ミリになつた。毎日平
均的に降つたと云える。又日照極めて少く72時
間で平年の47%(6月第1順位)に過ぎなかつ
た。従つて平均気温は20.1度とこれも第1順位
の低温を示した。
これらのために麦類は稍不作となる(小麦は標準
値の84%)

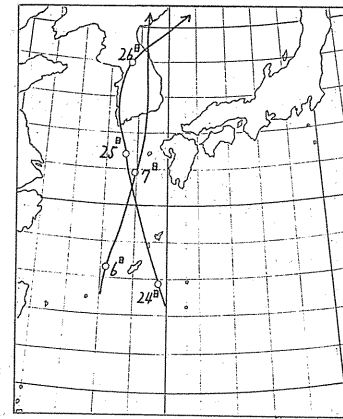
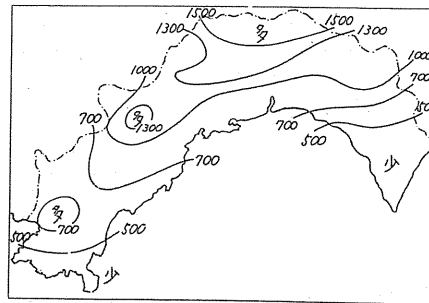
- 〔注〕1 高知の6月雨量632ミリは多い方の順で第4位
2 麦収 大麦137(並作に近い値) 裸99 小麦77
3. [県統計書]本年被害 河川83.0千円 道38.2 橋8.5 家13
田515.5 畑48.9

1922 大正11 1.2 不順(2月高温多雨)

1月はかなり低温に経過したが2月に入り急に高温となり且つ多雨であつた。
月 気温(平年より) 順位 雨量(平年比) 順位 日照(平年比)
1 3.5(-18) × 70(1.1倍) × 168(0.9倍)
2 9.5(+3.6) 累年第2位 331(3.5) 多雨第1位 162(0.9)
〔注〕3月の平均気温は9.1なので本年の2月はこれを上廻っている。

1922 大正11 7.8 降雨不順

7月の多雨に反し8月少雨で両月の合計
雨量は高知で平年の1.4倍
月 雨量(平年比)
7 833(2.4倍) 多雨順第2位
8 78(0.2) 少雨順第5位
7月の多雨は主に上旬の連続雨による分
と下旬中頃の大雨による分が原因で、共
に東支那海を北上した台風に関係があり、
降雨日数は15~20日と左程多くない
が日量100ミリ以上が7日に及ぶ処も
ある。前記の両台風の通過時は洪水被害
があつたと思われる。7月雨量は図の通



り嶺北で1500ミリを越えている。
〔注〕1 今夏西日本干害、8月高知気温26.9(平年
より+1.1)
2 尚翌12年夏も似た傾向を示し6、7月多雨、
8月少雨高温だつた。
3. [県統計書]本年被害 河川50.7千円 道
27.0 橋3.0 死1 傷2 家2.1
田446.7 畑8.4

1922 大正11 12 10 火災

〔宇佐町史〕町制祝賀会の日11時新町より出火 74戸
〔注〕今月は極めて少雨(高知月量4.9は少量第5位) 多照(平年の120%)

△1923 大正12 9 1 関東大震

〔理科年表〕東京、横浜等が潰滅的な大打撃を受け被害総計死9.9万 傷10.4 不明4.4
全潰12.8 半12.6 焼44.7 流失0.09 高知震度0 発震時11時59分50秒

1924 大正13 4 25 大風(前線)

低気圧752ミリのもの、日本海を北東に進み発達して兩風が強くなり近海で遭難(長岡郡
三和村沖で160トン発動機船沈没、乗員10の内9名不明) 高知風弱く、室戸SSW
16.9
〔注〕尚4.2同様に進んだ低気圧のため幡多郡八東村沖で発動機船遭難、人員救助の記
事あり。

1924 大正13 10 8 台風

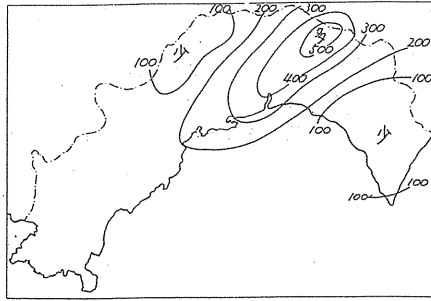
30N、129Eを転向点として南九州に上陸し四国、紀伊の沿岸を掠めた730ミリの台
風 5日から8日朝までの雨量は200ミリ内外 高知P74.6 E10.8 R(7日)79
地藏寺257 大野見253 土居238 名野川227 田野々222 三原192 足
摺SSW2.45 室戸WNW19.3
被害 幡多沖で駆逐艦1遭難 東亜汽船青葉山丸(4,500トン)沈没

1925 大正14 4 13 火災

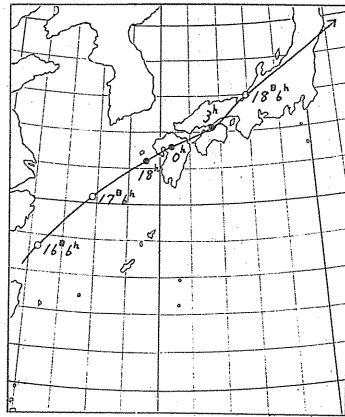
〔安芸郡史考〕昼田野浜田火事 60戸

◎1925 大正14 9 17 台風

瀬戸内を通つた745ミリ程度の台風 風は弱かつたが無類の大雨で被害となる。雨は12



大14年9月17日の雨量



大14年9月17日

日頃からポツポツ始まり以後30ミリ位が連続して17日の大雨に及んだ。高知18日P750 NW4.8 R(10時)41.7

17日は図の様に大豊村から高知にかけて400ミリ以上の豪雨で大海は観測所流失し、香美郡の死者35人に上つた。高知市内の浸水甚だし。被害 死40

- 〔注〕1 月雨量は10000ミリを越した処も出た(地蔵寺1270 穴内1129 土居1036 本山1019)
 2. 〔県統計書〕本年被害 河川456.5千円 道411.4 橋315.2 港38.7 家45.8 田892.4 畑62.4

1925 大正14 低温少雨

	1	2	3	4	5	6	7	8	10	11	年
気温(平年差)	44(-15)	80(-11)	125(-16)	(-04)	24.3(-08)						149(-0.6)
雨量(平年比)	3%	41	77	53	84	72	79	64	36	42	85

- 〔注〕1 上表で記入の無いものは平年と大差は無い。
 2. 9月のみ気温+0.1 雨量761.1ミリ(200%)と他の月と反対傾向
 3. 尚前年10.30頃八重山列島鳩間島付近に海底噴火があり、多量の軽石が本年3~6月沿岸浮流する。

1926 大正15 8 少雨 (九州・中部)

7月下旬から8.14までの雨日数は2.3、2.9、7の3日位 引続き月内の雨量少なく干ばつ傾向を示した。高知の月雨量は83ミリ その反面高温(27.3、平年より+1.0)で農作に若干影響した模様

- 〔注〕1 この干ばつは九州~中部に及ぶ。
 2. 本県の水稲作は平年並

1926 大正15 12 7 雷雨

顕著な前線性低気圧の発達により国内の所々で被害が出て、本県では冬に珍らしい雷雨となり殆んど1時間に強雨集中して時間量101.2ミリを計った。これは一時間雨量としては第3位であるが終期現象として類を見ないのであろう。

◎1240-◎1315-◎1325-◎1420-◎1440-1630(雨量137.1)
 T⁰N1320-T⁰1344-T¹1453-1530

- 〔注〕1 高知の1時間雨量第1位は107(1954.6.26)第2位102(1948.8.26)
 2. 改元は12.25

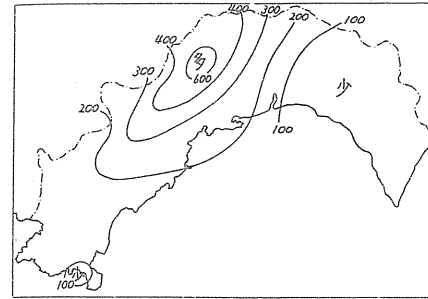
1927 昭和2 3 10 大風(前線)

日本海を通った低気圧から伸びる顕著な寒冷前線で突風があり、津呂港外の発動機船1沈、死1 室戸WNW18.2m

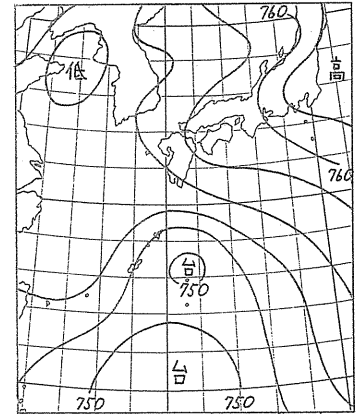
1927 昭和2 4 3 大雨(低気圧)

気圧の谷に伴った発達した低気圧の南岸沖通過による雨、1日から降り始め3日最も強く4日の午後までかかる。このため芳生野方面で400、魚梁瀬で300ミリの雨量を計り、四万十川の洪水となって中村方面で被害が発生した。浸水86戸 麦桑等2.6万円 平水より23尺 後川17.8尺

1927 昭和2 8 26 雷雨



昭2年8月26日の雨量



昭2年8月26日6時

九州南方の熱低は北西進中、西日本処々強雷 高知・長崎大被害あり

日雨量は仁淀川上流で600ミリに達し吾川、高岡郡の洪水は明治23年以来と云われる。

被害 死32 傷18 全潰64 半39 流7

床上919 下2,436 堤防潰1,827m 道5,982 橋70ヶ 田畑流埋138町(57.5万円) 減収1,8000石(53万円) 桑8.8万円

- 〔注〕〔県統計書〕本年被害 河川555.3千円 橋600.9 道681.5 港15.1 死40 傷25 家57.9 田1,366.1 畑216.2 船2.8

1927 昭和2 12 23 季節風

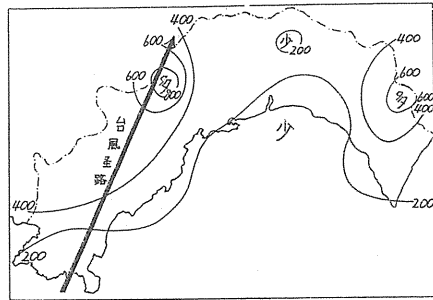
低気圧の急激な発達に伴う荒天 室戸岬付近で大型漁船2不明となる。

室戸WNW18.6m

1928 昭和3 5 12 大波

736ミリの季節はずれの台風四国沖を通過、室戸港で防波堤大破 損害12万円 室戸ENE21.4

1928 昭和3 8 18 台風



11日台風付近を通過、九州の南海上で停滞し、18日14時清水付近に上陸した740ミリの台風。西部では15日からほんぷりとなり仁淀川上流で大雨となった。

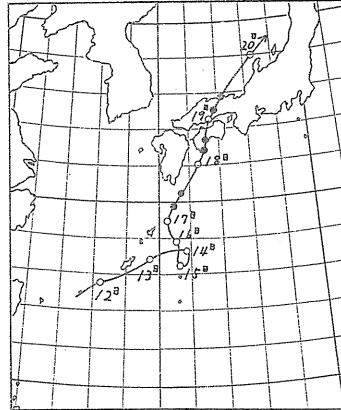
高知P742 BSE14.4 R94 足摺E30.2 室戸E23.1

各地の雨量

日	下	山	田野々	趣知面	樽原	芳生野	大野見	長者	名野川	入河内	魚梁瀬
16	240	84	77	105	117	175	289	32	20	95	
17	290	315	266	261	312	132	311	587	148	218	
18	50	154	109	111	135	102	206	260	274	326	

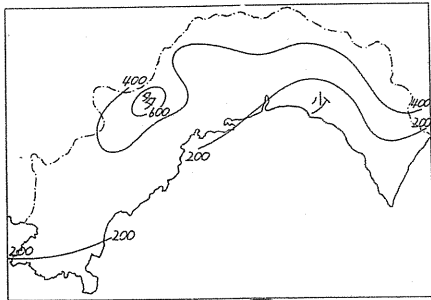
被害 農作物の被害や橋の流失等 室戸では多少の浪害 (堤防5,000円)

[注] [立田村誌] 県下の被害約100万円

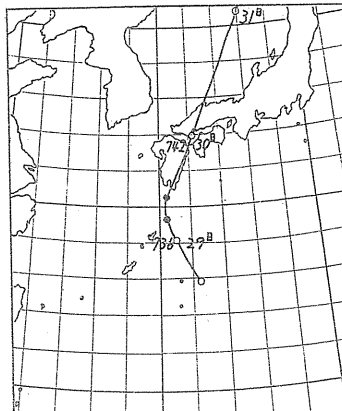


昭3年8月18日

1928 昭和3 8 29 台風



九州東岸を北上した740ミリ位の台風 高知30日 P747 BSE14.9 R169 足摺SW31.9 室戸E23.3



昭3年8月29日

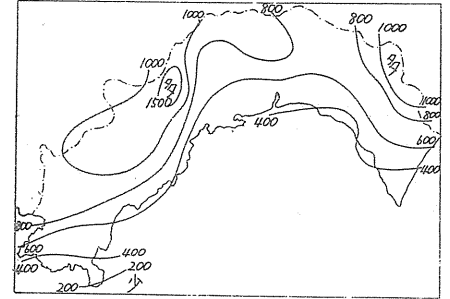
29日大雨となり 長者536 名野川447 芳生野439 長沢地蔵寺400 樽原382 本山357 田野々313 宿毛300
被害 農作27.2町(2,962万円?) 道4,149間 用水路1,900 堤防3,356 橋流122

[注] 1. 別の統計では田1万町歩80万円の被害
2. [県統計書] 本年被害 河川910.2千円 道1,047.5 橋680.8 港150.4 死1 傷4 家40.9 田2129.9 畑782.4 船2.5

1928 昭和3 8 多雨

月始め四国に接近 衰弱した台風と前記2つの台風の三群の雨を加えると稀有な大量となるが雨日数は15日前後と少ないため集中豪雨したことを物語っている。(日量100ミリ以上は2~5日)

[注] 水稲収量には左程影響なし。



昭3年8月月雨量

1929 昭和4 2 1 火災

[安芸郡史考] 奈半利町東浜 58戸

[注] [県統計書] 本年被害 河川152.2

千円 道62.5 橋2.47 死2 田103.9 畑17.6

1930 昭和5 温暖少雨

下表の様に温暖傾向は2~8月、少雨の傾向は5~10月と続く。7月は高温第1位、少雨は6月第1位、7月第3位、年雨量1,557ミリは第1位少雨記録

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10
気温	8.0	10.8	15.8	18.4	21.9	27.0	26.6	-	-
(平年と)	(+2.1)	(1.7)	(1.6)	(0.4)	(0.5)	(1.9)	(0.8)	-	-
雨量	-	-	-	188	99	40	235	145	126
(平年の)	-	-	-	(70%)	(30)	(12)	(72)	(38)	(61)

[注] このため多少干害となる [美良布村誌] 大干ばつ。

1931 昭和6 5 15 風雨(低)

16日にかけて日本海で急速に発達した低気圧のため、急激な風雨になり、関東の西で所々被害発生。本県では平野で40ミリ、山手で160ミリ程度の雨を見た。(最多は本山197)

高知SE12.3

被害 河川増水により道路、橋の破損 園芸物5割、桑3割

1931 昭和6 7 梅雨顕著

梅雨は7月に入って顕著となり殆んど連日降雨がある。まとまった大雨がなく、大体平均して降ったので県内の雨量は300ミリ代のところが多い。

然しこの影響で顕著な低温少照が起り、不作になった地方が多く出たが本県では平作であった。

7月平均気温 23.9(平年より-1.2) 日照111時間(平年の57%)

〔注〕本年は北日本冷凶、北海道の減収率4.8%（4、5月気温低下 奥羽北海道1〜1.5度 其他1度内 7月奥羽3度以上 関東近畿中国2〜3 九州1〜2）

1931 昭和6 9 26 台風

23日台湾からN進し26日北九州を掠めた743ミリの台風。高知P749 R121 風弱い。25日の県内雨量は室戸方面で300ミリ、土居—清水の線が200ミリ 其他は少ない。然し清水では23〜25の3日間毎日200ミリを越え、総雨量は700ミリとなった。

清水23日257 24日205 25日268 野根315 室戸302 土居225
被害 清水方面にも発生したと思われるが、室戸の分は圧死1 傷1 家全潰1 浸水40
道1所8間 橋流4 破1 河川堤破500間

〔注〕〔県統計書〕本年被害 河川2,185.9千円 道514.0 橋234.4 港17.1
死6 傷6 家54.5 田1,073.3 畑157.6 船11.4

1931 昭和6 10 13 台風

沖縄の南で転向し九州四国を掠め、和歌山南方で上陸した735ミリの台風。非常に速かった
ので短時間強雨の被害になった。1時間雨量清水90.6 室戸64.9 高知47.0
高知P738 NNW18.6 R162 清水E N E 14.9 室戸E 29.3 県内雨量（大体
24時間雨量）三原408 清水371 中村319 野根351 津呂348 大野見34
4 窪川325

被害 清水床上1尺 道・橋・堤・田畑の損害多
室戸 傷2 家流4 浸水370 田畑流埋8.5町 橋流2 破2 堤決1,650間
道16ヶ 1015

〔注〕〔下川口村誌〕大洪水

1932 昭和7 2 20 火災

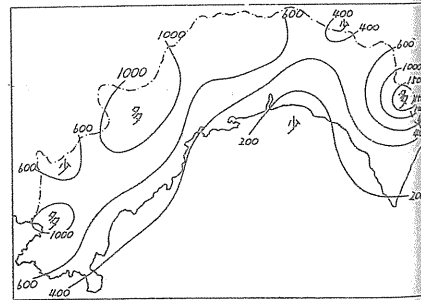
〔久礼読本〕20時30分 中島製材所より出火 海岸一なめ
231戸焼け1,057名罹災

1932 昭和7 8 多雨

今月は3ヶの台風の影響を受け、特に中旬のものは四国沖合で9〜16日間停滞する等で、降雨日
数は20日を越え山地では大雨になった。日量1
00ミリ以上の日は3、9〜12等、特に11日
には300ミリを越えたところがある。

〔注〕本月の日照139時間（平年の63%）

〔少照第3位〕気温は並



昭和7年8月の月雨量

◎ 1932 昭和7 9 8 大雨

南西諸島方面で発生した低気圧が四国西部を通っ
てN進した折の局地的な真夜中の大雨。伊野周辺の宇治 高知等で洪水被害
高知 強雨 8日2350—9日0055、0055—0515（2時間15分で117ミリ）

久万、鏡川はんらん

各地の雨量

桑尾340 伊野328 大野見321 地藏寺260 中村251 本山234 高知23
0 三原・芳生野・長者・越知・穴内200以上

被害 死18 傷21 不1 全潰17 半16 流6 床上4,343 下8,532 小船沈
22 破8 堤欠65 破32 道流埋49 破70 橋流20 農地6,319反

〔注〕1. 本月始めから15日まで連雨

2. 本年米作稍不良 反収149升（標準の89%程度）

3. 〔県統計書〕本年被害 河川370.9千円 道14.15 橋20.8 港2.1
死20 傷15 不35 家143 田1,242.1 畑113.6 船2.6

△ 1933 昭和8 10 20 屋島丸台風

石垣島付近で転向して四国を縦断、姫路へ抜けた13時頃須磨沖で大阪商船屋島丸（946ト
ン）を沈没 約半数（66名）の遭難者を出した大型台風 進路付近の被害大

1933 昭和8 豊作

本年は小笠原高気圧の勢力強く経過順調で、又台風の影響もなく全国的な大豊作となった。
反収196（標準値の118%の収穫）

月	6	7	8	9
気温（平年差）	22.6(+1.2)	26.1(+1.0)	25.9(0.1)	23.1(0)
雨量（＃比）	257(77%)	152(45)	444(137)	116(31)
日照（＃）	177(116)	228(116)	211(95)	241(145)

（9月は較差大きく最高29.5(+1.3)最低18.7(-0.8)で良質米を得たものと考
えられる。）

〔注〕香川、岡山、和歌山、関東等では干害発生

1934 昭和9 夏 干ばつ （九州と瀬戸内沿岸 関東）

5月以降雨夫少く、梅雨も不活発に過ぎ7月梅雨あけの10日間と8月の散発的な雨で干ばつ気
味に経過した。特に7月少雨が原因になったと思われる水稻被害面積3,178町と云われた。
（然し愛媛、香川に比べてずっと小さい）

月	5	6	7	8
雨量（平年比）	254(98%)	297(111)	115(34)	394(117)
雨日数(>1ミリ)	8(72%)	8(57)	11(83)	9(74)

〔注〕1. 本年の反収は標準値

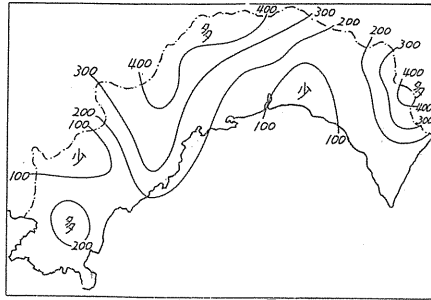
2. 奥羽地方は冷害で収量は60%内外、又梅雨あけ豪雨で北陸水害

1934 昭和9 9 9 台風

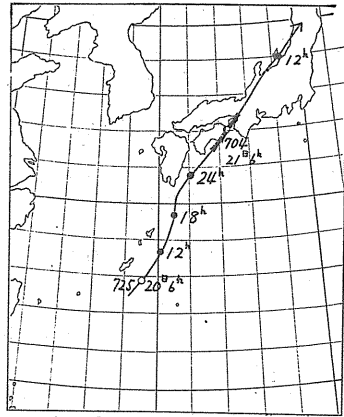
7日に台湾を出、9日早朝九州北西部をN進した740ミリの台風。雨は7、8日に降り多
い処で250〜300ミリ、一般には100ミリ程度。高知P747 SW11.1 R(8日)
72 土居312 長沢246 本山219
被害 全潰8（内小学校2） 浸水400 山崩1

◎ 1934 昭和9 9 21 室戸台風(高汐)

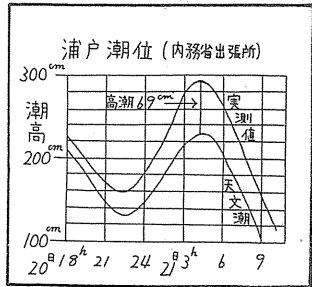
5時奈半利町に上陸した近世の大台風、室戸で観測した最低気圧(海面)684.0ミリ(5時10分)は陸上の値としては空前のものであり今も破られていない。この台風の被害は北海道を除く全国に及び特に大阪の高汐害を加えて日本の経済を大きく長くゆさぶった。(全国の死2,866 不200 傷15,361 建物475,634戸 船27,594 大阪の気象潮3.1m)



昭9年9月19日-20日の合計雨量



昭9年9月21日 太珠は室戸の風速15%以上



昭9年9月21日 室戸台風の潮図

県内状況 台風進路が東偏し且つ速く通過したので、暴風雨時間が短かく大被害が安芸郡に限定されたのは不幸中の幸いであった。(室戸で1.5m以上の風は4時から8時まで)台風の雨は19日から始まるが20日に集中して、魚梁瀬406 長者364 長沢35

0 名野川339 新田321 越知面300 別府295 (田野、野根は測器破損)2日間の雨量は図の通り。

尚安芸、野根間に3~5時発光現象があり、引続いて10分間位台風眼を観測した。(青空は見えない) 高知P719 NW15.3 室戸 684 W45.0 清水 720 N12.8

高汐 室津港では丁度満潮時に合致して、朔望平均満潮面上約3.7mと云われ付近の堤防海岸施設漁船等に大害を与えたが、県中・西部では高汐量小さく(高知69 清水8.4cm)損害は少ない。[上記室津の高汐量は気象潮+風波と思われる。]

被害

郡市\	人		住家		船						
	死不明	傷	全	半	流	床上	下(動力)	全	半損	(無動)全	半損
安芸	119	486	817	1,297	310	597	818	60	129	612	413
香美		18	7	17	1	25	38	2	4	50	306
長岡			10	17		14	10	1	4	1	10
高知			1	4		2	64	1			
土佐				2							
吾川	1		3	4		5	15	1	6	54	133
高岡	1	2	21	25	15	136	188	1	5	174	208
幡多	1	2	20	16	14	143	617	26	8	250	119
計	122	508	879	1,382	340	922	1,750	92	156	1,161	1,189

橋流21 道路423 田畑20,860町

[注] [県統計書] 本年被害 死129 傷953 河川76.9千円 道234.9 橋89.4 港472.3 家984.8 田932.6 畑370.7 船203.0

1934 昭和9 10 24 豪雨(清水)

所謂台湾坊主のN進連と急速な発達でかなりの降雨があり、特に清水で24時間雨量433ミリ、24日3~4時の時間量95.0の豪雨を見る。

被害 死2 浸水500 倒家1 橋流1 堤・道欠108m

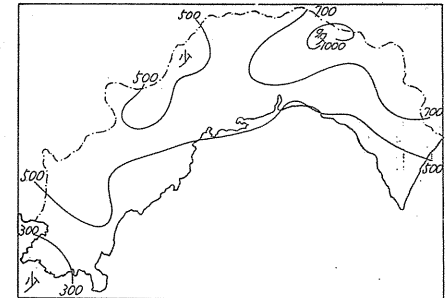
1935 昭和10 6下~7上 梅雨頭著

(6月末西日本豪雨)

6.26から始まった雨は7.6まで続き、此の間100ミリを越す日は7日、かなりの洪水害となった。この豪雨禍は西日本一体に亘る(特に福岡、京都)(死147 傷283 不3)

27日穴内376 桑尾345 落合32
228日別府290 29日下山160
30日魚梁瀬235 1日全293 2日
大柘140 3日魚梁瀬95 4日穴内
176 5日清水225 6日魚梁瀬90

被害 死9 傷12 全潰5 半13 流12 浸水947 堤151 道539 橋46
農作9,208反 損害見積合計210万円



昭10年6月26日-7月6日の合計雨量

1935 昭和10 8 28 台風

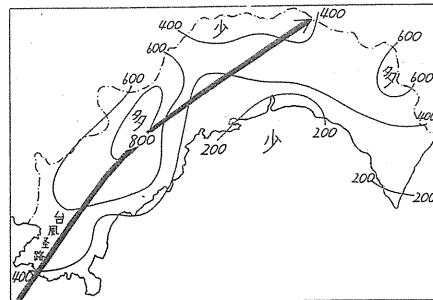
(太平洋沿岸)

15時 清水付近から上陸したAクラスの台風。兩台風で渡川の洪水は明治23年以来と云われ被害甚大。(関東以西被害 死48 不明25 傷98)

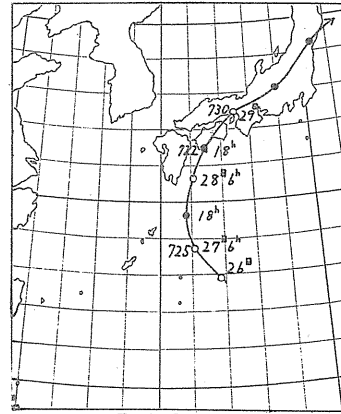
県内状況 高知P731 ESE17.2 R184 清水718 S20.5 251

室戸738 ESE25.0 104

台風の前駆雨は25日から始まり次第に強まり、28日経路付近で500ミリに達し、渡



昭10年8月25日-28日の合計雨量



昭10年8月26日

川の氾らんは最近の記録となる。

各地の雨量

日	宿毛	三原	中村	大用	田野々	櫛原	新田	窪川	長者	名野川	土居	桑尾	地藏寺	本山
27	138	278	176	230	207	207	266	215	210	162	121	98	108	73
28	243	209	64	390	452	299	450	320	538	378	352	338	357	314

最高水位 渡川(具同)29日1時1.34m(既往最高) 江川崎下山21時13.8 大正20時12.5 窪川19時10.3 大崎川口橋17時12.0

被害 豪雨に見舞われた西部に集中し、激甚地は中村で全市水没し、特に上下田・大川・津大・江川崎・東山・後川・巖岡・具同・八東では倒壊流失(旧中村町では1,900戸中僅か1.6戸を残して水没)又窪川では250戸床上浸水3尺

見積高 家(非住家共)845万円 建物77 家財85.8 商品199.4 農作44.4

森3.8 水産29.6 土木113.5 総計1,833万円

市郡	死	傷	不	住家全	半	流	床上	床下
高知							20	842
安芸	1	2	1	5	4		3	76
香美				1			3	45
長岡								6
土佐							21	22
吾川	2	1	1	2	7	4	485	948
高岡	3	1	3	21	20	7	481	745
幡多	5	68	—	126	473	193	4533	970
計	11	72	5	155	504	204	5,546	3,654

〔注〕1.〔総合渡川史〕

中村町の浸水は28日正午後川沿岸の耕地を呑み不破県道に迫った。14、5時頃には宮田小路・南京町・新町方面を襲い、17、8時までには築地を残して全町を浸した。その水

勢い物凄く天神橋筋を始め、東西に通じる街路は奔流となって歩行はもとより、救助船の往復にも困難を極め荷揚げの暇も与えず、夕方には既に全戸の床上を浸し、低所は階上数尺にも及び両河岸の百笑・不破・右山・角崎方面は大海のようであった。四十万十川鉄橋々々の頂上を流る濁流は築地坂を越し、後川堤防は余すところ1m足らずの危機に頻した。実に中村町洪水の最大なもので浸水というよりは寧ろ沈没と云う言葉が当てはまる有様であった。かくて29日1時過ぎから漸く減水し夕方までには全町退水を見た。

浸水面積360ヘクタール 罹災世帯1,650、7,243人 負60 道2,500m 水路150間 商品70万円 家財20万円 住家流22 全潰75 半209 床上1,500(階上500)下150 水稻578反 陸稻8 甘藷95 果実26 比ワ60 桑435 園芸66 野菜30 計1,298

今回の洪水は増水の極めて早く荷上げの余暇が少なかった為被害を増している。治水工事によって北西から東へかけて後川堤防が完成し市街への浸水を阻んだので、南方の未完成ヶ所から流れ込み、東西の街路は瀬となって急速に全戸に浸水した。(従来の浸水順序と異なったため不意打を食う)然し、この大洪水に一名の死者も出なかったのは多年の訓練による賜か。

- (大雨)上記の外に10日頃の台風があり、その他の雨を加えて本月の合計は1,000ミリを越える。新田1,277ミリ 長者1,265ミリ 穴内1,233ミリ 落合1,213ミリ 田野々1,191 桑尾1,114ミリ 別府地藏寺・上野尻・大用・窪川1,000ミリ以上
- 〔県統計書〕本年被害 死10 傷117 河川1,914.7千円 道1,032.7 橋396.7 港252.5 家568.0 田5,774.3 畑1,581.7 船43.7

1935 昭和10 9 24 台風 (全国)

四国沖合で一時的NW向きを変えて後、其の西岸沿いに北上した720ミリの強台風。特に関東の洪水害が大きく全国死317 不60 傷276 高知P25日741 Ⅱ11.3 R82 清水P738 NNⅡ14.2 県下の雨は19日より始まり21日からかなり強く、23・4日は100ミリを越えたので仁淀川上流は600ミリ以上になった。 23日窪川176 三原170 大野見157 24日名野川368 土居366 新田344 田野々334 長者327 別府290 越知面248 地藏寺・大野見240 長沢234 櫛原・越知・本山・魚梁瀬200ミリ以上。 被害 死4 傷3 全潰7 半41 流1 住床上368 下302 漁船流21 田畑浸水 452町 道416m 見積26万円

1935 昭和10 不作

上記の様な強い台風の外、9.2に愛媛を通った熱低らしいもの、9~10日に多少の影響を及ぼした台風等がある本年の米収は最近に稀らしい低収となった。反当136升(標準値の82%)

〔注〕本年北日本冷害 北海道反収78(5年平均の58%) 青森78(同49)

〔注〕昭和9~10 昭和凶作群 長期予報を起す

1936 昭和11 1~5 低温

長らく続いた低温で特に1・3月に甚しく1月18日の最低気温-7.6は高知の低極となり、又3月2日の-6.5は同月第1位を占める。

月	1	2	3	4	5
気温(平年差)	2.7(-2.6)	4.3(-1.6)	6.5(-2.6)	13.4(-0.8)	17.0(-1.0)

このためみかんや野菜類にかなりの被害が出たと見られる(但し表は並作)

[注] 今年の梅雨は6月中不活潑で少雨(高知の記録は少雨第3位)7月に入って上旬連日降雨あり。

1936 昭和11 7 23 台風

(西日本)

沖縄を北上し対馬海峡から日本海へ抜けた730ミリ前後の台風 九州被害大

高知P756 R159 清水S15.2 県内の雨量は吉野川上流域と長者で300ミリを越す程度

被害 死1 全潰1 半1 浸水80 船破1 橋流2 道8 田畑浸水100町

1936 昭和11 豊作

前年の不作を取りかえす豊作となったが、昭8には及ばない。反収187(標準の113%) 最大の原因は9月の好天にあると見られる。

月	6	7	8	9
気温(平年差)	2.12(-0.2)	2.44(-0.7)	2.57(-0.1)	23.9(+0.8)
雨量(平年比)	131(39%)	449(134)	322(98)	140(37)
日照(%)	170(111%)	179(92)	162(73)	232(139)

1937 昭和12(始) 暖冬

前年12月に続く暖候は春にも延長し、麦作に多少の悪影響をした。

月	12	1	2	3	4
気温(平年差)	9.0(+1.6)	6.8(1.5)	8.2(2.3)	10.7(1.6)	15.0(0.8)

2月は又多雨で平年より2.5倍降っている。

[注] 小麦反収120(標準値の91%)

◎ 1937 昭和12 9 11 台風

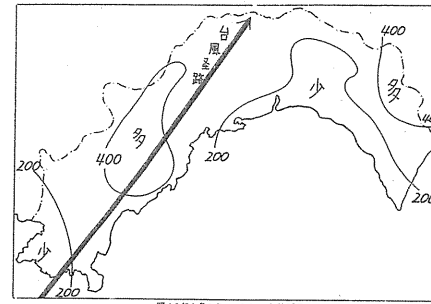
土佐湾西岸沿いに北東進した710ミリの強台風。九州から北陸にかけて被害多(死73 不明11 傷375) 県内の雨は東部が早く8日昼から始まり、10日は多いところで400ミリを越えた。

高知P719 BSSE27.3 R101 清水P713 WSW17.6

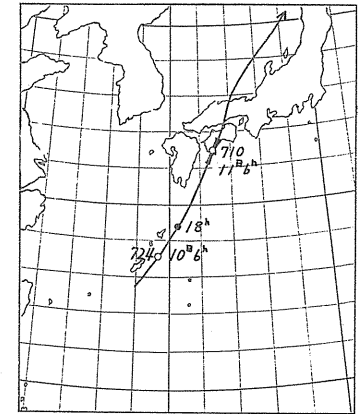
9日 窪川201 大用188 10日 魚梁瀬441 名野川430 別府418 新田406 馬路400 田野々・越知面336 桑尾330 野根301 長者299 大野見283 窪川277 土居266 落合257

強風は割合短時間(高知15m以上は3時間強)

高汐 浦戸検潮儀による最高潮位は7時20分 28.4cm(満潮前3時間) 高汐量は130



昭12年9月9日~10日の合計雨量



昭12年9月 台風高知の風速15m/s以上

cmのため小被害で済んだ。

被害 死10 傷16 全潰306 半1,820
流6 床上534 下2,666 橋7 道280
所

[注] 1. [立田村誌] 明32以来の大時化

2. [県統計書] 本年被害 死10 傷36

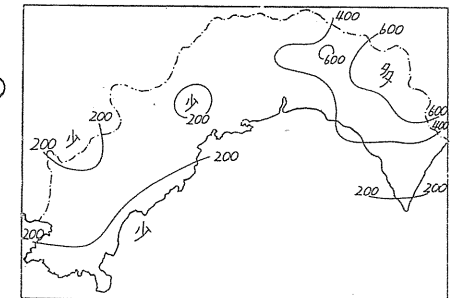
河川861.8千円 道388.1 橋77.5 港43.3 家781.2 田3,722.1 畑957.0 船46.5

△ 1938 昭和13 1 12 地震

0時12分和歌山県田辺湾に起った浅い地震。有感範囲は中部以西で高知の震度は4

1938 昭和13 7 3~4 梅雨前線豪雨 (太平洋沿岸)

梅雨末期の前線豪雨。奥羽から近畿までの太平洋岸が被害地で殊に神戸では5日六甲山崩壊によって大災害となった(死715 不明218 傷3,394) 本県では3.4日に豪雨集中し、殊に東部が甚しく多少の被害を見たと思われる。



昭13年7月3日~4日の合計雨量

各地の雨量

日	魚梁瀬	馬路	別府	大柵	穴内	入河内	安芸	落合	大田口	地藏寺	本山
3	389	420	330	421	336	217	330	269	206	239	200
4	342	300	332	344	335	290	180	265	258	175	179

1938 昭和13 7 28~8 2 大雨(低気圧) (関西)

中華南部から四国上を通った低気圧による大雨 四国から東海に被害(死38 不10 傷6) 1)県内では28、30日局所的な大雨で200ミリを越し、29日仁淀川上流や大野見で

1000ミリ以上、31日は全体的に多く西部では3000ミリを越え、1日は東部に移って1500ミリ内外となっている。総計は大野見を中心に8000ミリ、長者・魚梁瀬を中心に6000ミリとなって洪水被害を出した。

被害 不明1 全潰1 半4 流3 床上117 下334 船流1 堤欠17 道131
橋流5 田畑浸水2,775町 水稻害5,569 桑6,023

1938 昭和13 8 27 大雨(熱低)

九州南沖から北上して来た750ミリ程度の熱低 九州を通った27日本県大雨となる。雨は26日から始まり、28・9日に延びているが東部が珍らしく大降りした。

27日 後免359 入河内342 長沢337 桑尾314 野市296 上野尻275
地藏寺273 伊野267 安芸258

28日 窪川290 高知240 田野223 大野見189

被害 死2 傷5 不2 全潰9 半6 流3 埋4 床上447 下2,197 道127所
堤59所

[注] 8月は雨日数20日を越え低温少照だったが、9月の好晴によって水稻は標準作となった。

1938 昭和13 7~8 多雨

上記の様に7月は二度の大雨を加え(7月15~26日無雨なので雨日数は少ない方)又8月は別項大雨の外に台風や熱低の影響を受けることが多く、両月とも1,000ミリを越す所が出た。

月	新田	窪川	大野見	須崎	伊野	穴内	長沢	地藏寺	別府	馬路	魚梁瀬
7	1,169	807	1,052	523	599	1,007	770	760	1,017	1,057	1,234
8	903	1,151	1,146	1,022	1,065	1,256	1,054	1,104	683	1,002	1,059

尚高知の8月雨量911は累年第3順位となる。

1938 昭和13 9 5 台風

徳島県東部を早い速度で北上した715ミリの強台風 四国と鳥取一和歌山間で被害(死81 傷45 不24)特に徳島県の大被害が大(死44 傷30 不15)

本県の雨は3~5日、4日が主で1000~2000ミリ(東部多)

高知 P733 NW9.8 R48 室戸 P727 W46.1

4日 雨量魚梁瀬252 室戸188 越知面178 新田・別府174

被害 死2 傷5 不2 全13 半8 流3 床上447 下2,197 橋流13 破1
堤流59 道潰139 船流沈33 田畑浸水1,901町

[注] この月少雨多照(高知では夫々平常の38%、136%)となったが他の月は余り好天が無く、水稻反収は標準を稍下廻る程度[綜合 斗賀野村誌] ウンカで3割減収

1939 昭和14 5~9 干ばつ 豊作(米麦とも) (西日本)

西日本に於ける代表的な干ばつ 同方面での傾向は4月から現われ、雨量は6・7月が顕著に少なく8月にも延長したので全国水稻収量は5年平均値の10.5%減となった。然し本県では時々降雨があり、又台風害が全然無かったので近年稀な豊作となった。反収196升(標準値

の126%)は昭和8年と同じ。

尚この気候は麦類の増収にも幸にして小麦の反収153升は標準値の116% 近代に於ける多収レコードであり戦後の記録もこれを破ることが出来ない。

月	4	5	6	7	8	9
気温(平年差)	137(-0.5)	181(+0.1)	211(-0.3)	253(0.2)	256(-0.2)	227(-0.4)
雨量(平年比)	216(84%)	138(52)	146(44)	101(30)	291(89)	435(114)
日照(%)	176(93%)	246(122)	169(110)	244(115)	259(117)	238(142)

[注] 1. 本年の豊作に匹敵するものは明37の193、昭8の196、昭30以降の大豊作群

2. 9月の多照は第2位のレコード

少雨の傾向は冬にも及び12月3.7ミリ、翌昭15年1月1.9ミリ

1939 昭和14 9 16 大雨(低気圧)

四国通過の低気圧による局所的な大雨。16日の夜から雷雨となり翌早朝までの雨は高知一穴内で2000ミリを越え(穴内313 仁井田243 桑尾220 高知210 後免208)

15・6両日で穴内400 仁井田358 後免304 桑尾300 高知287

被害 全潰1 床上106 下1,258 橋流2 堤2 道9 浸水田畑457町

1939 昭和14 10 16 台風

九州南部を掠めた後東進して16日夜中に四国沖合を通った720ミリの台風、速度大(九国被害死66 不22 傷21)本県の雨は15日台風位置が沖縄南方の20度N付近から始まり、16日は100~200ミリに達した。

清水410 三原256 野根226 室戸218 佐喜浜209 2日合計雨量は清水538 野根406 其の他一般に少ない。高知 P740 N17.6 R79 室戸P738 N23.0

被害 死2 全潰16 半70 床上40 下140 橋流1 道流14 船流沈5 破1
田畑浸水17

1940 昭和15 5 6 晩霜

大陸からS進して来た移動高気圧におおわれ、関東以西の山地で晩霜があり、桑果樹茶等に被害、本県では後免が最低気温3.8で霜、窪川等はかなりの強霜となる。

1940 昭和15 7 23 雷雨

台風が東支那海を大きく迂回中、小笠原高気圧の肩先に発生した雷雨で高知市では15時前後が最も激しく死者を出し、又3時間40分の雨は57ミリに達した。

被害 死1 傷4 発電所、電柱等に落雷

1940 昭和15 9 11 台風

四国沖をNW進して九州西岸を廻り中国を縦断中衰弱した960mbの台風。鹿児島・宮崎で被害大(死43 不3 傷31) 本県では10・11日に大雨があり、長者で6000ミリに達した。このため多少の被害が予想されるが不明。

高知 P 8日 748 B 13.7 R 47

日 長者 池川 本川 越知 大野見 東津野 檜原 地藏寺 本山 大正 魚梁瀬
 10 374 331 240 220 272 416 270 176 97 241 327
 11 247 226 276 141 115 139 141 303 218 88 21

- [注] 1. 今年水稲反収は131(平年に較べて大きく減少、標準の89%) 或は台風や8月の陰曇の影響か〔綜合斗賀野村史畧〕イモチ、メイ虫。
 2. 今年はい0月を除いて各月平年以下の雨量で高知の年計は1,853ミリ(平年の71%) にすぎなかった。これは第4位の記録である。

1941 昭和16 4 8 晩霜 (九州、四国一関東)

珍らしく優勢な移動性高気圧77.2ミリのものが日本を通過し、九州一和歌山で主に被害が出た。桑野菜等の被害面積 収かく皆無1,837反7割以上減678、5割以上1,960、3割以上2,390、以下5,827(以上を収かく皆無に換算すると5,419)

[注] 尚今月下旬主に関東、5月中旬北日本で晩霜害

1941 昭和16 7 25 台風

豊後水道を北上した730ミリの豆台風。高知P751 S B 15.5 R(10時) 152
 雨は24・5日で殆んど終り、多いところで300ミリ代

25日 本川290 東津野275 地藏寺273 長者265 大野見254
 被害 死8 全潰3 床上66 下35 橋流3 堤欠2 道50 田畑流3,000

1941 昭和16 6~7 梅雨 (西日本)

西日本は梅雨顕著で6月中下旬7月11・2日に分かれて洪水害が出た(前者で死100 不12 傷50 後者で死傷87 不15) 本県では左程で無かった。

月	6	7	8	9
気温	22.6(平年より+1.2)	24.9(-0.2)	25.5(-0.3)	22.6(-0.8)
雨量	397(平年の118%)	390(116)	415(127)	479(126)
日照	144(平年の93%)	163(84)	201(91)	133(80)

[注] 尚北日本では7.8月低温(平年より1~3度減) 冷害となったが本県は戦争の影響も加わって米麦共今後低収穫の道をたどることになる。

1941 昭和16 8 15 台風

13日四国のはるか沖合からNN E進して15日7時頃安芸付近から上陸、米子に抜けた720ミリの台風(紀伊半島一中四国の被害 死41 傷42 不14) 高知P727 S S W 12.0 R 6.8 県内の雨は12日夜の大雨(北方を気圧の谷通過に刺戟された雨) に始まり14日一時小降り、15日早朝の台風通過の雨と連続した総雨量は魚梁瀬で600ミリ、佐川・窪川付近が夫々400ミリ、12日 大正371 長者355 大野見325 須崎300 富山276 越知253 窪川243 中村228 池川225 高岡200

13日 高岡214 14日 魚梁瀬446 田野240 清水221 三原205
 被害 死3 全潰13 流8 床下1,000 道破30

1941 昭和16 10 1 台風 (九、中四国)

九州南沖から一直線に北上し鹿児島付近からN E進した早い大型台風(960mb) 九州四国に被害(死108 不傷共102) 高知P741 B S E 22.0 R 6.0

29日朝北方を通った気圧の谷により かなりの雨(雨量100ミリ内外) が降り以後連続して1日の台風通過の雨に及んだので県内では魚梁瀬600ミリ、越知では500ミリとなった。

28日 越知195 池川190 魚梁瀬134 29日 野根239 田野161
 30日 宿毛180 魚梁瀬175 檜原153

1日 地藏寺271 長者245 東豊永217 本山207 池川・横山199
 魚梁瀬182

被害 死7 傷10 不3 全潰65 半68 流12 床上323 下824 道破200
 桑の塩風害

[注] この台風は進行速度大で風の割に雨量の少なかったことが被害を少なくしたと考えられる。

1942 昭和17 3 温暖多雨

1・2月稍低温が続いたあと本月に入り急に昇温し、月平均気温12.3は平年より3.2度の高目第1位の高温レコードを作った。尚今月雨量396ミリは平年の2.2倍である。

[注] 1. この暖かさは全国的な規模でおこっている。

2. 4・5月は割に順調に過ぎ6月は梅雨顕著で麦作に影響したと思われるが前年に比べて悪くはない。

1942 昭和17 7 干天

(全国)

梅雨は3日に終り、あとは俄雨程度(魚梁瀬の17日を除いて一般には25・6日0~10ミリ) でこの間の無降水継続日数は5~24日の20日間と27~4日の9日間の二群になる。このため著しく昇温して月平均気温は26.9度(第5順位) 又月雨量37.4ミリ、日照時数325時間は夫々(少い又は多い方の) 第2順位である。

[注] 1. 8月も又高温(平年より+1.0) 稍少雨となる。

2. この干天は全国的な規模で起こり局部的にはかなり被害を出した。

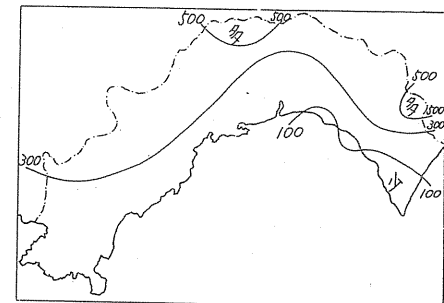
1942 昭和17 8 27 台風

(西日本)

九州西岸を掠めて北上し長崎の上を通過して日本海中部に出た940mb の強い台風(死891 傷1,438 不267) 殊に山口県では周防灘の高砂によって708名の死者を出した。

高知 P 748 S S E 16.3
 R(28日 77)

県内の雨は主に26日午後から始まり27日にかけて強く、其の後31日高知付近を北上した熱低の雨(50ミリ内外) に引続いたため6日間連続とな



昭和17年8月24日~28日の合計雨量

ったが、この台風のみ26~28日の雨は図の通り。

26日 東津野283 川崎243 大正239
 榑原235 三原・宿毛・魚梁瀬200以上
 27日 本川320 魚梁瀬279 本山238
 榑山236 東豊永184
 28日 本川167
 被害 死3 傷3 全潰3 半8 浸水5
 道破13 田畑浸水350 木材流8,000才

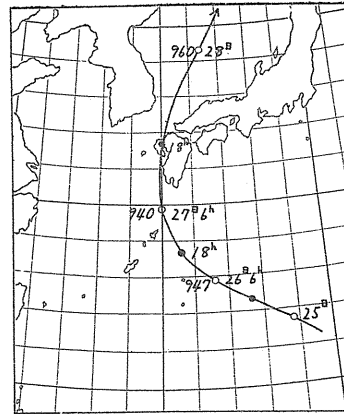


図17年9月27日

1942 昭和17 9 17 豪雨

東海岸で夜強雷雨があり、室戸では1時間に102.5ミリ(21時13分)を計り尙其の前後の雨を加えて292.5ミリに達した。(●⁰1343-●²2013-●⁰2210-2340) 尙野根の雨量は271.5
 [注] 室戸の一時最大雨量は123.8ミリ(昭24.7.5) 尙高知106.8(昭29.6.29) 足摺150(昭19.10.17)

1942 昭和17 9 21 台風

NNE進んで足摺(12時)から須崎(13時)までの沿岸を掠め高松に抜けた947mbの強台風だったが暴風半径が小さく上陸して急に衰弱した。本県では雨は少なくむしろ風台風だった。高知P731 N E 25.8 R 74 足摺P719 WSW 27.8
 県内の雨は主に18日の夜から始まり21日まで続き、総計で3000ミリ以内 21日 大野見191 長者・東津野160以上
 被害 死5 傷14 不7 全潰225 半915 床上100 下500 橋流17 船流沈38 破47 田畑流32町 米1万石減収
 尙この台風時須崎から戸波村に龍巻が起り、又戸波から波介で発光現象があった。同時に各村で眼現象を見ている。

1943 昭和18 6 8、13 大雨

- 8日 気圧の谷通過で降った雨、5月下旬から雨天が多く、この日は局部的な大雨になった。天坪280 三里249 魚梁瀬221 安芸212 長岡191 高知154
 被害 床上5 下3 堤欠1 破2 田畑浸水485町
- 13日 東支那海を北上した低気圧が原因となり、熱帯暖湿気の流入による大雨 夜から14日朝までが強い。
 本川370 地藏寺330 天坪312 本山310 越知271 長者・東豊永230
 窪川・榑山・大野見200以上
 被害 死傷5 全潰3 床下5 道破36 麦3割減
 [注] 1. 梅雨はこの雨のあと6月中は稍不活潑で7月に入り顕著になる。
 2. [綜合斗賀野村誌] 40日に余る長雨。麦刈乾燥出来ず大半青発芽

1943 昭和18 7 24 台風(西日本) 西日本被害(死211 不明29 傷229)

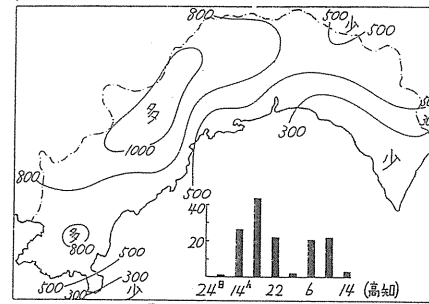


図18年7月20日-24日の合計雨量

豊後水道を急速に北上した弱い台風(992mb) 雨は20日からかなり激しく降り始めこの台風後漸く下火となって31日まで続いている。従ってこれらを合計すると最多地の東津野で1,300ミリに達するが、その殆んどは台風による雨で図はこの台風直接の雨を表わしたもの。

高知P749 E 18.5 渡川具同水位9.45m
 各地の雨量

日	清水	三原	中村	富山	川崎	大正	榑原	東津野	大野見	窪川	長者	越知	池川	本川
21	16	105	65	78	129	162	135	228	119	89	264	150	269	200
22	36	200	78	101	410	264	275	246	147	96	223	139	234	201
23	286	428	336	359	299	370	356	462	412	386	412	298	323	161
24	157	142	142	170	103	163	128	184	236	202	225	195	184	210
被害	死5	傷3	不4	全潰20	半9	流3	床上375	道90	堤112	橋流3	田畑流343町	浸水3,884	木材流26,2000石	

[注] この時隣県愛媛では肱川其の他の氾らんで死114を出した。

1943 昭和18 7 多雨

上記の台風の外、全月を通じて雨天多く東津野の如きは雨日数31を数える程で稀有の降雨量となった。前月の多雨に引続いての悪天候は下記(不作の項)のように米作に大きく響いた。

- [注] 1. 本月の多雨に匹敵するものは大9.8で本県にとっては第一級である。
 2. 高知の月量841ミリは10時観測雨量として7月第2位

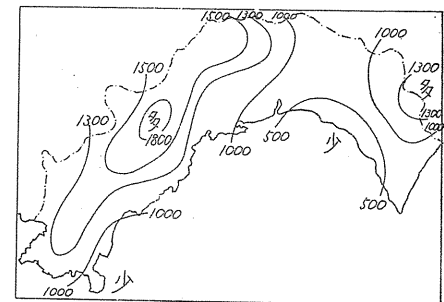
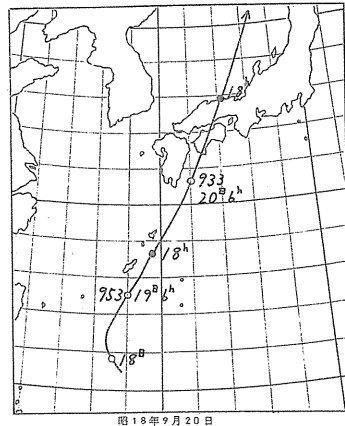


図18年7月の雨量

1943 昭和18 9 20 台風(西日本)

沖縄からN進を続け12時清水に上陸した933mbの強い台風。進行速度が非常に大で鳥取から日本海へ出た。西日本豪雨被害(死768 不202 傷491、島根・大分・宮崎で激し)
 高知P740 ESE23.7 宿毛P726 ESE22.0
 本県の雨は17日から始まり19日が最も強く、20日は山地で残り平野では殆んど降らなかった。総計は東津野で600ミリ、東部は1/2以下
 18日 魚梁瀬158 19日 東津野487
 長者423 檜原363 本川325 池川309
 大野見252 川崎234 越知・富山211
 被害 死1 傷2 住全潰13 半25 床上55 道37 堤2 橋流2 田畑浸水1,610町 船流沈3 破43 稲作3.5割減(上加江・藤岡の国民学校倒、果樹野菜桑等塩風害大)



1943 昭和18 不作(米麦とも)

上記の様に6月以降雨天多く加えて台風害あり、多雨少照で米収113升(標準値の84%)となった。

要素\月	5	6	7	8	9
気温(平年より)	18.4(+0.4)	21.8(+0.4)	24.7(-0.4)	25.5(-0.3)	23.9(+0.8)
雨量(平年比)	216(81%)	495(148)	841(251)	482(148)	203(53)
日照()	219(108%)	141(92)	136(70)	202(91)	216(130)

尙麦類にとっても年頭より比較的順調のところ6月の悪天で減収し、小麦では標準収の72%に過ぎなかった。[反収大麦98 小72 裸90]

1944 昭和19 2~4 低温

昭和18年から20年の三年間冬期低温が続く。本年は下表(次の項)の通りで特に低温だった3・4月の順位は夫々第3位である。

1944 昭和19 麦豊作

昭和15年以降大戦のため人手不足肥料不足等が重なって、米麦共急激な低収傾向をたどるがその間で本年の記録は注目すべきものであり、小麦は標準収量の135%になる。これは冬期の低温と成長期の高温多照少雨の好条件に恵まれたためであろう。

月	1	2	3	4	5	6
気温(平年より)	5.2(-0.1)	4.9(-1.0)	7.3(-1.8)	13.0(-1.2)	19.2(+1.2)	22.0(+0.6)
雨量(平年比)	30(49%)	61(64)	49(27)	316(122)	255(95)	135(40)
日照()	184(99%)	191(108)	233(119)	209(111)	266(136)	227(148)

[収量] 大麦171 小128 裸152

[注] 気温の記録順位は上の項に示す通り 其の他で雨量3月は第1位6月第4位少量
 又日照は5月第2位、6月第3位多量

1944 昭和19 9 17 台風

早朝鹿児島枕崎から上陸し速くN進した960mbの台風。上陸後も余り衰えず西日本はかなりの被害を受けた。高知P738 ESE20.7 清水SSW23.0 室戸SSW31.0
 雨は15日の昼頃から17日の昼頃まで本川400ミリ 東津野・魚梁瀬300ミリ
 15日 室戸266
 16日 本川274 東津野268 長者253 魚梁瀬215 地藏寺204 池川189
 大野見・檜原170以上
 被害 全潰40 半49(非住共)塩風害あり
 [注] 本年の水稲収量は良くない(157)が当時の標準値に対しては良作の部(107%)

1944 昭和19 10 7 台風

NNに北上して志摩半島に上陸し富山へ出た960mbの台風(一時933mb)
 主に近畿~東北で被害(死43 不6 傷76) 高知P734 NNW25.3 室戸NNW24.0
 県内の雨は殆んど当日だけ、50ミリまでの少量で被害はNの強風で発生した。
 被害 傷2 全潰47 半88 流5 橋破4 道3 船流沈7

△ 1944 昭和19 12 7 東南海沖地震 [M8.3]

[理科年表] 津波(尾鷲で6m)あり、死998 重傷2,135 全潰26,130 半46,950
 流3,059 焼11 震源熊野灘(33.7N 136.2E)中心域の震度6、有感範囲は関東・北陸から中国東半・四国に及び高知の震度4(13時36分17秒)震動長く人々戸外へ飛出した。

1945 昭和20 寒冬

前年に続いての寒冬。但し3月は大体並に回復する。

月	12	1	2	冬平均
気温(平年差)	5.4(-2.0)	2.5(-2.8)	4.1(-1.8)	4.0(-2.2)

以上の低温順位は12月4位、1月2位、2月5位

◎ 1945 昭和20 6~7 高知市戦災

太平洋戦争の末期19年11月30日東京がはじめて空襲にあってから次第に全国主要都市に及び、高知市は下記のように連続戦災を被ったが7.4のもので壊滅的な打撃を受けた。

- 1. 19 19時40分 B29 1機市の南西部、神田吉野の田に100キロ爆弾21個を投下。死1 軽傷1 建物半壊3戸
- 3. 7 深夜(1時頃) B29 1機、潮江地区の橋通りで100キロ爆弾6個投下。死1 重傷3 建物全壊3 半壊25
- 6. 1 10時19分、B29 1機、栄田町・昭和町・愛宕町等に4ポンドエレクトロン油、脂焼夷爆弾約2,000個投下。死2 重傷1 軽6 家全壊3 半壊3 小破10

6. 7 11時33分 B29 1機、北本町・小川町・升形・永国寺町・北門筋に100ポンド油脂焼夷弾を投下。

死1 重傷3 軽傷16 建物全壊45 半壊24 罹災者169

6.19 9時16分 B29 1機、九反田・菜円場・浦戸町に4〜6ポンドエレクトロン焼夷弾を投下。死1 重傷3 軽傷17 建物全壊14 半壊6 小破3

6.26 9時19分 B29 1機、常盤町に3トン爆弾3個投下

死6 重傷7 軽傷35 建物全壊27 半壊110 小破111 罹災者728

7. 4 深夜(2時頃) B29 50〜80機編隊進入、潮江地区・小高坂方面に油脂焼夷弾を大量投下し周辺地の炎により目標を市街中心部に定め焼夷弾の雨を降らして一瞬の間に焼野原と化した。

罹災面積1,266,400坪 罹災戸数11,912 罹災人口40,937 被害人員712のうち死亡401 重傷95 軽傷194 不明22

被害建物11,912のうち全壊11,804 半壊108

7.24 11時35分 旧土佐藩主山内家の本邸を目標にB29 1機、1トン爆弾3個投下山内家本邸の被害は少なかったが附近の(鷹匠町・唐人町)民家被害大。死5 重傷5 軽傷10 全壊26 半壊106 罹災者700

以上はB29による主な空襲被害状況であるが、大空襲の前後を通し、艦載機が単機或は編隊で幾度となく襲来して機銃掃射を行なった。その間高知港内に碇泊中の船舶も相当の被害を受けた。

罹災官公署

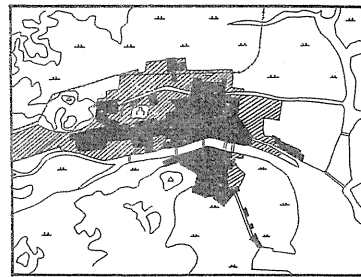
〔官公署〕 県庁、専売局高知支所、高知税関支所、高知地方世話部、高知郵便局簡易保健所、逓信省海事部高知出張所、高知勤労署、市役所、消防署

〔公共施設〕 県会議事堂、県公会堂、県立図書館、中央市場、高知屠畜場、土佐郷土館

〔小学校〕 第一、第二、第三、第四、第六、城東、江ノ口、師範附属、女子師範附属

〔学校〕 高知高等学校、高知女子医専、師範学校、女子師範学校、城南、海南、土佐各中学校、高知工業学校、高知商業学校、第一、第二、高坂、藤蔭、市立高知各高等女学校

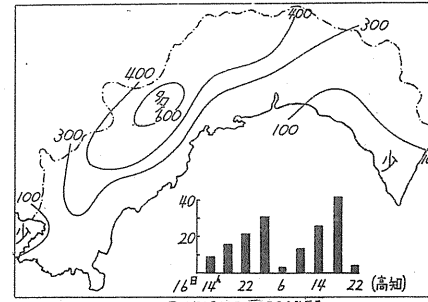
〔幼稚園〕 柳原第二、中央各幼稚園、潮江保育園



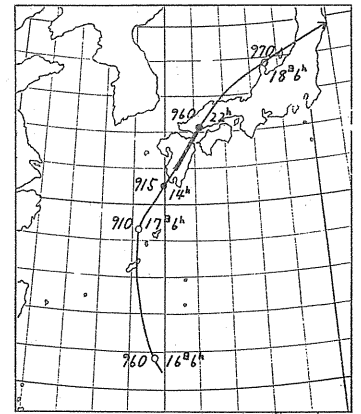
高知市罹災状況図 (建設省戦災復興誌)

◎ 1945 昭和20 9 17 枕崎台風 (関東以西)

沖繩付近を転向点とし鹿児島県枕崎に上陸し、米子へぬけた猛烈な台風(910mb) 枕崎の最大瞬間風速は62.7m、関東以西に大被害(死2,473 不明1,283 傷2,452 広島県の被害は殊に大きく上記の死不明者中1,300名を占める)高知P735 S 26.2 室戸SW3 1.3 清水SS 3.0 県内の雨は16日昼頃より始まり、17日の夜に収まるまでかなり強く、最多の東津野では600ミリを越える大雨で被害を出した。(渡川具同水位8.80m)



昭20年9月16日〜22日の合計雨量



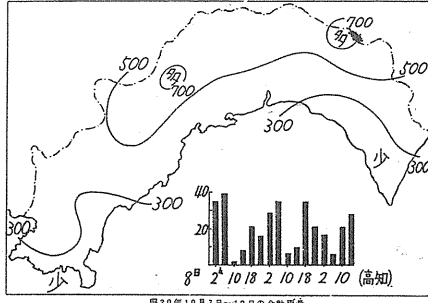
昭20年9月17日 太極高知の風速10%以上

各地の雨量

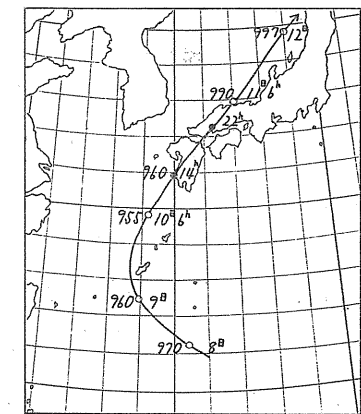
日	東津野	長者	池川	大野見	窪川	梶原	本川	地藏寺	本山	東豊永	高岡	高知
16	160	243	119	143	110	96	186	108	63	74	38	74
17	520	364	313	251	165	310	246	300	311	226	180	92

被害 死11 不6 傷9 全534 半1,757 流73 床上2,024 下425 橋流4 道129 田畑流180町 浸水3,706 水稻半作

1945 昭和20 10 10 阿久根台風 (主に九州、四国)



昭20年10月7日〜10日の合計雨量



昭20年10月10日

枕崎台風と殆んど並行し稍西寄りに阿久根から上陸した955mbの台風。上陸後急に衰えた為、風の害は少なかったが既に大量の雨が連続していた為、西日本の被害大。(全国死377 不74 傷202) 高知P(11日)748 S 13.8 県内の雨は7日の夜から本降りとなり、8・9日共300ミリに達したところあり、11日の早朝で殆んどおさまって北西山地で6〜700ミリにな

り被害が出たと見られるが記録が無い。

各地の雨量

日	清水	三原	宿毛	大正	窪川	大野見	東津野	檜原	長者	池川	越知	本川	地蔵寺	本山
8	16	218	234	207	175	219	250	199	278	220	262	254	330	241
9	136	126	100	156	166	162	180	168	225	214	224	198	159	188
10	106	24	9	101	84	101	150	129	178	128	92	200	180	152

- [注] 1. 吉野川の氾らんにより徳島の被害となる。
 2. 今月は上記の外に月初め台風の雨²⁰日前後の低気圧の雨を加えて月計で1,000ミリを越すところが出た。長者1,113 本川1,081 地蔵寺1,072 東豊永1,015

◎ 1945 昭和20 凶作

終戦前後の人心の動揺や人手不足、管理不備等の原因の外に9・10月に猛烈な台風の影響を受け、空前の一大不作を出現、国民を飢餓線上へ追いやることになった。

本県の反収は85升に過ぎない(これに近いものは明治19、17年のみ)

- [注] 本年は中部・北陸・関東以北が低温被害を受け、北海道反収69(5年平均の44%) 青森81(47%)だったが本県の低温は年初を除いてそれ程顕著ではない。
 一方雨量は9、10月多雨の外余り問題はなく、日照は7・10月を除いて各月多照と云える。

◎ 1946 昭和21 麦不作

多雨は6・7月と続き(平年の1.8、1.4倍)、又日照不足は5・6月に顕著で(平年の0.8、0.7倍)加うるに終戦後の動揺が未だ収まらない為、麦類はかなりの減収となった。反収大麦108 小63 裸69は近年例を見ない程である。(小麦は標準値の70%)

[注] この麦類の低収は天候の影響よりも戦後第1年の混乱の悪影響による方が多いと思われる。

◎ 1946 昭和21 7 29 台風

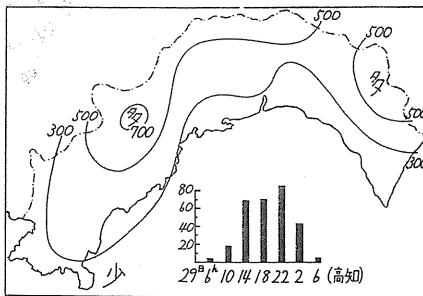


図21年7月29日-29日合計雨量

豊後水道を通った960mbの中級台風。
 高知P740 ESE25.2 R(24時)291
 県内の雨は28.9の両日に集中し東津野700 魚

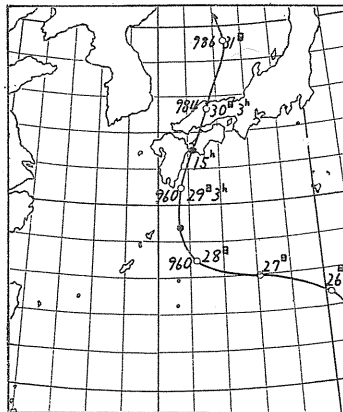


図21年7月29日

梁瀬600ミリを越えた。

日	清水	三原	中村	川崎	大正	檜原	東津野	大野見	窪川	長者	越知	池川	本川	本山	禰山
28	146	232	150	117	253	264	268	177	186	160	96	77	150	35	73
29	101	265	231	190	356	348	448	356	247	374	440	390	357	491	412

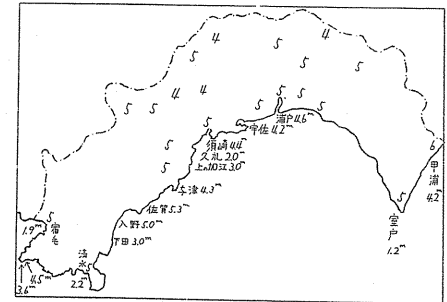
被害 上記の豪雨で県下の洪水害は大きく、殊に幡多郡では昭和10年以来の大洪水となり(中村市具同の最高水位9.8m 浸水500 町内舟を使い、山奈村40戸水没)又仁淀川の氾らん伊野町は30年来の惨害を出し(床上1,200 下300 全潰2 半5)大崎村では山崩れ(死2) 尚農産2~3割(甘藷5割)減と云われた。
 死11 不7 負6 全62 半104 流43 床上3,570 下1,966 橋流30 堤欠43 道194 船流沈18 田畑浸水5,447 田畑流1,930

◎ 1946 21 12 21 南海道沖大地震(津波) (M8.1)

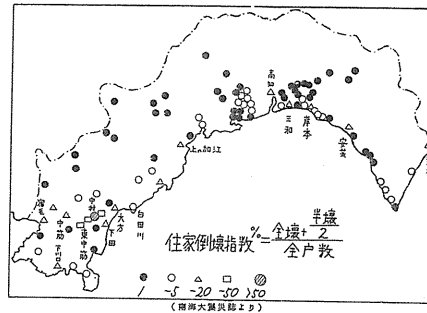
[理科年表](135.7E 33.0N) 震害は四国九州近畿中国及び中部地方の一部に亘り、全国で死1,330 住家全潰9,070 半潰19,204 非住家全2,521 全半4,283 流失1,451 焼失2,598 大津波紀伊半島南端で6.6m 各地に地盤変動あり、土佐田園15km²海面下に没す。

県内状況

1. 高知 震度5 発震時4時19分38秒
2. 地震現象 上記で判る様に最大災害を受けたのは本県で、全国死者の半数を出している。高知発震時 4時19分38秒 震度5 [県内では図の様に野根6(これは本地震での最大震度と同じ)の外大部分が5、東豊永本川・越知・長者4] この大地震に伴う余震は月内に有感50、無感353回、内顕著なものは同日(7時45分) 2.2年1.25(0.148) 2.16(18.19) 2.18(2.230) 2.22(0.700)等であった。この大地震のために生じた家屋倒潰は図の様に地盤の悪い中村市付近が最大で、市域の倒潰率は86%に上った。従って地震の際の火災戸数は中村のも



震度と津波最高値(南海大震災誌)

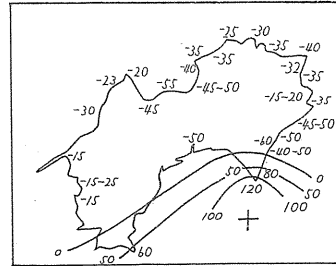


- のが全県の83%を占める。
 全焼数 宿毛6 小筑紫村16 中村163 須崎9 高知2 計196
 3. 津波 浦戸検潮所(三港湾)の測定では地震直後の引潮で始まり25分後に第一波が来襲(第4波と殆んど同高)其の後約60分の周期で6波位続けて現われているが、室戸では地震後約10分、須崎では約15分に始発し余りに早すぎると云われた。

各地の潮高は図の様で波正面の甲浦一室戸、高知一足摺間と、浦尻が高く4~5m、波裏面の室戸一高知、清水、宿毛方面は2m位と報告されている。〔この数値は恐らく波頭も含めたものであろう。浦戸の検潮儀観測では天文潮を差引くと第4波が最高で3.0mとなる〕

4. 地盤沈下 過去の大地震に起ったと同様に今回も広範囲に地盤変動が見られる。

隆起したのは本県の東西両半島と紀伊半島の最南端のみで、一般には沈下を示し、このため広大な面積に潮入りしてその対策に莫大な経費を必要とした。地震によって発生したこの地盤の沈降或は隆起は、1・2ヵ月以内に急速な小回復が見られたが大勢は引続いて一応安定に達したのは昭和25年とされている。図はその状況を示している。高知市の1,881戸 田畑30町は浸水した。



安芸郡野水津点に対する比較水準調査結果(南海大震災時P166) (地理院測所昭和22年3月実施 観測値)

この地盤沈下に伴う四国四県の被害額は840億と見積られた。本県がその60%、愛媛24%、香川・徳島が夫々8%を占める。

5. 前兆、発光現象など (低潮)室戸 前夜の22時30分頃沖から帰って異常低潮に驚ろく。野見でも22時頃沖より帰り同様の低潮に会い、当日1時頃の人も同様な経験をした。新宇佐では異常を見ていない。〔当時の推算潮位は低い方が異常とは云えない。〕

(発光現象)高知北方山地で広範囲に帯状にボーツと光り地震と同時に消える。須崎 夜中沖漁中の者、地震・津波を知らなかったが北方の山で広範囲な虹様の光を見る。室戸 多くの人が様々な形で見える。測候所の一員は地震直後、東方に赤色帯状の光、南方にカーキ色・赫色帯光、又他の一員は地震直後南方海上で火災の様に明るい光を見、直ちに消える。(安芸・伊尾木・S W海上に黄白色、地平に帯状を見る。)

(地変)甲浦 地震後海水位は元の状態 野根(二本松)田2畝5cm沈下 震后粘土砂礫を吹出す。奈半利川海岸砂地から泥水を吹出す穴27個位

6. 被害 最大被害の中村町では死者273 傷1,034又全戸数2,177の内1,621が全壊、696が半壊し尙火災によって163戸を失った。次の高知市では死231 傷334又戦災をのがれた下知・鉄砲町〜農人町付近で家屋損害が大きく局部的な倒家率50%を越し、江ノ口・潮江がこれに次いだ。津波被害は浦戸湾口に限られたが、この害が大きかったのは須崎で駅付近のみで3名の死者を出している。

市郡	死	不傷	倒家	半壊	流失	浸水	焼失	道欠	田畑	船流	災害者	
安芸	30	5	96	330	1,214	8	700	7	25	90	7,712	
香美	5		15	54	290		60	92	280		1,166	
長岡、土佐	15		42	93	383			7	930		1,425	
高知	231		534	1,175	1,957	1,881	2	18	20		20,405	
吾川	8		23	75	273			33	4,684	4	1,157	
高岡	61	4	155	438	1,943	550	2,267	9	271	1,306	716	19,851
幡多	320		1,171	2,739	3,302	8	700	185	288	3,030	8	19,446
計	670	9	1,836	4,834	9,044	566	5,608	196	716	10,275	818	71,162

7. その他

津呂の地震状況 初めドンドンと3回音し、7・8秒細かくゆれ、前山の木がバサバサと2・3秒鳴り、弱い水平動が4,5秒カタカタと東西にゆれた途端電気が消えた。と直に非常に物凄い山鳴りがあり、更に10秒程して物凄くゆれる。

1947 昭和22 7 20 大雨

梅雨末期の大雨、引続いて奥羽地方で大雨となる。本県の雨は12日から連続して21日に及び、これらの合計量は高知地方の最多域で800ミリ。

12日 大野見224 長者141 13日 高岡180 窪川146 15日 長岡・本山・高知130以上 16日 越知156 池川146 17日 越知227 18日 魚梁瀬240 田野173 野根・安芸165 長岡148 19日 室戸235 20日 横山219 天坪210 高知207 東豊永183 本山154 夜須145 被害 死6 全潰7 半9 床上13 下1,291 橋流9 破1 堤欠30 道95 田畑流37町 浸水2,180

〔注〕上記の大雨により高知7月雨量912ミリは累年順位第1位

1947 昭和22 8~9 高温多雨 (7~8月宮崎香川奈良中部干害)

7月の多雨に引きかえ8月は100ミリに達しないところ多く(高知では平年の3分の1程度)9月も又2分の1程度の降雨で高温多照に経過したが、これは小笠原高気圧の優勢によるもので襲来台風も夫々1ヶに過ぎなかった。このため、干ばつ常襲地の香川近畿及び中部の内陸其の他で水稻の干害が発生したが本県は時々降雨に恵まれ米作は並だった。

月	8	9	記 事
気温(平年より)	26.6(+0.8)	24.7(+1.6)	2~5、10~12月は平年以下、殊に2月は累年の低極
雨量(平年比)	113(35%)	189(50)	2~6、8~11月平年以下 年量は平年の91%
日照(")	302(136%)	214(128)	7月の外凡て平年以上 年量は平年の116% 累年第2位多照

〔注〕上表のように本年全体を通じては低温少雨多照

△ 1947 昭和22 9 15 カスリン台風 (関東以北豪雨)

1948 昭和23 8 26 大雨(熱低)

沖縄方面から九州西方を廻った弱い熱低(1,000mb)に刺戟された大雨。24~26日の3日間の最大は地蔵寺で410ミリ。窪川382 須崎365

24日 窪川151 高岡140 25日 東津野245 越知219 大正206 長者195 須崎・高岡180 檜原・川崎160以上 26日 地蔵寺273 魚梁瀬254

天坪218 本山191 高知174 横山154 被害 重傷4 不1 全潰17 半9 浸水1,917 田畑浸水4,112町 堤潰2

水稻減の推定5,000石

被害 死1 傷2 床上488 下800 流10 橋流12 道潰10 埋3 堤欠1 農
 被害59,985反 高知では鏡川堤潰20m 其他溢流で大原町は軒まで水。

1949 昭和24 7下~8上 干天

優勢な小笠原高気圧におおわれ好天が続き、局地的な降雨を見たのみ(東北・中部で干害)
 [注] [総合斗賀野村誌] 殊に中組、角口、八寺山、薄木方面は稲の枯死多し。

1950 昭和25 2 19 火災

[奈半利町史考] 夜奈半利町東浜西端より出火111戸焼失

1950 昭和25 5 2~3 大雨(低気圧)

気圧の谷に乗って東進して来た低気圧(1,008mb)による大雨。
 日 三原 富山 大正 東津野 窪川 大野見 長者 越知 高岡 高知 本川 天坪 安芸 室戸岬
 2 265 248 208 208 302 289 230 258 148 125 161 145 72 45
 3 36 20 90 44 116 80 61 95 137 120 80 50 104 88
 被害 死1 不1 床上16 下456 傷24 田畑流19町 浸水7,106 道112
 橋流10 傷20 堤潰6 漁船27 麦減収1,380石

1950 昭和25 5 26 大雨(低気圧)

四国南岸を東進した1,008mbの低気圧による大雨。200~100ミリ 野根212 高
 知192 窪川190
 被害 床上1,296 田流7町 畑1 冠水田3,346 畑86 橋流2 道潰15 堤10

1950 昭和25 7 28 台風9号(ヘリーナ)

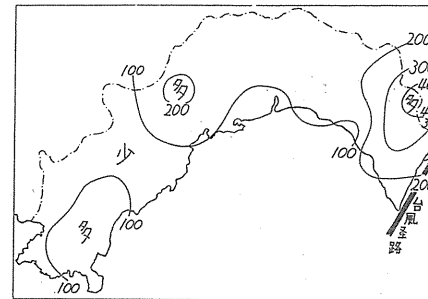
27日から28日にかけて鹿児島西岸を北上後西進した中型台風による大雨は高岡郡山間部に
 集中した。
 27日雨量 窪川200 大野見256 越知228 魚梁瀬225
 被害 冠水田31 畑394 道路決4 堤決1

1950 昭和25 8 13 台風17号

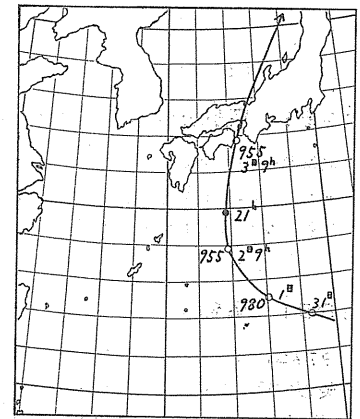
小型台風が足摺南を経て土佐沖の島附近を通過した折、豊後水道に出漁していた漁船が被害を
 受けた。被害 死1 傷2 不明12 家全1 通信4 船沈8

1950 昭和25 9 3 台風28号(ジェーン)(四国近畿 中部東北)

955mbの台風 室戸岬のすぐ東方海上を北上し神戸に上陸したため阪神方面には室戸台風以
 来の大被害となった。(全国 死336 不明172 傷10,930)
 中心に近い本県東部の山間部には300~400ミリの大雨が集中し、室戸岬では2日最大瞬
 間風速43.2mを記録したが其の他の地方では大したことは無かった。
 高知P984 NNW18.0 R58
 被害は主に安芸郡に多く、香美郡の一部で多少の被害があった。
 死1 傷6 不明8 家全16 家半127 家流2 床上56 床下30 非住64



田流13,000 道74 橋8 堤決300
 山(崖)46 船流14 破42 罹災者2,930



した。

被害 家全 5 半 3 2

1951 昭和26 6 28~29 大雨(低気圧)

高知市附近を通過した低気圧による大雨、本県中部に集中し平野部で浸水害を出した。

28日 長岡176 夜須90 横山167 高知80

被害 家浸水1,100 田浸2,562 冠2,529 田流7 タバコ浸8 サツマイモ他浸49
果樹被害4

1951 昭和26 7 1~2 台風6号(ケイト) (西日本)

976mbの台風、1日23時頃宿毛・清水間に上陸後県内を通る間に衰弱したが、雨天続きの後の大雨により被害を増した。海岸地帯100ミリ内外

高知P987 S S E 2.2.8 R152

1日雨量 大野見333 長者310 地藏寺287
三原271 越知252 東津野240
天坪223 大正222 本川・窪川・富山・東豊
永20.0以上

最大高潮量 高知91cm(1日10時45分)
清水42cm(23時45分)

被害 死1 傷4 家全2.1 半1.6.7 流失10
床上4.8.8 床下1.6.6.1 橋流3.6 破損10
堤決3.8 破損5.2 道3.1.6 舟流1 船破3
田畑流1.2.2.3.6 田畑浸7.8.4.3

被害額(万円) 建物1,226 土木7,727
農産1,326.5 水産130

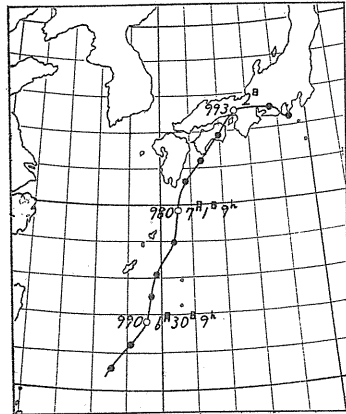


図26年7月1~2日

1951 昭和26 7 7~17

梅雨前線豪雨(西日本 岐阜 福井 石川)

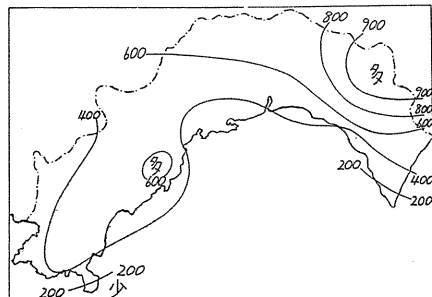


図26年7月7日~17日の合計雨量

本年の梅雨は6.27から顕著になり7.7から17日までに雨の降らない日は1日に過ぎずこの間の日雨量100ミリ以上の日は7~10、13日等で特に7~9日に大雨集中した。

各地の雨量

日	中村	窪川	上加江	高岡	本川	東豊永	本山	地藏寺	夜須	横山	魚梁瀬	高知	天坪
7	218	270	153	20	75	79	60	71	175	110	87	71	93
8	120	130	104	150	73	208	132	163	100	142	186	150	108
9	11	18	17	2	196	137	162	153	3	116	14	2	27
被害	死2	傷6	家半2	床下40	橋流1	堤決6	破1	道55	田畑流5,3,3,4,1				
	田畑浸2,577	農被5,918											

1951 昭和26 7 20~8 16 干天 (全国的)

優勢な太平洋高気圧におおわれて全国的に日照りが続いた。特に西日本がひどく本県では36年ぶりの干天となった。

被害 水稻2,956.3(収(被害率8.9%) 甘藷4,191.9(61.3%)
とうもろこし8,812

1951 昭和26 8 17~22 台風11号(マージ) (九州 四国)

中型台風、沖縄を経て東支那海を北西進した。

本県は暴風の吹走時間が長く、日雨量が20~100ミリ程度が17日から22日まで続いたが長時間干天続きであったためその害は少なく、むしろ高潮によって沿岸の堤防、道路等に多くの被害が発生した。高知P1,005 S S E 1.5.2 R129

各地の雨量 18日 東津野248 檜原151 19日 池川166 本川157
20日 越知327 本川222 長者215 池川198 高岡184 窪川176
東津野171 21日 長者273 三原250 須崎196 越知184 池川180
窪川162

被害 家全2.1 床上2.2 下8.9 橋流1 橋破1 堤決1 堤破1.9 道破3.1
舟流1 田畑流2.8.6 同浸2,836

1951 昭和26 10 14 台風15号(ルース) (全国)

927mbの台風、14日19時鹿児島県枕崎附近に上陸し広島に抜けた。このため西日本で大きな被害となる。(死572 不371 傷2,644)

本県では22時頃が最も風雨が強かった。山岳部では200~300ミリの降雨をもたらしたが海岸部は少なかった。高知P981 S S E 2.2.8 R36

各地の雨量

日	長者	池川	本川	本山	越知	東津野	檜原
13	105	101	61	38	69	76	47
14	342	291	287	220	181	228	156

被害 死1 傷3 家全3.5 半2.0.1 流4.4 一部破1,86.8 床上3.4.8 下2.8
非住3.9.7 田冠1,0.2.3 畑流4.8.0 道4.9 橋4 堤2 板塀破2.5 船沈2
流3.6 罹災14

1952 昭和27 6 23 台風2号(ダイナ) (九州一関東)

970mbの台風、四国沖を北東進し浜松付近で上陸した。

県東部山間部では200~250ミリの降雨があったが南方を通過したので暴風の時間は短かく被害は少なかった。

2日雨量(22~23日)

榎山2.61 野根2.56 室戸2.22 窪川2.13 魚梁瀬2.06

被害 死1 床上10 下150 非住1 田流1 冠945 畑冠30 道19 橋2
堤決2 船流9 破4

1952 昭和27 8 5~6 大雨(前線)

日本海を東進した低気圧の後面で前線活潑となり雷雨性の局地的大雨となり、県中央部に150~190ミリ降雨した。

被害 香美郡で土砂崩れ 長岡郡で落雷による死1

1953 昭和28 4 火災

異常乾燥のため県下各地に火災が発生した。

家火災20件(2,200万円) 山火事23件(3万町 1億円)

1953 昭和28 4 霜害

(東北~近畿)

8、13、18、23~25日等移動性高気圧に伴って県下の山間部に晩霜があり、桑・ジャガイモ・葉煙草等に被害があった。

13日の最低気温

檜原 本山 野根 池川 安芸 高知 窪川 魚梁瀬 本川
-0.5 0.1 1.0 0.4 0.5 3.3 0.5 0.1 0.0

1953 昭和28 6 7 台風2号

(中部以西)

990mbの小台風 九州を横断、瀬戸内海を東進し梅雨前線を刺戟して150ミリ程度の雨を降らせた。 高知P996 SSE17.4 R(9時)99

本山1.65 天坪1.58 長者1.55 本川1.51 越知1.49 魚梁瀬・池川1.40以上
被害 不明1 家一部破8 床下3 非住54 田流2 冠285 畑冠104 道損1

橋流6 堤1 板塀倒12 船沈3 流失5 破2

1953 昭和28 6 25~29 梅雨前線大雨

(主に北九州)

2~3個の低気圧に刺戟されて梅雨活動が活潑となり雷を伴って25日12時から30日5時まで降り続いた。

4日間雨量 須崎3.28 池川3.07 檜原4.14 本川3.04 窪川4.35

被害 床上8 床下6 非住2 橋流2 道損3.3 山崩4 田流10 冠1,869
畑流30 冠311 流2

[注] 北九州では本年の前線豪雨で大被害となり、死749 不265 傷2,720を出す。

1953 昭和28 7 16~22 梅雨前線大雨

(和歌山)

16日から梅雨前線活動が激しくなり、連日多降したが特に20、21日に集中した。
各地の雨量

	魚梁瀬	天坪	本山	榎山	野根	東豊永	安芸	高知
20	206	214	292	122	124	154	171	218
21	111	160	174	130	43	75	37	25
総雨量	624	620	543	451	441	411	366	368

被害 死1 家全1 半1 流1 床上322 下1,325 非住流1 道損1 橋流8
堤11 山崩13 木材流900石 田冠4,213 森林鉄軌決1 船流1

[注] 和歌山では17、18日記録的な豪雨となり日雨量400ミリを越え、死者639 不376 傷5,709を出す。

1953 昭和28 6~7 梅雨顕著

5月26日梅雨入り7月22日によく明けた。(58日)

高知の総降水量は1,266.3ミリで平年の倍に達し、継続日数も最長の記録をつくった。

[注] この間上記の再度の大雨の外7月上旬中国近畿北陸に水害発生

1953 昭和28 9 25 台風13号(テス)

(全国)

930mbの台風 四国南方海上を北々東進し、志摩・渥美両半島に大被害を与え、東日本を縦断した。(全国死393 不85 傷2,559)

本県では25日3時頃より15時頃にかけて暴風圏内に入った。土佐沖に停滞していた前線も活潑になって中部山岳地帯には300ミリ以上の大雨があり、又うねりが高くて沿岸の堤防に多くの被害が出た。 高知P979 N2.10 R(9時)126 22~25日の各地の雨量 東豊永3.11 足摺2.56 中村2.26 檜原2.48 池川2.92 本山2.62 室戸2.89

被害 死2 傷28 家全25 半141 流21 一部破2,224 床上810 下5,536
非住1,202 田流16 冠4,684 畑流29 冠873 道60 橋7 堤46
山崩4 電柱倒350 板塀2,836 鉄軌3 舟沈7 流48 破28
罹災世1,650 人6,600

1954 昭和29 2 26~27 大雨(前線)

発達した低気圧が日本海を東北東に進んだ折の大雨。冬として珍らしく天坪では26日11227日123ミリ、所々道路決壊した。

1954 昭和29 4 5 大雨(低気圧)

低気圧が四国南岸を通過した折の雨。野根(219ミリ)窪川(183ミリ)で局部的に多降。佐喜浜で浸水200戸、芸東大敷の損害400万円

1954 昭和29 4 11~12 大雨(低気圧)

顕著な気圧の谷の通過で県内各地の11日雨量は200ミリを越えた。

窪川200 地藏寺246 本山220 東豊永219 野根216

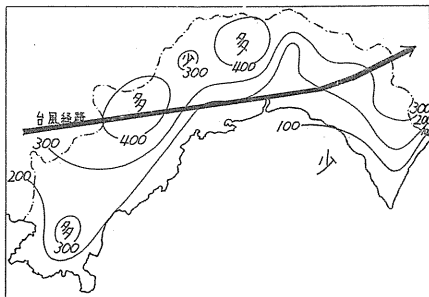
被害 家全2 非住5 床上12 下3 堤決3 橋2 道4 山崩1 田冠236
畑106 流10 船流1 破4 木材流60 通信1

1954 昭和29 6~7 梅雨顕著

6月上旬から7月中雨勝ちで雨天日数は夫々20日を越え、従って平年より極めて多雨となった。特に6月は下記のように屢々大雨があって月雨量が1,000ミリを越したところが出(清水1,328 魚梁瀬1,255 野根1,208ミリ)高知では6月767(第一位多雨)7月657 合計は平年の212%となる。

- (1) 6.19 清水と県東部に160ミリ程度の大雨(床上30 下100 堤決1 崖崩1 田冠6 通信1)
- (2) 6.22 上記と似た降雨域の大雨 清水306 足摺216 室戸260 野根155 (家全1 一部1 床上70 下200 田流3 畑1 田冠1 畑6 道10 橋1 堤決1 崖崩1)
- (3) 6.25 これも似た降り方の雨 清水268 室戸117 (床上85 下240 田冠10 山崩2 通信4)
- (4) 6.29 28日から29日に県東部で大雨となる。両日の雨量は多い所で400~500ミリ。
28日 野根218 田野212 魚梁瀬156
29日 魚梁瀬330 東豊永306 槇山272 長岡・高知263 地藏寺261 須崎・高岡230以上
被害 死1 不2 家全2 半3 床上146 下3,334 田流6 冠5,778
畑流1 冠100 道86 橋5 堤決13 山崖崩60 船流2 破1 罹災者331
- (5) 7.18-19 県の中央部で大雨 18日 天坪251 高知197 東豊永127 19日 越知170 (家全1 半2 床上16 下215) 堤決3 道2 山崖崩11 田冠1,261 畑105
- (6) 7.29 窪川附近と物部川流域に大雨 窪川198 野根177 高知155 中村141 (死1 傷3 家全1 半1 床上1 下80 堤決1 道8 崖崩4 田流埋1 畑11 田冠521)

1954 昭和29 8 18 台風5号(グレイス)

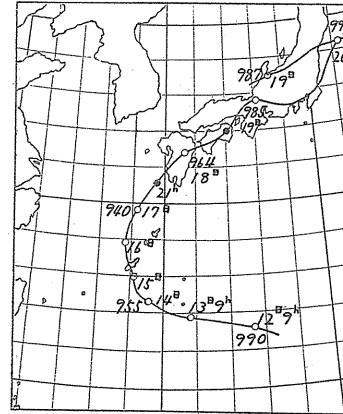


昭和29年8月17日-18日の合計雨量

18日の3時頃九州南部に上陸し、豊後水道を経て宿毛・宇和島間に上陸後衰弱しながら本県と徳島県を横断、神戸に上陸した中型台風(964mb)

高知では17日16時から東南東10m以上の風が吹きはじめ、九州に上陸した頃南東に変わり風雨共最強であって、本県通過の頃は風雨共におとろえた。

高知P975 SW21.1 R76
足摺WSW29.6 室戸SW28.5



昭和29年8月18日

各地の雨量

日	東津野	魚梁瀬	三原	長者	檜原	本川	東豊永	大正	富山	天坪	地藏寺	大野見	中村
17	347	347	240	299	229	102	136	214	136	103	217	210	145
18	152	22	75	170	176	301	228	107	102	134	215	123	106
被害	死4	傷6	家全7	半19	流2	一部破9	6	床上8	6	下6	8	1	非住3
田	流埋9	冠1,947	畑流埋2	冠305	道30	橋14	堤16	山(崖)崩15	板	塀4	4	船沈1	流2
罹災者	81												

1954 昭和29 9 7 台風13号

(中四国以西)

7日15時頃大隅半島東岸に上陸、大分から8日に山口に抜けた950mbの台風。

高知P1,005 SW14.2 R(9時)122

県下の6・7日合計雨量は多いところで200~250ミリ

被害 道8 山崩4 田冠99 畑冠27

1954 昭和29 9 13 台風12号

(九州一関東)

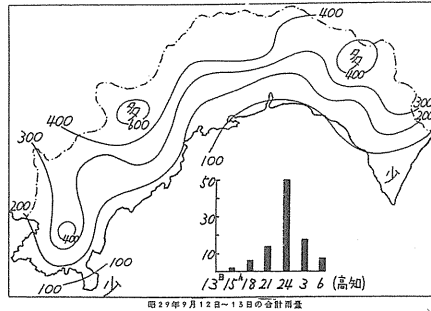
稀な大きさを一路シベリヤまで北上した大型台風で、上陸前の台風眼が特に大きく(直径200キロ)、その反対に暴風勢力が予想外に弱かったので問題となった台風であった。

(全国 死107 不39 傷311)

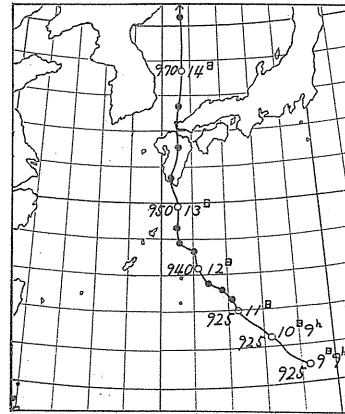
海上のうねりは早くから出はじめ、11日には高知港口で5米の怒濤が防波堤を越えた。

高知P982 SW25.1 R(9時)107

12~13日の雨量は下記の通りで県境山間で多く、東津野では600ミリを越え、渡川の洪水となった。具同の14日水位は近年の記録である(8.9m)



昭29年9月12日-15日の合計雨量



昭29年9月15日

各地の雨量

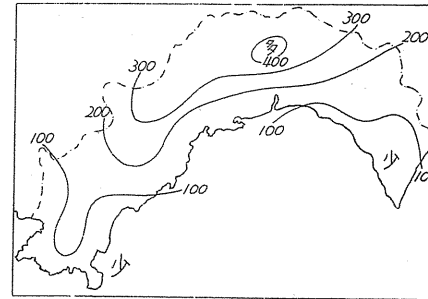
日	東津野	檜原	三原	長者	池川	本川	東豊永	本山	横山	魚梁瀬	大正	地藏寺	大野見
12	177	244	178	150	65	58	77	34	82	272	16	38	84
13	451	338	233	265	345	413	298	358	336	62	264	378	242
被害	死1	傷3	家全1	2	1	半3	6	9	流3	2	床上1,7	2	0
	一部破	3,6	2	2	非住家	7	7	8	田流埋	2	7	5	冠5,7
	道	2	4	1	橋	3	3	堤	9	4	山崖崩	1	2
	鉄軌	7	木材流	3,1	5	0	電柱	2	1	6	船沈	1	流
	6	破	1	0	板塀	8	9	0	罹災世	2,1	8	5	(8,9

1954 昭和29 9 18 台風14号 (東北一四国)

970mbの台風 18日6時室戸岬南方海上で急に北東進した。高知で暴風を観測したのは18日10時から14時までで、雨量は全般的に少なく東部で150ミリ程度であった。
高知P990 NNW13.0 R16 室戸25.1
被害 死1 傷4 家全6 半1 流2 床上3 下8 一部2 非住8 田冠1.15
畑3.0 道1 堤4 鉄道1 木材流4.0 船流1 破4 罹災2.9人

1954 昭和29 9 26 台風15号(洞や丸台風) (関東を除く日本各地)

970mbの台風 26日2時頃鹿児島の大隅半島に上陸、非常に速い速度で北東進を続けた。函館港で連絡船洞や丸其の他を沈没し大惨事を起した有名な台風。(死1,361内函館1,228不400 傷1,601)
本県では雨よりむしろ風が強、暴風の最もはげしかったのは2時~7時頃で宿毛では6時13分に最大瞬間5.48米を観測した。強風時が満潮時にあつたため大波が海岸に打ち上げ、12号台風に引続いたために被害が増した。
各地の波浪(m) 安芸8 手続4 赤岡5
(天文潮よりの)高潮偏差 高知7.3cm(5時30分) 清水7.0cm(5時25分)
高知P982 S25.1 R(9時)9.9



昭29年9月12日-16日の合計雨量

5日雨量

地藏寺	394	東津野	342	長者	324
本山	309	東豊永	268	池川	258
越知	250	檜原	200	本川	290
被害	死6	傷6	2	家全	485
	半1,1	3	5	流1	床上1,2
	下6,5	4	0	一部破	10,1
	非住	2,5	0	2	田流
	畑冠	7	6	道	8
	山(崖)	崩	2	4	鉄軌
	船沈	4	9	流	8
					破
					5
					2
					4
					8
					1
					0
					1
					2
					3

1954 昭和29 12 8 竜巻

室戸岬沖に発生した竜巻は15時室戸岬の北々西3キロの地点に上陸し、北々東に進んで消滅した。
被害 家全1 屋根瓦飛散6 傷1

1954 昭和29 凶作

上記の様に9月中4回の台風に見舞われ、引続く10月も低温少照に経過し凶作となった。反収122升(標準値の73%)で昭和20年来の不作である。
9月雨量は一般に平年の倍以上で特に下記のところは1,000ミリを越した。
東津野1,387 長者1,346 本川1,300 池川1,188 東豊永1,153
本山1,152 越知・檜原・魚梁瀬1,000以上
[注] 翌30年は天候の経過よく史上空前の豊作とうたわれたが本県では反収200升(標準値の117%)でそれ程顕著では無かった。(昭和34 豊作の項参照)

1955 昭和30 2 20~21 降雪 (全国風害)

19日発達した低気圧が通過後、季節風と共に強い寒気が侵入したので20日9時頃から雪まじりの強風となり20日夜から21日朝にかけて山間部では20cm以上の積雪があった。
各地の最深積雪(cm)
津賀27 第五黒川34 大正22 池川12 檜原10

1955 昭和30 4 7~17 高温

優勢な移動性高気圧が四国南方を東進し、これらが南方洋上から本邦をおおい夏型気圧配置になったので6月上旬中旬の気候になった。
高知最高気温(℃)
日 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17
21.6 27.4 23.0 19.8 23.9 24.1 24.2 25.1 20.0 23.4 26.7

1955 昭和30 4 15~16 大雨(前線) (西日本)

温寒両前線の通過に伴なり大雨で15日15時頃から17日午後前線が南四国を通過するまで断続した。

15日の高知雨量(9時日界)195ミリは累年記録第2位

各地の雨量

日	魚梁瀬	野根	天坪	高知	榎山	江川崎	須崎	窪川	東豊永
15	208	148	291	195	252	173	127	80	110
16	226	152	127	55	175	71	51	113	66

被害 床上4 下7 田冠245 畑13 堤1 橋3 道12 山(崖)4 舟沈3
[注] 佐世保でボタ山崩壊事故あり。

1955 昭和30 6 15 大雨(前線)

梅雨前線の活動が活潑になって夕刻頃から全般に強雨になり、特に強い区域は物部川上流であった。

梅原	103	本川	109	天坪	188	魚梁瀬	140	本川	151	榎山	175	野根	187
----	-----	----	-----	----	-----	-----	-----	----	-----	----	-----	----	-----

被害 不明1 畑冠76 道4 山崖1
[注] 引続いて18日に100~160ミリの強雨がある。

1955 昭和30 7 16 台風8号 (鹿児島 宮崎 高知)

16日15時足摺岬の南方海上を北西進し、宮崎附近に上陸した995mbの台風であったが、これより前に台風7号が北上して東支那海に入り、南方から高温多湿な空気が侵入していたので四国山脈の南東斜面で13日夜半から17日朝にかけて強雨が断続した。

各地の雨量

日	江川崎	大正	三原	梅原	東津野	大野見	長者	池川	本川	魚梁瀬	高知
15	133	105	89	112	176	120	97	35	35	206	19
16	94	110	103	136	143	122	208	210	139	275	43
17	69	80	154	32	76	97	41	40	40	53	36

被害 死1 傷1 家全2 床下2 田冠1,018 畑69 道6 橋1 堤1 山(崖)崩16

1955 昭和30 8 29 大雨(低気圧)

東支那海から低気圧が東進し本県では26~31日に降雨が断続した。特に29日から30日夜半にかけて雷雨を伴なり強雨が中部、東部の山間部に集中した。

雨量	27日	清水	127	中村	123	大正	181						
	28日	越知	365	長者	206	池川	198	本川	221	地藏寺	216		
	29日	地藏寺	235	天坪	252	本山	181	東豊永	176	長岡	153	高知	130

被害 家一部破2 床下90 非住全1 半2 田冠31 畑冠20 道11 橋1 山崩15

1955 昭和30 9 29~30 台風22号 (西日本 北陸 東北 北海道)

940mbの台風、29日の夜半薩摩半島に上陸、九州西岸を北上して日本海を北海道へ抜ける。県南部では29日夜半前より暴風雨圏内に入り、30日午前中続いた。

高知P998 S E 20.4 R(9時)40

各地の雨量

日	東津野	梅原	大野見	大正	窪川	長者	池川	本川	地藏寺	富山	津大	江川崎	三原
28	319	159	193	165	128	164	80	37	20	107	126	93	154
29	429	298	224	337	176	266	309	361	217	128	173	205	156

被害 死1 傷1 全壊2 半9 床上25 下95 一部111 非住18 田冠1,162 畑166 道35 橋3 堤5 山崖9 電柱3 板塀15 軌道1 船沈3 流4 破4 罹災者339人

[注] 1日3時前に新潟市大火892棟

1955 昭和30 10 3~4 台風23号 (西日本)

970mbの台風、3日夜半豊後水道を北々西進した。本県の暴風雨は3日の夜半前から4日4時頃まで続き、南西部では25~30米、西部と南東部の山間で250ミリの雨量を観測した。

高知P1,008 S E 16.3 R(9時)66

3日雨量 三原352 大野見317 窪川・大正303 長者276 東津野267

魚梁瀬263 清水261 中村237 富山222

被害	傷1	家全8	半19	流2	床上160	下1,163	一部破395	非住家57									
	田流22	冠217	畑流19	冠163	道44	橋43	堤42	山崖崩40	電柱4	板塀43	通信27	木材920	石	船流11	破5	罹災者820	世帯191

1956 昭和31 2 27 風雨(低気圧) (西日本)

清水、足摺岬附近に集中豪雨あり、一時間最大90ミリの新記録をつくった。

日量 清水160 足摺157

被害 大正町で床上一部、漁船1隻遭難

1956 昭和31 4 19~20 風雨(低気圧)

19日夕刻から20日早朝にかけて県の南西部と室戸岬附近で風雨が強く室戸岬では2.2米を観測した。

室戸岬沖で室戸汽船の太平丸突風のため沈没 死者1 不明15 を出した。

1956 昭和31 5 多雨(病虫害)

本邦南方は前線帯となりしばしば低気圧が通過し、又下旬から梅雨に入る等で雨天極めて多く20日を越えたが雨量としては平年の1.5倍内であった。

この為麦類に多少の病虫害を見た。(収量は標準値)

1956 昭和31 8 14 雷雨

幡多郡下で雷雨発生、三原村で落雷のため死1 傷2

1956 昭和31 7中～8上 干天

7月中旬から晴天多く16、31、1日の外は決定的な降雨を欠いた為、県下一般に水不足となり飲料水に不自由をする市町村もあり、特に嶺北山間では水田30町歩が枯死と云われたが下記の台風によって救われた処が多い。

1956 昭和31 8 17 台風9号 (全国)

965mbの台風九州西方海上から日本海へ北東進した。本県では16日夜半から暴風雨になり、雨は中部、西部の山間部で150～200ミリであった。特に池川町では16日14時から局地豪雨あり1時間に99ミリを観測した。

高知P993 S16.1 R(9時)64

被害 傷1 家半8 一部破17 非住9 田冠89 畑13 道2 山崖7 通信2.7
船流2 罹災者40 世帯13

[注] この台風のあと18日大館市で大火となる。住家692 非629焼く。

1956 昭和31 9 9 台風12号 (全国)

前記9号と似た九州西方コースを取ってかなり北上した935mbの台風。本県では9日夜から10日午前にかけて風雨が強かった。高知P1,002 SSW14.7

渡川・仁淀川・吉野川の上流に大雨が集中し、総雨量は600～800ミリであった。

各地の雨量	日長者	池川	東津野	櫛原	本川	地藏寺	本山	魚梁瀬
7	200	189	160	82	153	63	36	116
8	260	242	235	147	284	132	163	200
9	308	203	180	280	243	200	154	239

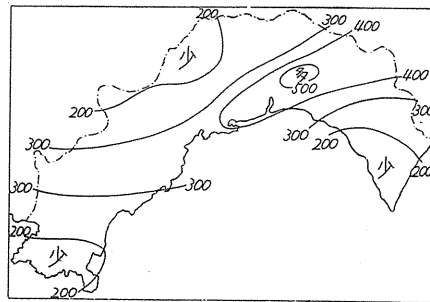
被害 家全1 半1 一部破7 床上24 非住6 田冠841 畑68 道2.7 橋1
堤4 山崩15 電柱2 板塀5 通信9 船流2 破1 罹災者7 罹世1

[注] この台風が日本海を通過中富山県魚津市大火1,755棟焼く。

1956 昭和31 9 25～27 台風15号 (九州～東海)

26日夜半土佐沖を北東進した960mbの台風東京を通る。本県では25日夕刻から豪雨が始まり、特に海岸部の高岡一高知一天坪の線以最もはげしく中央部の河川は大増水した。

高知P989 N15.5 R(9時)371
(この日雨量は観測開始以来の記録)



各地の雨量

日	天坪	高知	長岡	夜須	榎山	東豊永	高岡	須崎	窪川	長者	津大	中村	江川崎
25	455	371	267	221	284	235	305	209	210	130	215	119	192
26	121	106	158	172	143	177	93	92	106	115	131	104	116

被害 死1 不明1 家全3 半6 一部破13 床上243 下2,772 非住44
田流2 冠4,180 畑流25 冠117 道54 橋7 堤10 山崩54 電柱3 板塀44 鉄道2 通信6 船沈2 流1 破2 罹災数1,119 罹世249

1956～7 昭和31 11～32 3 干天

(1) 31年11月中旬から1月中旬まで太平洋側の各地は異常干天に見舞われ、高知では11月11日から1月13日まで64日間無降水(新記録)で電力事情は悪化し、水道はピンチにおちいり、麦・野菜等農作物に被害が発生した。(この期間、県下にインフルエンザ発生380校が休校)

(2) 上記の干天に引続き2.8から4.9まで比較的雨天少なく、特に3月は平年の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ 程度に止まったので各地に水不足を来たした。特に高知3月雨量38ミリは平年の21%に過ぎず測候所開設以来の新記録を作り【神武以来の水不足】と云われた。

電力事情は極度に悪化、又農作物に被害多く、特に水稻の種まきが不能になり消防車が出動した。

月	11	12	1	2	3	4
雨量(ミリ)	25	1	42	102	38	296
年比(%)	22	1	67	106	21	114

1957 昭和32 3 21 山火事 (近畿 中四国)

この日、中四国・近畿の各地で強風と異常乾燥に伴って爆発的に山火事が発生し、本県では山林3,492町焼失した。

場所	高知市	安芸郡 室戸岬町	幡多郡 大方町	吾川郡 吾北村	高岡郡 窪川町	吾川郡 伊野町	長岡郡 大豊村	宿毛市 小筑紫町
出火時刻	10	12	12	13	13	14	14	14
火災面積	12	600	800	280	400	1,000	250	150

1957 昭和32 年初の冬 東京砂漠の言葉が生まれる。無降水40日

1957 昭和32 4 22 大雨(低気圧)

低気圧通過後前線停滞により18日から雨となり、2月から続いていた干天は解消した。22日山間部では150～200ミリの大雨により少被害が出た。

被害 床上11 田冠7 道15 山崩7 土砂崩数ヶ所

1957 昭和32 6 27 台風5号 (関東以西)

990mb位の台風 27日九州西方海上で消え、そのエネルギーを受けついた低気圧の中国通過による被害発生。本県では26日夕刻頃から27日昼すぎまで主に東部で大雨が降り、又前線通過に伴う突風が発生した。

高知P11.0 室戸P24.7 足摺SW20.5

各地の雨量

日	天坪	大篠	東豊永	横山	本山	本川	高知	魚梁瀬	長者	池川	高岡	窪川					
26	268	226	228	157	136	114	174	174	130	112	164	53					
27	121	76	131	158	113	141	79	202	116	90	67	98					
被害	死1	傷1	家半3	床上1	8	下4	3	9	非住2	田冠	1,2	6	1	畑3	9	道1	8
	堤2	山崩	9	通信	1	2	船流	1	罹数	8	0	罹世	1	8			

△ 1957 昭和32 7 25~28 諫早霪雨

1957 昭和32 8 20 台風7号 (九州、中四国)

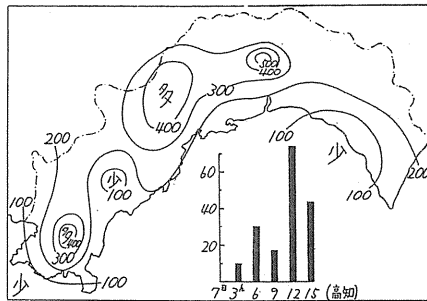
20日九州西方海上を北上した940mbの台風。本県では18日夕刻から全般に雨となり、20日は強く、渡川・仁淀川上流域に特に大雨が集中した。東津野では総雨量900ミリで仁淀川は20日に警戒水位突破、渡川でも21日7時6.3米に達し、小河川ははんらんした。

高知P 1,002 B S B 17.4

各地の雨量

日	東津野	梶原	長者	池川	江川崎	大正	大野見	窪川	本川	地蔵寺	高知	魚梁瀬																											
18	175	110	115	51	32	100	93	60	24	13	14	125																											
19	365	271	230	242	117	120	102	45	168	48	8	280																											
20	280	249	331	324	155	150	145	61	200	301	66	277																											
被害	死1	傷2	家全1	床上2	4	下8	1	一部破1	非住4	田流	1	冠2,1	3	7	畑冠	2	5	6	道4	2	堤1	山崩	1	6	通信	1	0	木材流	6	0	船沈	1	罹災数	1	1	0	罹世	2	6

1957 昭和32 9 7 台風10号 (関東以西)

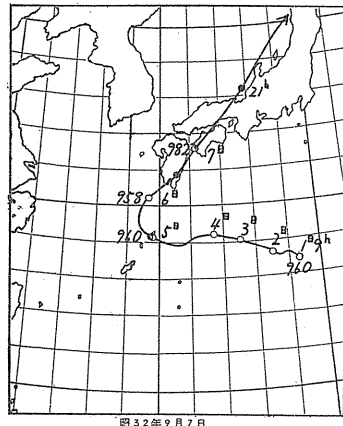


九州南部から四国北西部を通った中型台風で6日夜半台風が宮崎附近を通過した頃から県西部で暴風雨になり7日15時におさまった。

高知P 992 S 16.1 足摺SSW 18.0

各地の雨量

日	三原	東津野	大野見	越知	長者	池川	地蔵寺	本川	東豊永	本山	天坪	高知	魚梁瀬
6	390	324	242	197	291	288	257	20	74	93	69	63	76
7	57	4	70	82	91	77	240	140	186	127	190	117	149



被害 死2 傷2 家全1 流3 床上98 下618 一部破1 非住13 田冠5,251
畑304 道11 橋6 堤14 山崩26 通信68 木材流86 船流2
罹災数564 罹世124

1957 昭和32 9 9~11 大雨(前線 低気圧)

台風10号が通過後停滞していた前線が沖縄南方を北上していた台風11号によってしげきされ、又線上に低気圧が発生したことも重なって100~300ミリの雨が降り被害を出した。

(県の中央部は少なく海岸多)

3日間合計雨量 清水269 足摺152 宿毛143 中村262 室戸236 高知154
野根352 佐賀287 佐喜浜295

被害 死6 傷1 家全3 半3 非住3 床上74 下383 山崩34 道37
田流14 冠556 畑冠15 堤33 橋17

1957 昭和32 9 24 大雨(低気圧)

気圧の谷の通過による雨。県南西部では豪雨となり清水測候所では24日雨量299ミリを記録した。その他 中村228 三原241 大野見203 窪川196 室戸137
野根179

被害 床上6 下33 非住16 田冠318 畑冠20 道10 橋1 堤決1 山崩3
通信4

1957 昭和32 9 低温(多雨)

本月の降雨日数は20日内外雨量も1,000ミリ越すところがあり(三原1,116 大野見1,012 野根1,036)従って日照少ない。

又気温は全国的に平年より1~2度低かったので(高知-1.2度)水稻二期作に被害を出した。

[注] 上記の種々の災害を反映して本年の反収は159升(標準値の86%)に過ぎず、戦後の豊作群の中で特別な年となった。

1957 昭和32 10 5 大雨(低気圧)

低気圧が土佐沖通過したため佐喜浜町で局地的大雨あり 雨量168ミリ、少被害を出した。

被害 床下50 橋1 道浸水1

1957 昭和32 11 11 竜巻

安芸郡安田町日浦・別所部落に竜巻発生

被害 家半4 一部破36 その他農作物の被害多し。

[注] この日和歌山県海南市にも竜巻。

1957 昭和32 11 20 高潮(台風)

20日朝長岡郡香長村十市地区の海岸一帯に高潮が来襲した。

被害 加温園芸物30 棟大破、13 棟中破、野菜1,000坪流失 総被害額6億円

1957 昭和32 12 12~13 大風、竜巻 (全国)

発達した低気圧が日本海を通過し、本県では12日夜南寄りの風が強くなり沿岸地方では20米を越えた。

13日2時頃安芸郡芸西村叶木に竜巻が発生し被害を出した。

被害 傷2 家全4 半6 非住10 道2 小舟沈5 流2 破42 ビニールハウス70 坪破 罹災世帯15 火事1

1958 昭和33 2 1~2 大雨(低気圧)

低気圧が土佐沖を通過したため冬期にはめずらしく全県下に強雨あり、特に西・中部に集中し2日の雨量は高岡・須崎・窪川で100~150ミリであった。

被害 中部 床下30 道浸1 道1 橋1 土砂崩1 西部 土砂崩1 橋1 道1

1958 昭和33 2 山火事

19日から田野、安田、北川の3町村で山火事発生し、21日までで240町歩以上焼失

1958 昭和33 6 8 降雹(突風)

寒冷前線通過に伴ない13時頃安芸郡安田町で突風と親指大のひょうをまじえた強雨あり。

被害 家半1 非住1 床上2 板葺2 山崩2 崖崩6 葉タバコ、トマト、きゅうり等の園芸作物全滅 その他麦、芋等農作物に被害多

1958 昭和33 7 24~25 前線大雨 (奥羽一四国)

台風11号が東日本を通過後南方から暖湿気の上北体制が整って大雨となり、県東部で両日共100ミリを越え被害を出す。(西部は両日で100ミリ程度)

各地の雨量	日	天	坪	東豊永	榎山	魚梁瀬	八杉森
	24	240	137	116	157	207	
	25	168	134	177	146	141	

被害 死1 傷1 家全1 半8 一部19 床上3 下307 非住33 田流31 冠859 畑107 道27 橋4 山41 通信317 船破1

1958 昭和33 8 25 台風17号 (関東一四国)

北々東進して25日朝室戸岬をかすめて和歌山に上陸した970mbの台風。室戸岬を中心に中部以東が暴風雨になり、13時室戸岬では最大風速34米を記録し、又8mの大波を観測した。雨も東部の山間部に集中し魚梁瀬では23日148、24日386、25日223ミリを測る。室戸岬P979 R(9時)107

被害 死1 不明1 家全2 半4 床上1 床下3 一部破損2 非住家8 田流31 冠341 畑100 道14 堤4 山崩9 通信3 木材流50 罹世7(24人)

1958 昭和33 9 17 台風21号 (主に関東東北)

950mbの台風 土佐沖を北東進し東京に上陸した。県東部の海岸地方で波浪による被害があ

った。

被害 床下28 田冠5 道2 堤1

△ 1958 昭和33 9 26~27 狩野川台風

1958 昭和33 10 18 大雨(低気圧)

低気圧が本県を東進したため大雨、幡多郡佐賀町では5時50分に1時間70ミリを観測した。雨は中部以東の海岸に多く、野根245 須崎208 窪川187 高岡177の外150以下被害 床上23 床下666 堤決4 橋18 道7 山崩30

1958 昭和33 12 26 竜巻

2時30分頃吾川郡春野村に竜巻

被害 非住家倒2 温床倒2 アール 促成胡瓜全滅

1958~59 昭和33~34 温暖

昭和34年1月中旬の低温を除き著しい暖冬となった。

月	12	1	2	3	4	5
平均気温	9.8(平年より+2.3)	5.0(-0.3)	10.2(+4.1)	11.5(+2.1)	15.9(+1.6)	19.5(+1.5)
累年順位	5.	-	1	-	-	3
雨量	99(平年の157%)	45(45)	211(116)	150(56)	582(215)	269(75)
日照	209(112%)	195(104)	104(59)	192(99)	189(100)	192(96)

然し本県では雨量日照等が割に順調だったので麦作被害は軽微だった。

1959 昭和34 1 16~17 大雪

16日、日本海に入った低気圧が急激に発達し、夜から西日本一帯は寒波に見舞われ風雪となり、交通機関や農作物に被害を出した。幡多郡地方は陸の孤島となった。

積雪(cm) 中村3 江川崎16 榎原32 東津野20

被害 死1 臨時休校59 バス不通27ヶ所 高知の水道管破裂3,738

1959 昭和34 4 4~5 風雨、ひょう(低気圧) (西日本)

4日夜から5日にかけて本県を東進した低気圧による強風雨で高知市、土佐郡、長岡郡、香美郡ではひょうがあった。

4日 天坪252 地藏寺203 榎山177 本山157 窪川156 高知155

被害 死1 家半1 床下85 一部破1 非住3 田流137 畑冠84 道4 橋1 山5

1959 昭和34 6 10 大雨(低気圧)

発達した低気圧が四国地方を横ぎって東進したため全県下に亘って風雨強くなり、特に海岸地方で烈しく、土佐清水では200ミリを越す豪雨が集中した。

被害 土佐清水市 床上130 山崩2 田冠25 流失埋没 水稻28 甘藷9 果菜1 煙草1

浸・冠水 水稻492 甘藷124 果菜1 煙草5

1959 昭和34 6 11~7 7 干天

6月上旬には100~200ミリの雨が合ったが、その後雨天少なく7.7まで干天が続いた。6月雨量の平年並のところは清水付近のみで、一般には50%程度、特に北東山地で30%となり被害を出した。

被害 水稻 植付不能1 用水不足811 き裂183 枯死寸前13
陸稲 枯死寸前1 甘藷 作付不能193

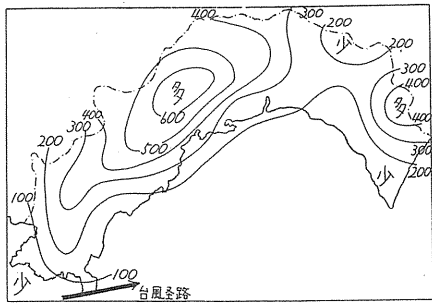
1959 昭和34 7 14~15 大雨(前線) (中部以西)

出戻り梅雨のため局地的大雨が降り、特に物部川上流域には14日1時間77ミリの豪雨が集中した。14日 魚梁瀬193 横山180

なお、これまで県下で日照りが続いていたので被害は少なかった。

被害 床下30 田冠33 道1 山崩8 通信1 早稲にいもち病、紋枯れ病発生

1959 昭和34 8 8 台風6号



8日九州四国の南端を掠めた970mb程度の台風。

足摺岬では台風眼を観測した。足摺P971

ESSE2.9 高知ESE1.8.0

この台風は中心の弱風域が100キロ以上もあり、上陸後風はあまり強くなかったが仁淀川、渡川上

流域や魚梁瀬地方などでは総雨量700ミリに達し、渡川では8日警戒水位を突破した。

各地の雨量

日	津大	大正	梶原	大野見	越知	長者	池川	本川	津賀	魚梁瀬	轟
6	64	148	173	150	260	220	220	86	144	72	69
7	132	137	131	165	230	221	167	179	161	185	169
8	148	130	164	169	185	212	187	177	104	220	189

被害 死1 床上2 下92 非住1 田冠1,569 畑40 道30 橋1 堤5 山崩14
鉄軌27 通信6 罹災数17 罹世5

1959 昭和34 8 11~12 大雨(低気圧)

小低気圧が12日土佐沖を東進し、中村付近で局地大雨を見た。(11日183ミリ)
被害 傷1 田冠350 堤1 道浸1 その他山崩続出バス線不通になる。

1959 昭和34 8 25 雷雨

夜須-田野間に雷雨があり、安芸で1時間雨量50ミリを観測した。

被害 床下32 田冠240 道2 堤決5 山崩5

1959 昭和34 9 17 台風14号 (西日本)

905mbの台風 九州西方から日本海にはいり本県からは遠く離れていたため被害は少なかった。県西部で17日中暴風雨となり、総雨量は北西県境で200ミリを越える程度。

長者186 池川164ミリ

被害 傷1 家半3 非住2 山1 通信1 罹災数28 罹世6

1959 昭和34 9 26 伊勢湾台風(15号) (中四国以東)

大型台風で26日室戸岬南方海上を経て18時過ぎ和歌山県南部に上陸し北々東進した。九州を除いた各地に被害あり、特に名古屋では高潮害が加わって全国死者4,759名のうち3,000名を出した。(その他不明282 傷38,838)

上陸した時の汐岬の最低気圧は929.5mbは室戸、第二室戸、枕崎台風に次ぐもので暴風雨圏が非常に大きく、しかも上陸後も勢力が余り衰えなかった為伊勢湾の南風は強く、3.55mの高汐を起こし未曾有の災害となったもの。

幸い本県は経路の西に位置し、雨量は少なく轟で150ミリ程度で大きな被害をまぬかれた。

高知P971 NNW17.6 R28

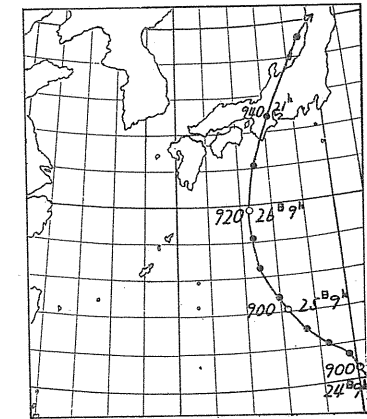
高潮24日頃から沿岸のうねりが高くなり、最盛期は26日18時~19時頃で桂浜の波高計は最大振幅8.5米を記録した。(高潮偏差最大46cm 15時30分) 特に大波が打寄せたのは安芸郡東洋町で野根では高さ10米の大波あり、平常の波打際より150~200米はなれた住家地帯にもおしよせた。

被害 死4 傷78 家全66 半65 流41

床上62 下131 一部破損75 非住家310 田流33 冠68 畑流9 冠17
道36 橋6 堤52 山5 通信31 木材流18 水陸稲1,700トン

1959 昭和34 豊作

大戦後農業技術や農薬の進歩が著しく、加うるに連続した暖候と相まって空前の豊作群を招来したが、特に本年はその内で最高記録を作った。(反収221升は標準値の113%)



昭34年9月26日

昭和	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
全国	1,238万ト	1,090	1,146	1,169	1,250	1,285	1,214	1,301	1,281	1,258	1,241
本県	11.6	10.3	9.3	12.6	13.2	12.7	12.4	12.7	10.3	12.3	10.9

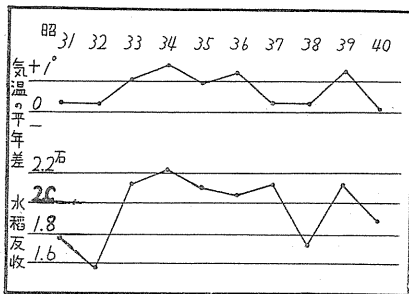
従来の記録 昭8年 1,061

参考までに本年稲作期の気象を示すと

月	6	7	8	9	10	11
気温(平年差)	22.4(+0.9)	26.8(1.6)	27.3(1.3)	25.3(2.2)	19.0(1.3)	14.6(2.1)
雨量(平年比)	291(85%)	255(75)	332(103)	260(67)	120(60)	121(107)
日照(%)	230(150%)	203(104)	244(110)	185(111)	208(114)	191(107)

これから温暖少雨多照の典型的な豊作タイプであることが判る。

別図は最近の米収と気温の関係を示すが両者の相関が極めて好いことを物語っている。



昭和34年 豊作の附図

1959~60 昭和34~35 暖候

33年からの温暖傾向は秋に入って愈々顕著になり35年1月を除いて3月まで続いた。

月	12	1	2	3
月気温(平年差)	9.1(1.6)	5.2(-0.1)	7.8(1.7)	11.6(2.2)

[注] 1. 34年平均気温17.2は累年順位第1位

2. 尙翌35年の麦収は高温多照適雨によって小麦は記録値となる。(大麦は37年に延期)

1960 昭和35 1下旬 大雪

西日本では24~25日、27~29日の2回に亘って西高東低の気圧配置となり、本邦附近は強い季節風の寒波による大雪に見舞われた。柚の木で25cmの積雪があった。

	高知	室戸	足摺	宿毛
旬平均気温(平年より)	3.2(-2.1)	4.7(-1.8)	5.4(-3.5)	4.3(-2.8)
最低気温(日)	-5.8(29日)	-1.4(25)	-0.2(29)	-2.7(27)

被害 山間部積雪のためバスはストップ、高知市で水道管180件破裂

1960 昭和35 4 20 風雨(低気圧)

低気圧が四国中部と土佐沖に分かれて通ったため強風雨となる。高知では20日6時過ぎが最も強くなった。土佐郡高岡町では1時間雨量85ミリを記録し、高知市では88.19米で4月としては気象台開設以来の強風であった。

被害 家全1半2 床上68 床下803 非住9 田冠300 畑冠34 道14 堤3 山崖19 罹世帯71(269人)

1960 昭和35 5 24 チリ一地震津波 (太平洋沿岸)

5月23日4時11分頃、南米のチリ沖(38°S 73.5°W)で大地震(松代地震観測での推定したマグニチュードは8³/₄でこれまで世界最大級地震と言われ、昭和3年の三陸沖大地震と同程度或はそれ以上と推定される。)が発生したが此の地震による津波が毎秒2000米の早い速度で太平洋を横断、(距離17455キロ)丁度24時間後(日本時刻で24日早朝)に日本全域の太平洋岸に襲撃した。このため日本全土で17万2千人が被災するという大被害が発生した。(死119 不20 傷872)

本県に津波第一波が襲撃したのは高知(桂浜)3時43分、清水3時35分であった。(県内の現地調査によると最も早く津波を感知したのは4時30分頃と報告されているがこれは第二波のようである。)そして10時頃までに最大全振巾2~3mの津波が数回に亘って襲撃し、その後28日夕刻頃まで異常潮位が続いた。

最高津波は平均潮位上桂浜1.47m(7時38分) 清水1.59m(7時35分)

須崎市多の郷では4時50分~18時20分頃まで10数回堤防を越える津波が押し寄せ、8時頃と18時頃(満潮時)との潮位が高く2米をこした。

被害 傷1 家全9 半46 流2 床上591 床下623 一部破80 非住112

田埋200 田冠511 畑冠5 道1 橋1 堤決1 崖崩3 鉄軌1 通信2

木材流失2,168 船沈4 流3 破1 伝馬船10

1960 昭和35 6 21~22 大雨(前線)

梅雨前線が活発になって山間部で集中豪雨あり、轟では270ミリを記録した。

被害 田冠125 畑冠50 山崩5 船沈1 伝馬2

1960 昭和35 7 1~5 怪雨

1~5日にかけて国鉄大田口駅を中心として西は和田部落、東は豊永駅近くまで東西4料の域に亘って黄色い雨が降った。

高知大学で分析の結果[ウヅキ][キクウ]等数種の花粉を含んでいた。

1960 昭和35 8 11~12 台風11号12号 (中部一四国)

11号は11日3時頃安芸郡田野町附近に上陸し北上した980mbの台風で、室戸では10日夕刻から風が強まり11日に最大風速48mを記録した。

雨量は全般的に少なく東部山地で100~200ミリ程度。

被害 家一部破82 非住8 道4 舟9 通信2

早稲 冠24 倒伏887 中稲 倒391 風害95

続いて12日17時過ぎに12号が田野町附近に上陸した。これも豆台風で被害は無かったが日付けと台風番号の合致した珍しい例と云える。

[注] 12号の被害は岐阜、静岡で大。

1960 昭和35 8 29 台風16号 (九州一中部)

14時頃土佐市宇佐附近に上陸北進した970mbの台風。(全国死50 不11 傷145)示度の衰弱が極めて少ない珍しい台風だった。

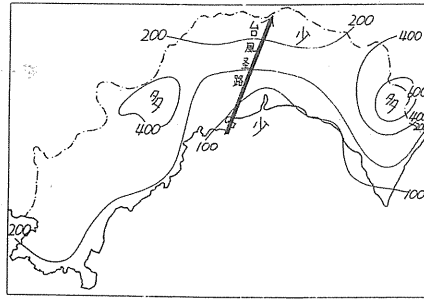


図35年8月27日～29日の合計雨量

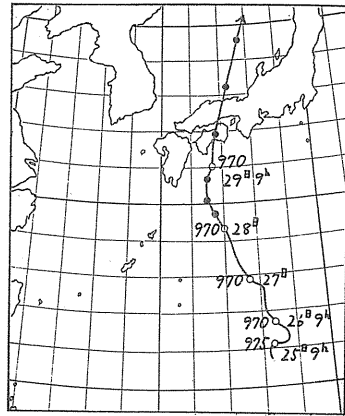


図35年8月29日

高知P970 B24.9 R(9時)62

降雨状況 一般には28日夜から強雨が始まり西部は29日の朝まで、東部では午後になりだので総量は轟760 魚梁瀬650ミリに達したが西部の最大は500ミリ程度

各地の雨量

日	轟	魚梁瀬	市宇	長者	梶原	東津野	横山	船戸	宿毛	高知	室戸
28	236	210	357	250	222	169	105	246	211	13	13
29	474	320	264	224	112	141	233	199	52	62	74

高潮状況

(天文潮位からの)高潮偏差 高知7.2cm(14時) 清水4.2cm(11時)
宇佐港では29日9時から12時まで潮位は平常より2米高くなり堤防が決壊した。(県土木詰所談)

被害 傷1 家全2 半1 6 床上1 8 下3 7 6 一部2 5 7 非住5 8 田冠1,6 1 4
畑9 8 堤3 3 橋9 道6 1 山崖1 3 舟沈2 流3 破4 1 通信8 8
家一部破2 5 7 罹災世3 9(148人)
水稲 910,790千円 果樹 27,840千円 計 938,630千円

1960 昭和35 10 19 風浪(台風24号)

四国南方海上を台風が北東進した。19日夜高知港入口で青山丸(449トン)が高浪のため沈没、行方不明8人を出した。

1960~61 昭和35 12下旬~36 1 低温(異常乾燥) (北陸雪害)

12月25日気圧の谷通過後寒気が南下したため、本県では27日から急速に気温が下がった。31日朝高知では-5.8℃(12月としては43年ぶりの記録)を観測し、又山間部ではこの日大雪となり、梶原では7.7cmの積雪があった。

この低温は1月に入っても続き、その上空気が異常に乾燥し各方面に被害が発生した。

被害 高知水道パイプ破裂600件 果樹(ミカン)害579ha(特に南国市夜須、香我美、野市、日高、山田各地区で大)

高知市内の12月28~1月20日までの出火件数31(1,697万円)(例年の7割増)

1961 昭和36 2 27 地震

3時11分頃日向灘を震源とする強震あり(高知、清水で震度3)清水では最大波高1米(周期約2.5分)の弱い津波を観測した。被害なし

1961 昭和36 3下旬~4 異常乾燥

移動性高気圧が本邦附近を南偏して通過することが多く、顕著な高温が現われた日平均気温が5~10℃も平年より高くなり相対湿度は甚だ低下し、高知市では4日最小湿度9%を観測した。(気象台開設以来の記録)
(西日本各地で火災がひん発)

1961 昭和36 6末 梅雨前線豪雨

(九州一東北)

24日四国から始まった豪雨は26日近畿から紀伊半島に、尚28日は中部東海関東に移り、30日は北陸東北へと広がって各地に洪水を起こしたが、特に天竜川伊那谷(大鹿村)の大地じりと狩野川の再氾らんが大きい。(死302 不55 傷1,320)

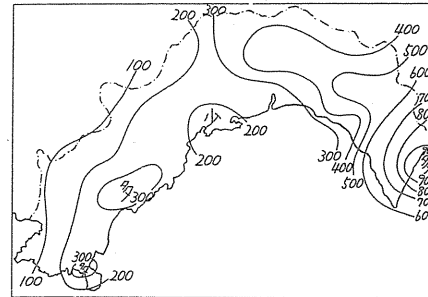


図36年6月23日～30日の合計雨量

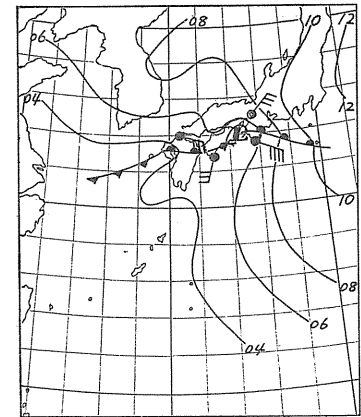


図36年6月25日03時海上天気図

本県では24日夜佐喜浜を中心とした集中豪雨があり538ミリを観測した。(日雨量の新記録)(1時間最大70ミリ)この他各地で100ミリ以上を観測した日は25、26、28、29等であるが、これ等の総量は左程大きくない。

8日間合計雨量は図の通り。
24日雨量 野根460 田野332 室戸岬302
被害 死2 傷4 家全4 半7 床上4 6 下7 3 3 家一部破2 非住7 田流9
田冠65 畑流25 畑冠33 道9 3 橋3 堤3 1 山崖3 4 通信2 船3
罹災55(152人)
水稲 水田 林道施設 林材 農地 農業施設
1,020万円 234" 700" 10,100" 500" 1,500"

1961 昭和36 7 24 大雨(熱低)

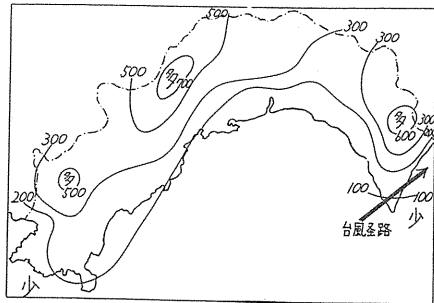
熱帯低気圧が九州西方を北上中、県の中央部で大雨となる。

24日夜から25日朝の雨は地蔵寺213 天坪201 高知191 本山189
被害 床下205 田冠362 畑13 道31 山崖8 通信1
水稻倒伏 978 ha 5,000万円

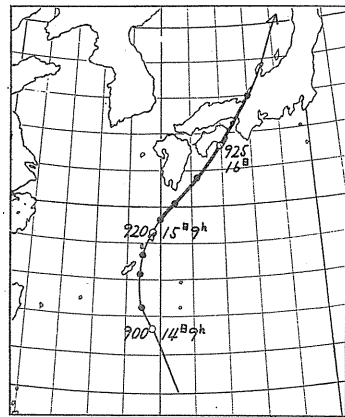
橋24 堤46 山崖45 鉄軌1 木材流871 船沈8 流29 破85 伝馬81
罹災世747(2,951人)

1961 昭和36 9 16 第二室戸台風(18号) (全国)

16日9時半室戸岬に上陸し海岸沿いに北東進した最大級の台風。室戸台風と殆んど同経路。幸いに人命の損傷は少なく(死194 不8 傷4,972)防災対策の充実したことを示した。本県でははるか南方海上にあって北西に向きを変えた13日午後から足摺岬では2~4米のうねりを観測し、14日昼前から県下全般に降雨が始まり次第に強くなった。



昭36年9月13日~14日台風経路



昭36年9月16日 太閤高知の風速15%以上

15日21時には沖の島が暴風圏に入り、台風が土佐湾に入った9日早朝から県下全般に20米以上の暴風雨となった。

高知P954 田18.8 室戸岬P931
WSW74.8 足摺W25.3

豪雨は主に仁淀川及び渡川上流域に集中し、15日の雨量は300ミリを越え、16日正午前後には警戒水位を突破する河川も出た。台風が上陸した室戸岬地方では暴風は西海岸で最も強く、昭和9年の室戸台風と較べて風速と高潮は同程度若しくはそれ以上大きかったが被害は少なかった。

各地の雨量

日	東津野	榑原	長者	池川	地蔵寺	本川	本山	高知	安芸	室戸	野根	魚梁瀬	横山
14	184	118	411	351	215	198	121	79	42	36	64	170	73
15	348	313	323	314	231	252	133	95	50	32	83	185	155

河川水位(cm)

	渡川(具同)	仁淀川(伊野)	仁淀川(中島)	物部川(深淵)
最高(警戒)	754(650)	767(620)	820(720)	322(340)

	桂浜	土佐清水
高汐量(天文潮位上)cm	98(8時47分)	69(3時04分)
最高潮位(平均潮面上)	167()	178(15日21時30分)

被害 死2 傷78 家全93 半160 流52 床上254 下1,614 一部破1,680
非住家750 田流384 冠4,157 畑17 畑冠639 通信126 道106

1961 昭和36 10 4 大雨(前線)

寒冷前線通過のため9時から15時にかけて県東部海岸に集中豪雨あり。佐喜浜163 野根212ミリで小被害を出した。

野根字中島で橋流1 県道真砂線不通、野根字オチズで道12m

[注] 2日鹿児島で強風下の火災734世帯

1961 昭和36 10 6 大雨(低気圧)

顕著な寒冷前線を伴う低気圧が通過のため、県中部地区に夕刻から夜半にかけて雷雨を伴う集中豪雨あり、長岡郡大豊村では21時から1時間雨量103ミリの強雨し、数時間で400ミリに達した。

被害 家半1 床上150 下587 非住1 田流3 冠6 道13 山崖1 鉄軌3
伝馬船20

1961 昭和36 10 26~27 大雨(低気圧) (九州一近畿)

25日午後沖繩付近に発生した低気圧は北東に進んで瀬戸内に入り、27日南東に転進した。これに伴って25日夜九州に始まった大雨は沿道を侵し、27日は近畿に移った。

本県の山間部では26日夜1時間20~40ミリの大雨が降り続き、総雨量は西では高岡郡船戸で448ミリ、東の安芸郡轟で566ミリであった。

各河川は著しく増水し、特に渡川(具同)では27日3時に最高水位7.9米に達し警戒水位を1.4米突破した。

26日雨量 轟530 魚梁瀬424 船戸379 長者351 東津野300 鳥形山324
被害 不明1 家半2 床上38 下196 一部破6 非住7 田流5 冠248 畑238
橋7 道32 堤6 山崖33 鉄軌1 通信2 船24 罹世42(162人)

1961 昭和36 温暖

1、2月を除いて極めて温暖に経過し、特に夏期の高温持続は記録的でこれらの累年順位は7月2位、8月2位、9・10月共1位となり、従って年平均気温も第3位高位を占めた。

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気温	4.3℃	5.3	11.3	15.5	19.4	22.6	27.2	27.6	25.7	21.1	14.1	7.9	16.8
平年より	-1.0	-0.8	+0.9	1.2	1.4	1.1	2.0	1.6	2.6	3.4	1.6	0.4	1.2

1962 昭和37 1下 大雪

19日から優勢なシベリヤ高気圧が張り出して月末まで冷え込みが続き、各地で大雪を見た。このため本県山間では交通が止まり、小中学校が臨時休校した。

下旬の温度(平年差) 高知2.7(-2.5) 室戸岬4.0(-2.9) 足摺5.1(-3.3)

積雪最深(cm) 大正10 榑原60 東津野34 大野見14 長者25 本川25

1962 昭和37 2 20 土砂くずれ

土讃線土佐岩原—豊永駅間(大豊村八川)で早朝ごろ大きな土砂くずれあり、線路工死1、不明1を出した。開通には約1ヶ月を要した。

1962 昭和37 4 2~3 風雨(低気圧)

深い気圧の谷が通過し、本県では2日夜半から3日朝にかけて風雨が強くなり、特に中部地区で集中豪雨あり、天坪・平石では250ミリを観測した。

被害 土佐岩原駅—豊永間3日6時に土砂崩れのため不通となる。

高知市相生町で床下浸水70

1962 昭和37 4 10 風雨(低気圧)

9日夜半低気圧が本県を通過したため、7日から雨が始まり10日遂に小被害が発生した。

9日 高知147ミリ 地藏寺136 天坪133 野根157

被害 不明1 家全1 床下60 田冠2 畑1 道10 橋1 山崖5 通信2 小舟1

1962 昭和37 6 21 大雨(前線)

閉塞前線が四国地方に停滞したため2日1日明方から22日9時頃まで強雨が降り続き、特に南西部で雨量が多かった。

20—21日二日雨量 佐賀387 窪川223 須崎213 中村190

被害 家半1 床下30 田冠68 道9 橋流1 山崖8

1962 昭和37 6~7上 長雨 (西日本)

6月中旬末を除いて雨天多く、特に6.10、7.2等には県の東部で浸水、山崩れ等の小被害が出た。この間に6.21の大雨(前掲)も加わり水稲に長雨害が出かかったが大きくなるはなかった。被害 半漬1 床上8 下159 田流1 冠水953 畑69 道48 橋流1 山崖崩れ37

[注] 7月上旬西日本各地で豪雨被害を出す。死112 不115 傷17

1962 昭和37 7 13 雹(前線)

嶺北地方では9時15分頃、雷を伴って直径1.5cm位の降ひょうがあり、煙草、サツマイモナス、コンニャク等に被害があった。

1962 昭和37 9 異常高温 台風来らず

△ 1962 昭和37 12 東京スモッグ ロンドンも750人死す

(有名なロンドン・スモッグ 昭27.12 4,000人死)

◎ 1963 昭和38 1~2 低温大雪(北陸豪雪)(九州 中四国 近畿 北陸東北)

37年末から2月にかけて全国的に異常寒波が来襲し、裏日本各地では連日降雪が続き、北陸地方を中心に豪雪となった。(死228 不3 傷356)

本県でも大雪や異常低温により雪害・冷害などを含めて、かつて経験したことのない被害をう

けた。この寒波は2月上旬まで波状的に来襲した。大雪の中心は高岡郡橋原村方面の山岳地帯で、交通途絶した孤立地帯救援のため自衛隊が出動する状態であった。

一月の県内の寒さの記録

	月平均気温			平均最低気温			日最低気温			暴風		降雪	
	℃	順位	平年	℃	順位	平年	℃	日付	順位	日数	順位	日数	順位
高知	18	1位	52	-3.1	1位	02	-7.5	16	2	2	—	11	1
宿毛	37	1〃	67	12	3〃	29	-3.0	16	—	22	1	22	1
足摺	49	1〃	83	23	3〃	50	-2.6	16	2	10	2	20	1
室戸	3.5	1〃	7.0	1.0	1〃	4.0	-3.2	16	1	31	—	12	1

積雪(cm) 橋原17日(54) 24日(65) 25日(95) 26日(102) 27日(50) 30日(73) 31日(91) 以後50以上は2月1~9(3日77)、11~15(14日61)

長者27~2(31日107)

被害 家全2 半22 非住家21 罹災世26(112人)

農作物 3,151.2ト 16,660,460千円

林産物 13,181ha 14,520.6千円

道路 泥ぬい対策 93,000千円 雪どけ補修 2,2500 計 115,500

なお、この期間異常乾燥で火災が頻発した。

出火件数	1月	2月
家	24	25
山林	11	25
その他	6	2

[注] 日本異常低圧 北陸豪雪、南の島々にも雪が降る。日本だけでなく欧米とも低温。(海水温度も下り磯魚こぼえる)

◎ 1963 昭和38 5~6 長雨、豪凶作 (西日本高温)

(1) 5.4から梅雨のはしりが始まり、月内の雨天日数は20~25日、集中豪雨は無かったが長雨のために下記の被害を出した。

死1 家全2 半1 田冠320 畑61 山崩14 船沈1 罹災5世帯(19人)

こえて6月に入っても20日まで殆んど毎日降雨があり、特に2、13日等は大雨りとなって被害を出した。

(2) このように麦の収穫期に当って連日降雨したため病害がおこり殆んど立腐れ、収かく皆無の惨状を呈した。

大麦反収21升 小10 裸15(記録的な低収で過去に匹敵するものはない。)

参考のため月平均を示すと

月	気温(平年より)	雨量(平年比)	1ミリ以上日数	日照時数(平年比)
5	20.6(+2.6)	351(126%)	23(+12日)	53(27%)
6	23.9(+2.4)	699(204)	20(+6日)	99(65%)

[注] 5、6月平均気温は夫々累年第1位高温6月雨量は第3位多雨5月日照は第1位少照

1963 昭和38 6 2~4 大雨(前線)

本邦南方海上を通過した台風2号により梅雨前線がしげきされ、本県では3日夜から4日朝にかけて風雨が強くなった。特に東部の佐喜浜では1時間量30ミリの強雨を観測した。2~4日の3日合計は西部海岸、中央部から北東県境に多く300ミリだった。

被害 家全16 床下445 一部破1 非住2 田冠383 畑50 道17 堤4
山崖21 通信1 鉄軌1

1963 昭和38 6 13 台風3号

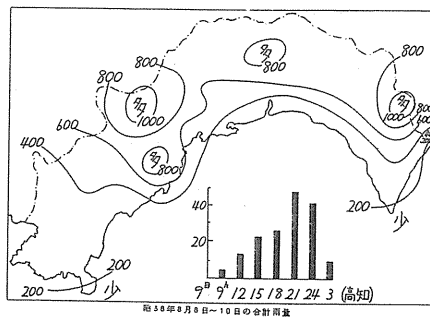
小型台風3号が13日22時頃宿毛市付近に上陸し北東進した。このため本県では13時頃から風雨が強くなり、4日の6時にはおさまった。

雨量は中部山間地帯で200~280ミリあり、これまで連日に亘り長雨が続いていたのでかなりの被害となった。

高知P996 ES E 13.5 足摺SS E 15.7 宿毛P993 SE 17.3
被害 死1 傷2 不明1 家全3 半4 床上133 下578 一部破6 非住2
田冠1,154 畑51 道44 橋14 堤4 山崖68 鉄軌3 通信2 罹災者139
避難世518

◎ 1963 昭和38 8 9 台風9号

(九州、中四国)

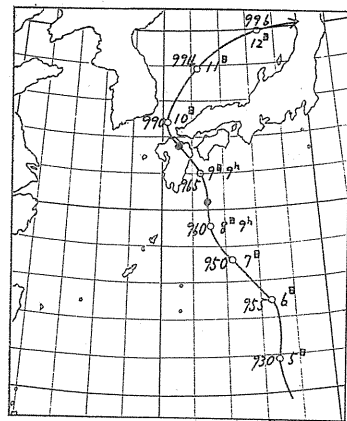


965mbの台風、四国南方海上を北々西進して13時過ぎに大分県佐伯付近に上陸した。

この台風は速度がおそかったため本県では暴風雨時間が長く、県西部・中部に豪雨をもたらした。特に西部山岳地帯では1,000ミリを越え、渡川流域では昭和10年以来の大洪水となった。

暴風雨の最も強かったのは9日19時頃で11日午前によくおさまった。

高知P995 ES E 20.2 足摺P985 ES E 24.3 各地の雨量



日	東津野	橋原	大野見	窪川	越知	長者	池川	地藏寺	本川	東豊永	本山	天坪	高知	魚梁瀬
8	375	340	253	350	133	275	166	110	62	74	42	90	73	298
9	597	485	441	550	416	560	526	557	500	474	519	415	203	426
10	61	61	52	29	40	51	47	201	86	125	144	195	67	299

水位 渡川(具同) 仁淀川(中島) 鏡川(鏡川橋)

最高(警戒) 1,045(650) 1,060(720) 280(230)

起時 9日24時 9日24時 10日1時、2時

潮位偏差最大 高知7.6cm(9日12時00) 清水5.6cm(8時32分)

災害救助法を発動した地域

10日 中村市 須崎市 土佐市 吾川郡日高村 伊野町 高岡郡越知町 窪川町 幡多郡西土佐村

11日 高岡郡橋原村 東津野村 大野見村 吾川郡春野村 幡多郡大正町 十和村

被害 死15 傷21 不明4 家全64 半154 流失68 床上5,610 下7,862
一部破損1,558 非住1,051 田冠3,988 流埋200 畑2,933 畑流埋83
道412 橋163 堤175 山崖324 鉄軌4 通信279 木材流85,850
船沈1 流12 破37 小舟28

[注] 本年水稻反収173升は標準値の86%程度で近年最低となったのはこの台風の影響による。

1963 昭和38 10 25 大雨(気圧の谷)

気圧の谷通過のため県西部で集中豪雨あり、中村で24・5日に401ミリを記録した。

被害 田冠100 中村市で道浸水、土砂崩、決壊9 バス不通

1964 昭和39 1 暖冬多雨

1964 昭和39 4 高温多雨

太平洋高気圧が異常に発達し、高温多湿な空気が流入したため西日本は6月下旬なみの記録的な高温となった。又前線が本邦付近に停滞することが多く、天気はぐずずいて雨量も4月としては記録的に多かった。この高温、多雨、多湿及び少照のため農作物にかなり被害が出た。

高知の気温 雨量 日照時 注
19.2(平年より+4.8) 362(平年の140%) 82(42%) 高温少照は累年順位1

被害(県農林部4月30日現在)	減収	被害見込額	被害見込額	主な被害市町村
被害状況	被害面積			
水稻早生	15,000ha	7,193t	62,5748千円	県下全般特に平坦部
麦類	5,430	7,410	3,1112千円	高岡、須崎、中村、高知
計	20,430	14,603	93,6970千円	

野菜類(きゅうり なす とまと ピーマン すいか) 71,0321千円

[注] 本年小麦の反収は53升で前年に引続いて第2位最低 数百年に1回の高温(九州と山梨が中心)

1964 昭和39 6 20 大雨(前線)

梅雨前線の活動による大雨で県東部では総雨量150~250ミリに達した。

被害 室戸市の林道畑古矢線に山くずれ、釣の口、古矢、長者野、西の川、畑古矢、朴木の6地区200戸が孤立した。

1964 昭和39 6 25~26 大雨(前線)

梅雨前線が活潑化したため連日降雨していたがこの日強雨となって幡多地方で河川が増水し被害が発生した。

25・6日雨量 中村135 富山170 江川崎169 橋原167 大野見142

被害 江川崎で不明1 家半1 田冠192 道5

他西部全般で 不明1 家半1 田冠92 道2 山崩1 土砂崩4

1964 昭和39 8 23~24 台風14号 (九州-近畿)

中型台風が22日12時頃枕崎に上陸し瀬戸内を通った。本県沿岸では15日頃からうねりが出はじめ23日足摺岬で6~9米に達した。雨は21日より降り始め、23日北西山間部で250~350ミリ、総雨量は400ミリを越えたが、海岸では100を稍上廻る程度だった。風は24日午前が最も強かった。

高知P988 S13.7 宿毛SSW23.3 足摺SW20.7

被害 家半1 床上6 床下15 非住6 田冠623 畑7 道26 橋2 山崖11 小舟1 罹災12(45人)

1964 昭和39 9 25 台風20号 (関東北陸以西)

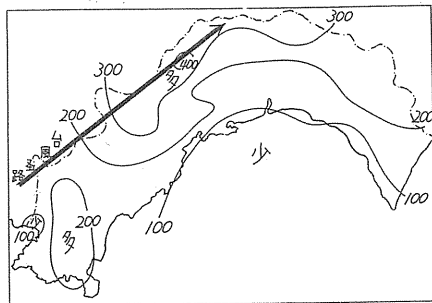


図39年9月23日~24日の合計雨量

930mbの台風 大隅半島を経て25日0時過ぎに宿毛市の北方に再上陸し四国中央部を北東進した。県西部では24日夕刻から暴風雨になり、夜半頃から県下の各地で20米以上の最大風速を観測した。雨量は北西部で400ミリを越えたが海岸地方では少なかった。

高知P976 SSW25.2 宿毛P965 SSW35.3 足摺SW35.3
被害(9月26日9時現在)

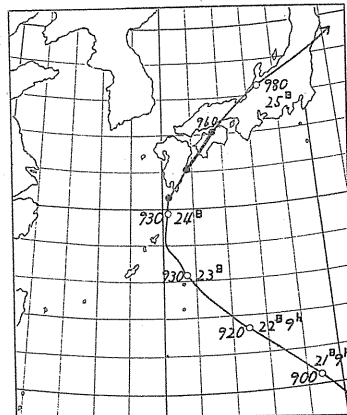


図39年9月25日 太脚高知の風速15m/s

	死者	負傷者	家壊	半壊	流失	床上浸水	床下浸水	一部破損	非住家	水田埋没	畑冠埋没	畑冠水	道路損壊	橋流失	堤防決壊	山崩	通信施設	鉄軌道	
東部	—	1	113	471	—	—	—	2,187	587	4	6	—	1	5	3	2	13	—	11
中部	—	38	246	1,156	6	24	833	12,241	2,217	6	688	34	45	98	4	2	8	2	149
西部	3	10	63	358	—	17	42	3,928	739	—	996	—	15	23	10	1	5	1	120
計	3	49	422	1,985	6	41	875	18,356	3,443	10	1,690	34	61	126	17	5	26	3	150

	船舶沈没	流失	破損	罹災世帯
東部	—	—	6	284
中部	4	4	26	2,478
西部	17	43	14	377
計	21	47	46	3,439

災害救助法発動した市町村は高知市、安芸市、土佐清水市ほか21ヶ町村

[注] 地区の区分は警察署管内により、安芸・室戸を東部、窪川・中村・宿毛・清水を西部とする。

1964 昭和39 11 9 地震

2時56分頃本県中部山地で震度3の地震発生 深さ20キロ 地震の少ない本県にとっては珍らしい。

1964 昭和39 温暖

1月始めからの温暖は消長もあったが一年中続き、特に4月及び夏期の記録的な高温(4月の別項参照)によって年の平均気温は昭和34年に次ぐ第2位となった。

尚雨量は4、6月に多く秋に少なかったため、年量は平年の75%に過ぎなかった。(日照は稍少な目)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気温	7.5	5.8	9.7	19.2	19.9	21.8	27.2	27.8	25.3	19.0	12.3	8.3	17.0
平年より	2.2	-0.3	+0.3	4.9	1.9	0.3	2.0	1.8	2.2	1.3	-0.2	0.8	+1.4
累年順位	5	—	—	1	2	—	3	1	2	—	—	—	2

1965 昭和40 2中旬~4中旬 少雨

2月11日から4月12日まで降雨が少なく、高知の3月の雨量は39.8ミリで累年順位第2位の少雨であった。水不足のため水稻2期作の植付はおくれ、又水道はビンテにおちいったが4月13日以後の降雨で解消した。

△ 1965 昭和40 3~4 日本・欧米異常寒春

1965 昭和40 5 26~27 大雨(前線)

沖繩附近を北上した小型台風が前線をしげきして25日の夜から降りだした雨は26日午後から夕刻にかけて集中豪雨となり佐賀、佐喜浜で200ミリを越した。

被害 死1 床下16 非住3 田冠798 畑45 道11 崖15

1965 昭和40 7下旬~8下旬 干天

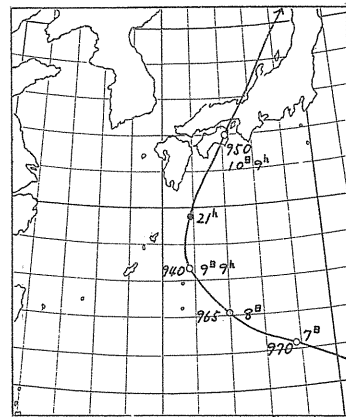
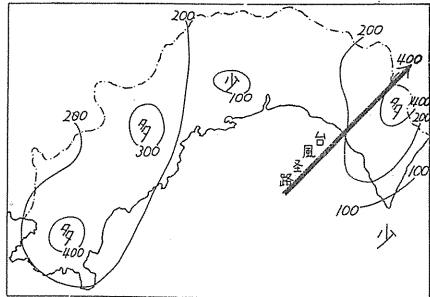
強い夏型気圧配置が続いたため西日本は干ばつの被害が発生した。本県では水道、電力事情の悪化はもちろん水田のかんがい用水が不足して水稲は枯死寸前となり、農村では水争いをする所もあった。8月28日県干害緊急対策本部が設置され、人工降雨実施対策も検討されたが幸いにも29日夜から気圧の谷通過に伴ない降雨があり大事に至らなくてピンチを脱した。

〔朝日新聞〕8月28日、干害のひどいところは中村市、土佐市、幡多郡大方町、吾川郡春野村などで、枯死寸前の中稲は831ha、晩稲38ha、2期作38ha、県消防々災課が26日調べたところでは県下にある25馬力のポンプ500台、百馬力の自動車ポンプ百台の中約70%が干害対策に出動している。

被害 水陸稲 97,230万円(9,440ha) 雑穀 1,979万円(807ha)
 サツマイモ 13,650 "(5,213") 野菜 1,660 "(1,272")
 カンキツ 8,930 "(2,630")
 コンニャク 2,100 "(419")

1965 昭和40 9 10 台風23号

(全国)



945mbの台風 午前8時30分安芸市附近に上陸し北東進した。この台風は進行速度が速かったため全般に雨量は少なかったが、室戸岬では第二室戸台風の記録を更新する強風を観測し県東部(特に東海岸)の風害が大きかった。

高知P959 NNW14.0 R87
 室戸P947 WSW69.8 R48
 足摺 N27.7 R13.4

9日雨量 三原550 魚梁瀬428 大野見347 東津野300 長者291

中村・清水278 富山・津大250以上

被害(9月10日17時現在)

	死者	負傷者	行方不明者	家全壊	家半壊	流失	床上浸水	床下浸水	一部破損	非住家	水田埋没	冠水	畑冠水	道路損壊	橋流失	堤防決壊	山(崖)崩	通信施設	木材流失	船舶沈没
東部	3	—	19	102	1	64	259	1,997	154	—	152	16	3	1	2	17	—	—	—	1
中部	2	—	3	1	—	3	333	10	212	—	361	21	3	—	2	5	42	—	—	—
西部	4	2	3	3	—	32	346	62	26	2	429	34	27	10	12	20	—	23	—	—
計	9	2	25	106	1	99	932	2,069	392	2	942	71	33	11	16	42	42	23	1	—

	船舶流失	罹災者数
東部	4	28 42
中部	4	11 57
西部	7	22 168
計	15	61 267

1965 昭和40 9 14~15 前線豪雨 (四国 近畿 福井 岐阜)

北上中の台風24号に刺戟された前線豪雨。福井県大野郡西谷村では15日雨量1,028ミリを計り、九頭竜川決壊し岐阜県徳山村では893ミリを計る等で大被害を出す。本県は14日昼過ぎから室戸岬方面で強雨となり、後強雨域は西に進行した。15日午後2時池川町では1時間雨量50ミリを越したため仁淀川水系では各地で危険水位を突破した。なお、この雨の特性は山間部、平野部ともに雨量が多かったこと、次の台風24号に引続いて17日まで(多いところは)各日100ミリを越えたことである。

雨量
 14日 魚梁瀬361 野根328 本山321 大篠293 東豊永292 高知268
 天坪・平石255
 15日 池川410 本川351 東津野326 長者257

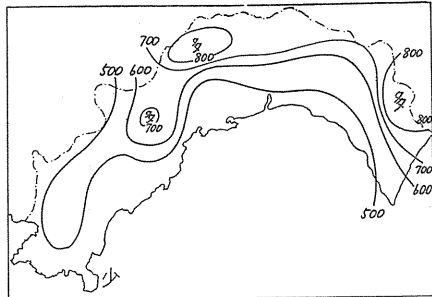
被害(9月16日17時現在)

	死者	負傷者	行方不明者	家全壊	家半壊	流失	床上浸水	床下浸水	一部破損	非住家	水田冠水	畑冠水	道路損壊	堤防決壊	山(崖)崩	通信施設	罹災者数	罹災者数
東部	—	—	—	—	—	—	32	337	—	—	235	—	27	1	10	191	32	112
中部	2	6	—	3	7	—	151	4,666	3	5	2,011	215	91	4	37	143	161	614
西部	—	—	1	—	—	—	—	—	2	—	320	—	2	—	3	37	—	1
計	2	6	1	3	7	—	183	5,005	3	5	2,566	215	120	5	50	371	193	727

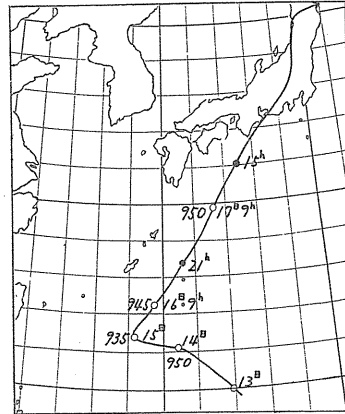
1965 昭和40 9 17 台風24号

(四国以东)

955mbの台風 室戸岬南方海上を北東に進んで17日21時過ぎに渥美半島に上陸した。前線活動による雨は東部では15日15時頃一応止んでいたが西部は台風の北上に伴う雨に引続き16日9時から12時頃まで豪雨となり津賀では1時間雨量45ミリを観測したが、短期間で



昭40年9月15日-17日の合計雨量



昭40年9月17日

午後からは断続するようになり、河川の水位は下りはじめた。17日昼過ぎ雨は全くやんだが北寄りの風が強くなり、高知市では19時30分に最大瞬間風速NNW38.7米を観測した。(昭和15年以来2番目の記録)県中部平野ではこの北風にあおられ住家、ビニールハウス等に多大の損害を出した。

高知P981 NNW16.0 室戸岬NNW29.7
被害(18日14時現在)

	負傷者	家全壊	床半壊	床上浸水	床下浸水	一部破損	非住家	水田冠水	畑冠水	道損壊	堤防決壊	山(崖)崩	通信施設	船沈没	罹災世帯	罹災者
東部	3	—	3	—	—	7	32	—	—	—	—	5	—	1	2	9
中部	5	6	33	9	331	1,526	149	37	—	22	3	18	684	—	58	196
西部	—	2	—	8	44	—	3	700	4	1	—	5	—	—	10	18
計	8	8	36	17	375	1,533	184	737	4	23	3	28	684	1	70	223

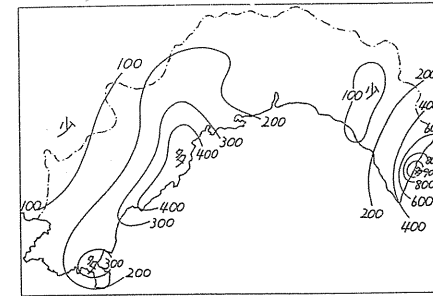
1966 昭和41 5 20~22 大雨

20日九州南西海上の低気圧は非常におそい速度で東に進み、一方石垣島南方海上の熱帯低気圧は北上を続けた。このため本県に顕著な集風線が形成され(特に室戸市附近)県下各地に局地豪雨が発生した。

佐喜浜では21日9時頃から雨勢が最もはげしくなり(1時間最大63ミリ)日雨量694ミリ(本県における日雨量の新記録)を観測した。

このような雨は室戸市附近では、700年に一度位の割合で起こる大雨である。これによって発生した被害は下記のとおりであり、特に椎名-佐喜浜間に多い。このため室戸市では災害救

助法を適用した。



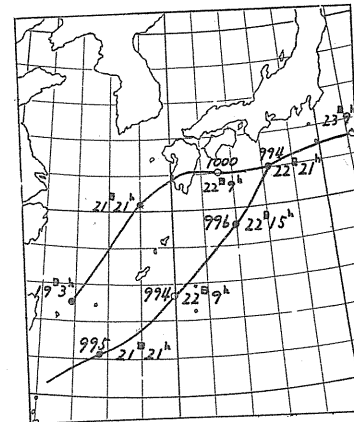
昭41年5月20日-22日の合計雨量

各地の雨量

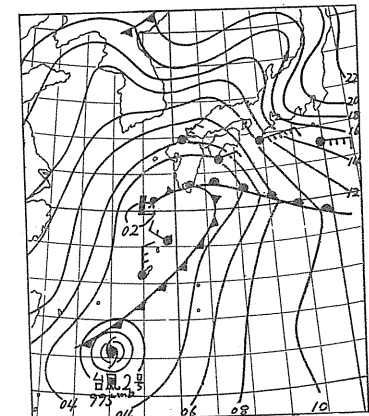
日	高知	室戸岬	中村	清水	足摺	宿毛	佐賀	窪川	須崎	久礼	佐川	佐喜浜	野根
20	63	75	108	179	67	36	52	102	115	167	102	171	129
21	124	289	134	156	136	89	174	260	267	291	221	694	413
22	12	13	2	15	5	1	84	16	—	17	17	43	65
計	199	377	244	350	208	126	310	378	382	475	340	908	607

被害

	行方不明	負傷者	家全壊	家半壊	床上浸水	床下浸水	非住家被害	水田流埋没	水田冠水	畑冠水	道路損壊	橋流失	堤防決壊	山(崖)崩れ	鉄軌道	通信被害
東部	1	2	13	7	126	544	13	66	497	5	27	14	60	58	—	3
中部	—	—	—	—	21	82	1	—	197	—	3	1	1	9	1	—
西部	1	—	—	—	—	3	—	—	149	—	4	—	—	—	—	—

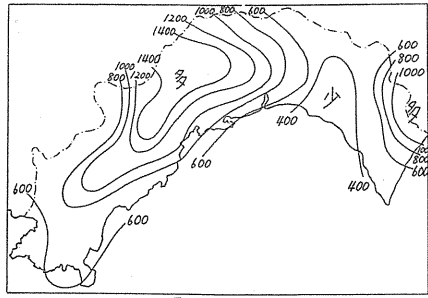


昭41年5月21日

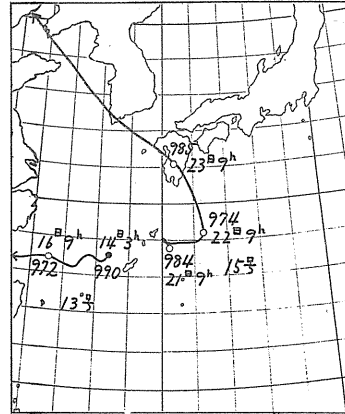


昭41年5月21日21時の地上天気図

1966 昭和41 8 12~25日 大雨(台風)



昭和41年8月12日~24日の雨量



台風13号、15号の経路図

台風13号(沖縄附近に発生、西進 雨12~16日)熱帯低気圧(九州南西海上 雨17~21日)台風15号(23日朝宮崎市附近に上陸 雨22~25日朝)とつづいたので、高知県は連日の大雨、特に台風13号では四国の南海上に発生した前線が活発となり各地共豪雨となり、又台風15号が九州南部に上陸したあと南東風による俄雨(23~24日)がつよかった。本県は梅雨明けより雨が少く、干害気味であったので豪雨による被害は割合少かったが、早期水稻は高温多湿により発芽するもの多く、この被害は1.3億円に達した。

被害

	死者	負傷者	家全壊	家半壊	床上浸水	床下浸水	一部破損	非住家被害	水田流埋没	水田冠水	畑流水	道路損壊	橋流失	堤防決壊	山崖崩落	通信被害	罹災所帯
東部	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—
中部	—	3	3	1	390	4015	1	—	2	1,592	3	16	2	5	19	6	394
西部	1	—	—	—	3	20	1	2	1	1,336	10	19	3	—	10	3	3

8月12日~24日の県下の雨量

	高知	室戸岬	中村	清水	足摺	宿毛	江川崎	津賀	佐賀	構原	船戸	佐川	土居	本山
8月12日	3	64	21	77	64	2	2	13	23	8	37	23	33	4
13	24	131	66	137	126	32	9	16	73	15	38	25	37	12
14	32	99	140	126	122	61	90	63	67	55	105	85	77	11
15	267	93	233	183	123	187	226	242	250	183	267	380	308	222
16	128	10	10	8	4	32	33	42	60	62	223	120	219	128
17	65	4	15	8	7	26	16	15	30	16	34	35	33	68
18	40	4	3	0	3	3	4	8	10	10	20	95	37	44
19	51	9	17	11	7	8	27	65	18	39	181	64	105	57
20	13	1	19	21	10	24	24	65	13	44	99	50	132	17
21	0	13	35	31	26	78	32	26	39	23	11	2	1	—
22	23	38	103	56	42	111	80	124	82	142	126	70	106	25
23	104	12	76	9	12	22	62	83	14	67	160	120	251	146
24	26	0	13	10	17	8	52	53	15	42	170	33	99	14
計	776	478	751	677	563	594	657	815	694	706	1,471	1,102	1,438	748

	西豊永	天坪	平石	横山	奈比賀	上やなせ	佐喜浜	堂ヶ森	鳥形山	八杉森
8月12日	1	11	—	32	—	18	17	6	23	18
13	14	9	29	20	45	41	76	33	61	25
14	6	18	30	17	39	75	106	100	76	46
15	120	209	329	122	104	151	185	292	211	94
16	41	124	196	48	37	50	37	74	267	43
17	14	60	121	23	15	11	18	38	36	26
18	29	60	87	0	—	7	7	12	44	1
19	10	44	89	17	14	63	20	35	122	25
20	15	11	29	7	18	124	5	66	115	32
21	—	—	—	—	1	13	7	49	5	1
22	21	36	21	22	47	187	38	133	80	68
23	148	115	188	76	56	202	17	146	175	101
24	18	79	62	10	5	69	30	54	133	17
計	437	776	1,181	394	381	1,011	563	1,038	1,348	497